九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

KalpalatA と AvadAnamAlA の研究（8）：Jayamuni, TJAM 第14章（I), SMRAM 第21章, KalpalatA 第84章

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院 ： 教授

http://hdl.handle.net/2324/2329146

出版情報：南アジア古典学. 14, pp.1-123, 2019-07-20. 九州大学文学部インド哲学史研究室
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kalpalatā と *Avadānamālā* の研究（8）

— Jayamuni, TJAM 第 14 章 (I), SMRAM 第 21 章, *Kalpalatā* 第 84 章 —

岡野　潔

南アジア古典学 第 14 号 別刷
South Asian Classical Studies, No. 14, pp. 1–123
Kyushu University, Fukuoka, JAPAN
2019 年 7 月 発行

南アジア古典学 (South Asian Classical Studies) 14, 2019

Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (8)
— Jayamuni, TJAM 第14章 (I), SMRAM 第21章, Kalpalatā 第84章 —

九州大学　　岡野 潔

この「Kalpalatā と Avadānamālā の研究」と題する論文は、『南アジア古典学』誌上で発表がなされてきて今回で８回目になる。論文タイトルが示すように、この一連の論文の研究内容は次の（１）と（２）の二つに大きく分けられる。

（１）アヴァダーナマーラーのジャンルに属する、ネパールで作られた梵語の諸作品の校訂研究。

（２）クシェーメーンドラ作の『菩薩アヴァダーナの如意蔓』Bodhisattvāvadānakalpalatā の梵文・蔵訳の校訂研究。

８回目の本論文も、この（１）と（２）のそれぞれに対する写本研究を続行するものであるが、今回は（１）において、これまでの約15年間の私によるアヴァダーナマーラーの写本研究をふり返り、これまでの自分の一連のアヴァダーナマーラーの写本研究に対して、それは「ジャヤムニ Jayamuni が筆写した諸写本による研究」であったという研究史上の位置づけを行いたい。そしてマーラー文献の研究においてこの Jayamuni 筆写の写本という特徴づけがどのような意味をもつかを多少考察したい。それが本論文の第一部の１である。

その後、第一部の２として、『如来出生アヴァダーナ・マーラー』Tathāgatajanmāvadānamālā の第14章前半部（第1〜244偈）の梵文テクストの校訂・翻訳を示したい。これはその仏伝作品に対するこれまでの原典研究の継続である。

次に本論文の第二部では、『善説・偉大な宝珠アヴァダーナ・マーラー』Subhāṣitamahāratnāvadānamālā について、まず Jayamuni が筆写したその作品の写本の奥書にある筆写年 (?) の日付の問題について修正した私の意見を報告し、その後に第二部の２として、その作品の第21章である「パーンチャーラ王のアヴァダーナ」Pāñcālarājāvadāna の梵文テクストの校定・和訳を示したい。この第21章のアヴァダーナは、昨年私が本誌に発表した『六道頌』Ṣaḍgatikārikā の、第１偈以外の全部の梵文が中に収められている作品である。

第三部では、上記（２）の研究として、クシェーメーンドラ作『菩薩のアヴァダーナの如意蔓』 Bodhisattvāvadānakalpalatā の第84章「マドゥラスヴァラのアヴァダーナ」Madhurasvarāvadāna の校訂・翻訳を行う。今回は校訂に新たに２本のデープン寺写本を加えた。

第一部
ネパールの仏伝アヴァダーナマーラーの研究

1．Jayamuni 写本について

この『南アジア古典学』誌を中心に発表を続けてきた、梵文のアヴァダーナマーラー類の諸文献に対する私のこれまでの研究は、その特徴を一言で表現するなら、**「Jayamuni が筆写した諸写本に基づくアヴァダーナマーラー諸文献の研究」**といえる。この15年間にアヴァダーナマーラー作品に対して行った私の一連の校訂は、Jayamuni が筆写した写本を底本としながら、同時にそれ以外の写本も読みの確認のため見る、というやり方によって基本的に進められてきた。その点が、高畠寛我と黒田親が60年以上前に手がけた二つのアヴァダーナマーラー文献である Ratnāvadānatattva (≒ Subhāṣitamahāratnāvadānamālā) と Padyalalitavistara (= Tathāgatajanmāvadānamālā) の研究を新たにやり直す私の写本研究の方法的な特徴、といってよいように思う。

この Jayamuni という人物の上に、近年 Mahāvastu や Divyāvadāna(mālā) や Avadānaśataka などのネパールの梵文仏教説話文献を扱う写本研究者たち（Formigatti, Tournier, Marciniak など）の関心が集まっている[1]。Jayamuni は17世紀中頃に Patan (= Lalitpur) で仏教写本の筆写などの活動を通してネパール仏教の学問的振興のため大いに活躍した金剛師（vajrācārya）であり、優婆塞（upāsaka）であった。彼は曾祖父の Abhayarāja の時（Amaramalla 王の頃 ca. 1529-1560）に創建された有名な Mahāb(a)uddha 寺を父親の Jīvarāja から受け継いだ。ネワール仏教の歴史を伝える文献（vaṃśāvalī）によれば、若い頃に Jayamuni は、彼の故国に良質の仏教写本が無く、また学識ある立派な仏教の指導者がいないことが仏教衰退の原因になっていることを残念に思い、婆羅門の行者（daṇḍin）に変装してインドのカーシーに行って学者から梵語文法などを学び、仏教写本を蒐集した。そして学業を終えて Patan に戻り、故郷の仏教の学問的振興のために、諸写本の筆写や寺院での宗教活動を通して働き、仏教の伝統を復活させて、「Mahāb(a)uddha の大学者（paṇḍita）」という名声を得た、という[2]。この熱意ある学者は特にネパールにおける梵文仏教説話文学作品群の写本伝承に対して強い使命感と危機感をもっていたらしく、写本を貝葉から紙に移行させねばならない17世紀の転換期に

---

1. この第 1 節の最後の「参照文献」にそれらの研究者たちの研究を挙げる。

2. Jayamuni という人物については、Wright (1877: 208); Tatelman (1997: xii-xvii).; Tournier (2012: 96, fn. 61) ; Formigatti (2016), p. 121 ff.; Marciniak (2017a: 105) ; Tournier (2017: 384-392) ; Bajracharya & Michaels & Gutschow (2015: I, 103, II, 88) などの記事を参照した。Tatelman (1997) の指摘は岡野 (2013: 325) でも短く紹介している。

あたって、説話文献を中心にした諸写本の入念な筆写活動によって地上から正しい読みの写本伝承が途絶えてしまわないようにする、良心的な梵文の筆写師としての役割をよく果たした。彼は良質の伝承をもつ古い貝葉の写本を探した上で、出来るだけ誤りの少ない紙写本を次の世代に伝えるため注意深く、梵文テクストの意味を理解しながら筆写を行い、必要と思えばテクストの修正や作品の編集的な作業さえ辞さなかった。最近の諸研究によって Divyāvadāna(mālā) や Mahāvastu や Avadānaśataka のような大きな作品の写本において、彼は写本の筆写の作業の中で作品の姿を整える編集的な作業までも（頻繁ではないが）行っていたことが確認された[3]。世に忘れられ朽ちようとしている古い貝葉写本の梵文テクストを学問的に正しく写し伝えようという熱意から作成された彼の紙写本は強い影響力をもち、彼の後の時代に作られた多数の若い紙写本が派生する元の写本としての役割を果たしている場合が多い[4]。梵文仏教説話文学文献の領域における彼の筆写活動は、17世紀とそれ以降のカトマンドゥ盆地における仏教説話文学の展開に、たぶんわれわれが想像している以上に、大きな役割を果たしているようである。特に一部のアヴァダーナマーラー文献はもしかしたら彼の Mahābuddha 寺を中心にした Patan 地域で彼の指導の下に製作が促されて、作られた可能性もあると私は考えている（この点は後述する）。ネパールの梵文アヴァダーナ文献の写本研究において現在、特にこの Jayamuni という17世紀の大立者が筆写した写本に焦点を当てて、諸作品の伝承研究を進めることが求められている。

---

3. Jayamuni が写本の筆写にあたって作品内容に施した編集的な作業とは、例えば次の様なものであった：Gopadatta の Maitrakanyakāvadāna を Divyāvadāna の中に編入した。また彼は恐らく Mahāvastu の中から Padmāvatījātaka を除外した。Mahāvastu の作品名を Mahāvastu-avadāna と改名した。また彼は Avadānaśataka では少なくとも39章 Anāthapiṇḍada の箇所でテクスト伝承の欠落の穴埋めを別の作品からした。

4. 例えば Jayamuni は Mahāvastu の最古の貝葉本 Sa に基づいて 1657年に紙写本 Na を作ったが、その紙写本からそれ以降の数多くある紙写本が派生している。Marciniak (2017b: 105) を参照。また Liland (2009: 80) によれば筆写年のわかる Bodhicaryāvatāra 紙写本中で Jayamuni 筆写の紙写本 H 380/8 が最も古いことが確認できる。幾つかの作品で、Jayamuni が紙写本を作ったことが当時その作品の存在が知られることにつながり、他の紙写本を次々に生じさせるきっかけになっているようだ。（ちなみに彼が紙に書いて普及させた Bodhicaryāvatāra が Aśokāvadānamālā において第９章にある事は恐らく偶然ではない。Aśokāvadānamālā という作品は Jayamuni の活動期の17世紀中葉かそれ以後に、Jayamuni の Mahābuddha 寺院の影響下で編集されたことがその事から推測される。）—— Mahāvastu の写本の場合、Jayamuni がその作品に対して持つ学問的熱意が逆に、彼の紙写本への筆写において貝葉写本の古い仏教梵語の読みを古典梵語に近づけようという危険な努力となってしまった事は残念である。しかし忘れられ眠っていた多くの古い文献を彼が熱意ある筆写によって蘇らせた功績は大きい。

ネパールで写本で伝承された多くの梵文仏教説話文献、特に多くのアヴァダーナマーラー類の諸文献に対して、諸写本の校訂と研究を楽に行うコツは、この Jayamuni という人物に筆写された写本が存在しないかどうかを確かめて、あればその写本を研究の中軸に据えることにある。この研究のコツさえ心得ていれば、アヴァダーナマーラー類の写本研究の労苦を相当に減らすことが出来ると私は思う。

私の研究をふり返ると、2004年頃に九州の地で独りアヴァダーナマーラー類の写本研究を始めた時、どのように写本研究を進めたらよいのか、五里霧中の手探りの状態にあった。しかし入手可能な様々の梵文仏教説話文献のネパール写本の複写を集めて校訂を志すうちに、試行錯誤の中で、書きぶりから相当の梵語力と良心的丁寧さが感じられる、或る筆跡によって書かれた紙写本を、私は自然に校訂のために重要視するようになった。その端正な筆跡で書かれた何本かの写本が、すべて同一の筆写者の手によるものか、それとも似た字体をもつ別々の手によるものなのか、当初はよくわからなかったが、ともかくもそのよく似た筆跡で筆写された紙写本を底本に用いながら校訂を進めるのがよいという、アヴァダーナマーラー類の写本研究のコツを自然につかむに至った。そしてこれまで私が Subhāṣitamahāratnāvadānamālā と Tathāgatajanmāvadānamālā の研究において底本に用いてきた両写本のその似た筆跡を残した人は、複数いたのでなく、Jayamuni 一人であると今や確信するに至った。つまりこれまで進めてきた両アヴァダーナマーラーの校訂に底本として用いてきた紙写本を書いた筆写者が Jayamuni であったことが、私にやっと判然とした。私はその古のネパールの筆写者の名前などについて、迂闊にも[5]、私は長い間きちんと考察することを怠っていたが、そ

---

5. ここで「迂闊にも」と私が表現したわけは、6年前の岡野 (2013) の論文執筆に際し、私は Saṃbhadrāvadānamālā の写本の最後の葉の奥書に、ネパール暦807年（西暦1686年）の日付と一緒に、筆写者の名としてまさしく Jayamuni の名前が書かれていることに気づいていた。また Saṃbhadrāvadānamālā と Tathāgatajanmāvadānamālā の両仏伝が同じ筆跡であることは岡野 (2013) の論文に記した。前者の写本の筆写者が Jayamuni であるというその事実から、その時に私は、同種の文献で同じ筆跡をもつ Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の写本（B 101/3）も、その筆写者が Jayamuni であるとの推測をきちんとなすべきであった。しかし私はその時、推測のその決定的な1歩を踏み出すことが出来なかった。本論文の第二部で後述するように、Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の写本について、当時私は迂闊にも、その奥書の後に別人の手によって書き加えられた post-colophon を疑わずに、ネパール暦1012年（西暦1892年）に筆写された写本と見なしていたため、その誤った年号の存在が私の推測の決定的な1歩を踏み出すことの障害になっており、Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の筆写者を、その筆跡の類似性が強く示唆しているにもかかわらず、Saṃbhadrāvadānamālā の写本の筆写者である17世紀の Jayamuni と繋げることが出来なかった。そのように私は6年間もその推測の重要な1歩を進めることが出来ず、その Jayamuni という筆写者の名前の問題を放置してしまっていたが、最近 Formigatti (2016) による Jayamuni の筆跡に着目した論文を読んで、他の Jayamuni 写本の画像から筆跡を再確認すると同時に、迷いの原因であった Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の

れら２本の写本のよく似た字を書いた写本の筆写者が同一人物であり、ほかならぬ Jayamuni であることに私が確信をもてたのは、最近の Formigatti (2016) や Tournier (2017) などによる、Jayamuni という人物に注意を向けた研究のおかげである。ただ、Jayamuni が筆写した諸写本を調査した彼らの最近の研究においては、私がこれまで校訂に用いてきた Subhāṣitamahāratnāvadānamālā と Tathāgatajanmāvadānamālā の彼の写本について何ら注意が向けられず、言及がなされていない。彼らのその研究を読んだ私は、Jayamuni 筆写の写本であると彼らが既に認めている何本かの作品の写本の複写を取り出して、改めて写本の筆跡をよく見比べてみた。それによって、私はこれまで自分が長年校訂の底本に用いてきた上述の２本のアヴァダーナマーラー写本がまさしくその Jayamuni の筆写であることを確信することが出来た。それによって私は、これまでの15年間の校訂研究の中で、なぜ自分がその Jayamuni という人物の筆跡をもつ写本を ―― その筆写者の名前すらよく調べようともせぬままに ―― 最も重視するというやり方を自然に取るに至ったのか、写本研究におけるその自分が取った手法の適切さ・方法的妥当性についても、嬉しくも自ら納得できたのである。私がこれまで大して苦労せずに上記２種類のアヴァダーナマーラーの研究を長年持続することが出来たのは、Jayamuni の書いた諸写本を用いていたおかげであった。Jayamuni という筆写師こそ、私のこれまでのアヴァダーナマーラーの校訂研究において、正しい無苦労の路を歩ませてくれた恩人だったのである[6]。

---

post-colophon にある年号の問題も、写本本体の筆写年を示すものではないと、自分の認識の誤りに気づくことが出来たため、やっと自分が未解決のままにしておいた３写本の筆写者の問題を、Jayamuni 一人の筆写であるという答で確信を得ることが出来た次第である。

6. 私の研究以前に、Jayamuni 筆写の写本を用いて梵文アヴァダーナ文献の校訂を成功させた研究として、まず Michael Hahn (1985) の Mahajjātakamālā の研究が挙げられる。Hahn が用いた５本の写本の中で Jayamuni 筆写の写本 B (NGMCP B 98/15) は archetype 写本の位置を占め、最も重要なものである。また Asplund (2013) の Kalpadrumāvadānamālā 第26章の校訂は Jayamuni 筆写の写本 S (NGMCP A 117/13 and A 861/5) を底本にした。Asplund はその写本 S が Mahajjātakamālā の写本 B と筆写者が同じであることに Hahn の指摘によって気づいたという（p. 57, note 188）。古くは Fino (1901) の Rāṣṭrapālaparipṛcchā の校訂と、Speyer (1906, 1909) の Avadānaśataka の校訂もそれぞれ Jayamuni 筆写の写本である CUL Add. 1586 と Add. 1611 に依っている。日本では岩本裕 (1979)の Sumāgadhāvadāna の研究も Jayamuni 筆写の写本 CUL Add. 1585 が写本 C として、校訂において底本に近い役割を果たした。彼はその写本について、「写本 C は注意深く且つ丁寧にはっきりと書かれているし、テクストは全般的に正確である」と報告している。別の写本 C' と P はこの C から派生したものにすぎないことが確認された（6-7頁）。このようにアヴァダーナ研究の歴史をふり返る時、研究者たちは長い間気づかなかったが、Jayamuni が筆写した紙の諸写本がその正確さと読みやすさの故に諸テクストの校訂に大きな役割を演じてきたのである。

ここで私のこれまでの一連の仕事をふり返ると、『南アジア古典学』の12号までに発表された、アヴァダーナマーラー類の梵文テクストの校訂がなされた章は、次の通りである。

［Ⅰ］ Tathāgatajanmāvadānamālā (= Sugatajanmaratnāvadānamālā, = Padya Lalitavistara) の1章、3章、4章、8章、13章の梵文テクスト（章名は長いので省略する）

［Ⅱ］ Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (≒ Ratnāvadānatattva) の16章 Pretikāvadāna, 17章 Pretībhūtamaharddhikāvadāna, 23章 Yaśomitrāvadāna, 30章 Jātyandhapretikāvadāna, 31章 Śreṣṭhino'vadāna, 33章 Śreṣṭhipretībhūtāvadāna, 34章 Virūpāvadāna, 35章 Padmākṣāvadāna, 38章 Sūryāvadāna の梵文テクスト

［Ⅲ］ Ratnāvadānamālā の15章 Pretikāvadāna の梵文テクスト

上記［Ⅰ］の Tathāgatajanmāvadānamālā と［Ⅱ］の Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の、二つのアヴァダーナマーラーの諸章に対するこれらの私のテクスト校訂においては、どの章の校訂においても Jayamuni が筆写した写本が、校訂における底本としての役割を果たしている。私は jayamuni 本をベースにしてローマ字転写を行い、その写本の読みの確認のため、追加的に他の写本の読みも見る、という方法を取った。

ただ［Ⅲ］の Ratnāvadānamālā の15章の校訂の仕事だけは、Jayamuni 写本が無かったため、私はそれを底本とすることが出来なかった。Ratnāvadānamālā は、Jayamuni の筆跡をもつ1写本が地上のどこかに現存するのかもしれない。しかし私はそれを私の手元にある諸写本の複写の中のいずれにも見出せなかった。私の Ratnāvadānamālā 15章の研究は、その写本が比較的多いことと、Jayamuni 筆写本が見当たらないという、二つの原因のために時間がかかり、面倒であった。Jayamuni 写本が無くてもなんとか（Paris 写本が比較的頼りになるので）校訂は出来たものの、もし Jayamuni 写本があれば校訂ははるかに楽であったろう。例外的なやり方をしたこの Ratnāvadānamālā 15章の校訂は、逆に私に Jayamuni 写本の有り難さを教えてくれる。

ネパールには「Avadānaśataka を韻文で再話したアヴァダーナ」の諸章を中核部にもつ梵文アヴァダーナマーラーとして、Kalpadrumāvadānamālā, Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (≒ Ratnāvadānatattva), Aśokāvadānamālā, Ratnāvadānamālā の4作品が写本としてある。このことは岡野 (2006) で示した。それら4作品の全体をもって、Avadānaśataka の百章のうちの第4類を除く大部分の章を韻文で再話するという途方もない仕事が、17世紀のネパールにおいてほぼ完了していた、と見なすことが出来る[7]。私は Asplund (2013) が用いた Kalpadrumāvadānamālā の写本 S が実は Jayamuni が筆写したものであることを、Formigatti (2016) の論文を読んで知ったが、このことは大変な朗報であり、こ

7. 岡野 (2006) の3頁にある表 A を参照。

れによって上記の４作品のうち、現時点で Kalpadrumāvadānamālā と Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の２作品について、Jayamuni が書いた「Avadānaśataka 系列のアヴァダーナマーラー」の写本が見つかったことになる。Kalpadrumāvadānamālā の Jayamuni 筆写本が見つかったことは、これまで Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の諸章の校訂において私が楽をしてきたように、あまり苦労せずに校訂テクストを作る道が、Kalpadrumāvadānamālā においても開けたことを意味する。他方、Aśokāvadānamālā と Ratnāvadānamālā の２作品については、現時点で Jayamuni 筆写本の存在は確認されていないようであるが、今後それらの研究においても Jayamuni 筆写本が出来るだけ捜索されるべきである。それらの２作品についても彼の書いた写本の有無を確かめることで、Jayamuni という人物が「Avadānaśataka 系列のアヴァダーナマーラー」の文献ジャンル全体の形成運動に自らどの程度関与していたのかを確認することが出来るであろう。

Avadānaśataka の各章を詩形改稿した諸章を作品の中核的な部分に有する、「Avadānaśataka 系列のアヴァダーナマーラー」の４作品全部を、一度ばらばらに章ごとに解体してから、各章を Avadānaśataka の章の順序で並べ直してゆくと、Avadānaśataka の再話文献としての巨大な１作品を組み立てることが出来るのは驚きであり、それはネパール独自の梵文仏教説話文学のピークの時代を示す、大きな創造的達成であるといえるが、その巨大な再話文献の全部の章がカトゥマンドゥ盆地でいつ誰の手によって作られたものであるかという問題について、それら４作品の校訂を進めながら、私たちは総合的な視点で検討を始めなければならない。現時点ではまだ本格的な議論をなしうるまでには４作品の個々の校訂研究は進んでいないといわざるを得ない。ただ、私個人の憶測を敢えて述べれば、寺院での avadāna 説話を用いた定期的な説法の法会に活用されたと思われるこの「Avadānaśataka 再話文献群」の完成期である17世紀にその製作に取り組んだ梵文の作文担当のグループに、Jayamuni が積極的に関わっていた可能性は高いと思う。Jayamuni は先述のように、ネパールで貝葉の代わりに専ら紙を用いて筆写し始めた、「本格的な紙の世代」の筆写者たちの一人である。ネパール撰述のアヴァダーナマーラーのジャンルの文献において、貝葉の写本は私の知る限り皆無であり、紙写本だけが現存しているという点は、それらの文献の製作年代を考慮する上で、よく注意すべきである。Formigatti (2016: 118, fn. 38) によればカトゥマンドゥ盆地で貝葉に代わって紙を使うことは16世紀頃から徐々に増え、それが本格的になるのは17世紀頃になってからである。アヴァダーナマーラーの写本として、巨大な「Avadānaśataka 再話文献」を作ろうという創作運動の気運は、貝葉を脱して、作成に紙が自由に使える時代になって起こったものではないだろうか。avadāna の梵文再話作品の創作活動は16世紀にネパールで始まっていた可能性もあるが、しかし私はシリーズものとしての、「Avadānaśataka の多くの章の話を再話するアヴァダーナマーラー」という梵文再話作品群の本格的な製作は、カトゥマンドゥ盆地が17世紀に本格的な「紙の時代」を迎えた時に、当時 Patan 地

域の大立者であり特に仏教説話を愛する学者である Jayamuni が、古い貝葉写本（NGMPP E 1554/24）から Avadānaśataka の梵文テクストを入念に紙写本（CUL Add. 1611）として筆写する仕事をしたことをきっかけに、彼が書いた紙写本を利用することで、その製作が開始された可能性を考える[8]。もしその私の推測が正しくて、Jayamuni の作った Avadānaśataka の紙写本（Add. 1611）の完成がその壮大な「再話シリーズ」の諸文献の製作が開始されるきっかけとなっているならば、その「Avadānaśataka 系列のアヴァダーナマーラー」文献の製作プロジェクトに、彼自身も深く関わっていたかもしれないとも想像することは、決して不自然ではないと思われる。彼の筆写の仕事全体から感じられる、梵文仏教説話文献の筆写に対する彼の熱意、関心の高さと、また彼の一族が有していた社会的地位と経済力から、同時代に本格的に始められた Avadānaśataka 再話文献の製作のために彼が影響力を行使し、積極的にその製作を後押ししたことは多分にありえそうである。筆写とは伝統の保護行為であるが、筆写師が説話文献を愛するあまり保護から普及へと活動を拡大させることはありうる。学者 Jayamuni が自ら再話文献の諸作品の作文という創作行為まで従事したかどうかはわからないが、巨大な「Avadānaśataka 再話文献」の製作行為はプロジェクト性の高い、計画的な仕事であるから、その製作運動の音頭を彼が自ら取ったとすれば、彼が動かせる近隣の複数の金剛師や比丘たちの協力を当て込んでの計画であったろう。Jayamuni の寺 Bodhimaṇḍa(pa)-Vihāra (Mahābuddha Bāhā) が接続する Rudravarma-[Vaṅkuli-nāma]-Mahāvirāra (Uku Bāhā)[9] の僧の組合などの、Patan 地域の仏教僧たちにおいて、再話する

---

8. Formigatti (2016: 110-113) の指摘により、Avadānaśataka の紙写本 Add.1611 は Jayamuni が筆写した写本であることが知られる。Formigatti は Jayamuni がその紙写本 Add.1611 の筆写において単に忠実に文字を書き写すだけの役割を越えて、テクストの内容にまで踏み込んだ修正を施した例も指摘している。その Jayamuni 紙写本は Avadānaśataka の紙写本として最古のものである。12～15世紀の Avadānaśataka の貝葉は見つかっているが（cf. Formigatti 2016: 106）、Jayamuni 写本より古い紙写本は見つかっていない。私には『Avadānaśataka を再話するアヴァダーナマーラー』を創作した者たちが、Avadānaśataka の紙写本でなく貝葉写本を直接用いることでその巨大な再話文献の製作に取りかかったとは思えない。製作の準備にはまず原典の紙写本が必要であろう。恐らく Jayamuni による正確で読みやすい Avadānaśataka 紙写本 Add.1611 の筆写行為そのものが、17世紀の Newar の知識人たちにその古い作品が評価され、再話文献が作られるに至るきっかけを与えたのであろう。Jayamuni の Avadānaśataka 紙写本の筆写年こそがそれらの再話文献の製作開始年の上限と見てよいのではないか。

9. Jayamuni が受け継いだ Mahābuddha Bāhā については Locke (1985: 97-101) を参照。Gellner (1992: 265) によれば Mahābuddha 寺の得意とする業務は "artwork [i.e. curios] and scholarship (śāstra-vidyā)" であるという評判が今もある。またその Mahābuddha 寺を支院とする Patan 最古の寺院の一つ Uku Bāhā（= Śivadevavarma-saṃskārita-Śrī-Rudravarma-[Vaṅkuli-nāma]-Mahāvirāra）については Locke (1985: 90-95) と Gail (1991: 22-30) を参照。

各章の製作を実質的に担った数人から成る作文担当の学僧たちの存在を想像してみるのが現実的ではないかと私は思う。Patan 地域は当時も Newar 仏教の中心地であった。そのように想像してみた場合、Jayamuni の役割は梵文の再話を創作する複数の者たちの全体の指揮監督や校閲をする者ではなかったか[10]。彼はそれらの者たちが下書きとして作った梵文アヴァダーナマーラーのテクストを語学的にチェックしながら、作品の最終完成形となる紙写本を自らの手で筆写して、将来の筆写生たちが用いるべき原本たるテクストを確立する仕事をしたのではないだろうか[11]。

さてネパールの「仏伝アヴァダーナマーラー」の３作品、Tathāgatajanmāvadānamālā, Saṃbhadrāvadānamālā, Bhadrakalpāvadāna には冒頭において Jayaśrī が説法を行うという枠物語があり[12]、例えば Tathāgatajanmāvadānamālā の第１章においては、かつて Aśoka

---

10. 「Avadānaśataka を再話するアヴァダーナマーラー」の諸章の作文を担当した者たちは、言語と文体の高い同質性から判断して、同じ地域で同じ教育を受けた同時代の人であったと思われる。彼らは紙などを与えられて、担当する章の重複がないように、章の分担計画のもとに、連絡を取り合いながら作業にかかったであろう。しかし全部で何人が作文を担当したかは難しい問題であり、マーラー文献の諸章の個性の分析は将来の課題となる。

11. Saṃbhadrāvadānamālā の写本の奥書には、Jayamuni によって「筆写された」（likhita）と書いてあり、「作られた」（kṛta）とは書いてない。しかし Jayamuni がもしその本文テクストの作文まで担当していたとしても、その作品は建前上はあくまで Jayaśrī 師がした弟子への説法をそのまま忠実に記したとする著者名なき宗教文献であるため、「作られた」と書くわけにはゆかないであろう。つまりもし Jayamuni が実質的に編集して作ったとしても、その写本の奥書には「Jayamuni によって筆写された」と書かざるを得なかったであろう。── また次の点についても考えなければならない。仮に或るアヴァダーナマーラーが Jayamuni を作者（編集者）・兼・筆写者とする Autograph（自筆本）であったなら、その写本に誤写は皆無であろうか。誤写の有無で自筆原本かどうかを判断できるだろうか。いや、自筆原本でも誤写は少しはありうるだろう。なぜなら作者の手元には紙に走り書きされた草稿があって、草稿から編集作業を行いつつ清書を行う時に、単純ミスとしての書き誤りが生じるからである。Jayamuni が（Tathāgatajanmāvadāna の如き）再話作品の原本のただの筆写者であるのか、それとも作者（編集者）・兼・筆写者なのかを、誤写の性質と頻度から判断するとしても、その判断は相当に難しい。Jayamuni が作品の原本の非常に近くに位置することは確かである。

12. 現在知られている、この Jayaśrī の枠物語をもつ文献は、ネパール撰述の三種の梵文仏伝 avadānamālā である Tathāgatajanmāvadāna, Saṃbhadrāvadāna, Bhadrakalpāvadāna の外に、次の諸作品がある：Aśokāvadānamālā, Guṇakāraṇḍavyūha, Mahajjātamālā, Lakṣacaityasamutpatti, Vicitraratnāvadāna[mālā]（Vicitrakarṇikāvadāna の韻文 Recension）ならびに Svayambhūpurāṇa の７種の version のうちの３種の version（10章本や12章本など）。Tatelman (1997: xii) を参照。これらの文献は Jayamuni の寺の影響下に17世紀以降に編集または再編集されたと思われるが、Svayambhūpurāṇa がその枠物語を得た年代は Tatelman (1997: xvi) によればもっと古く遡るかもしれない（この年代は今後の課題となる）。── なお Vicitrakarṇikāvadāna は少なくと

王に高僧 Upagupta が行った説法（つまりアヴァダーナマーラーの中身たる説話の説法）を、改めて Jayaśrī という師が Bodhimaṇḍa という名の寺で弟子たちに再話した、とその枠物語は語る。つまり本来インドの Upagupta に由来する説法をネパールの地において再話した者は Jayaśrī であり、その説法の場所は Bodhimaṇḍa の寺 であると、作品冒頭に置かれたその枠物語は、ネパールでそのアヴァダーナマーラーが作られた説法の由来を教えてくれる。

アヴァダーナマーラー自身の記述から、作品の内容である法話は、釈尊以来、次の様な３段階で説かれたと想定されていると判断できる[13]：

第１段階（釈尊の説法）：インドで釈尊が弟子の Ānanda（阿難）に原話となる法話を語った。その法話は Upagupta 長老に到るまで伝承された。

第２段階（百年後の説法）：釈尊の滅後百年に、アショーカ王に Upagupta 長老がその法話を「師から聞いたとおりに」説き、その法話はネパールまで伝承された。

第３段階（ネパールでの説法）：ネパールで Jayaśrī が弟子たちに Bodhimaṇḍa の場で、その Upagupta 長老に由来する法話を再話した。

この第３段階で、Jayaśrī という伝説の師がネパールで法話をなした場所 Bodhimaṇḍa（あるいは Bodhimaṇḍapa）は、Patan にある Jayamuni が親から受け継いだ寺 Mahābuddha の別名なのである。これは Tatelman (1997: xv) が指摘した。

Jayaśrī の説法を聞いた一番弟子の名は、再話文献の諸作品によって違っており、Jinaśrī, Jineśvara, Jineśvari, Jayavāgīśvara と、名が変動する[14]。Mahajjātakamālā に出てくる

も二つの異なる Recension が存在するようであり、散文を多く有する版と、韻文版とがある。後者は東海大写本 No. 5 では Vicitraratnāvadāna[mālā] という名で記されるが、Jayaśrī の枠物語をもつのはこの後者の版であることを、岩本裕 (1967: 188-195) は指摘している。私が Vicitrakarṇikāvadāna の東大写本（No. 371, 373）を確認したところ、岩本が報告する前者の版と同じで、第1章の冒頭に Jayaśrī の枠物語は見られない。ただ 東大 No. 371 の第1葉表に記されたネワール語のメモ書きには Jayaśrī の枠物語を伺わせる記述がある。

13. 岡野潔 (2014), 111頁を参照。

14. Tathāgatajanmāvadāna (I. 6, 8, 14, 20) と Bhadrakalpāvadāna においては、説法を行う師の名が Jayaśrī であり、弟子の名が Jinaśrī である。Saṃbhadrāvadānamālā においては第1章14偈以降で、説法を行う師の名が Jayaśrī であることが何箇所かで確認できるが、しかし奇妙にもその師の名前が第1章2偈の一箇所においては Jayaśrī ではなく Jinaśrī になっている。その作品では Jinaśrī と Jayaśrī が同一人物で、同じ師の名として用いられているとしか、文脈上理解できない。その師の弟子の名は Jayavāgīśvara である（I. 6, 19）。また別の説話文献を見てみると Bṛhatsvayaṃbhūpurāṇa では（Haraprasad Śāstrī ed., pp. 4-6）、師の名前が Jayaśrī である点は変わらないが、弟子の名は Jineśvari である。Vicitrakarṇikāvadānamālā (I. 1-4, 10) では Jinaśrī と Jineśvara の両方が出、Mahajjātakamālā (Hahn ed., I. 19, 24, 25) では Jinamuni である。Tatelman

同じ枠物語の中では（I, 19, 24 25）弟子の名は Jinamuni とされている。それらの師や弟子たちの名前との類似性から考えて、Bodhimaṇḍa 寺の住職である Jayamuni という人物は、自身を Jayaśrī の教えを受け継ぐ一人と考えていたために、自分の Jayamuni という名と関連がある伝説上の Jayaśrī という偉大な師が登場する枠物語を、説話集の冒頭に置きたかったのではないだろうか。つまり Jayaśrī という本当に実在したらしい僧に遡る法統が Patan にあって[15]、その Jayaśrī 以来の法統に自身も属すると自覚するが故に、Jayamuni と名乗ったのだろうか。Jayamuni と Jayaśrī との間にある何らかの精神的な絆が、名前の類似から考えられる[16]。

Patan の南にある Jayamuni の寺院 Mahābuddha Bāhā（= Bodhimaṇḍa Vihāra）は、Patan 最古の寺院の一つ Rudravarma-Mahāvirāra (= Uku Bāhā) に繋がる寺院であり、釈尊の開悟したインドの Bodhgayā にある Mahābodhi 寺の菩提道場（bodhimaṇḍa）の菩提塔を大まかに模した、現在でも Patan 観光の目玉の一つになっているシカラ様式の大きな塔をもつ寺院であり、それ故にこの Mahābuddha Bāhā は別の呼び名として Bodhimaṇḍa「菩提道場」（ただし Bhadrakalpāvadāna では Bodhimaṇḍapa「菩提の舎殿」つまり菩提の寺と表現される）と呼ばれる[17]。その Mahābuddha 寺院はネパール暦 685年（西暦1565年）に Jayamuni の曾祖父によって建築が着手され、その後建築を受け継いだ祖父や父を Jayamuni も手伝って、ネパール暦 721年（西暦1601年）に寺院が完成した[18]。

(1997), xiii を参照。

15. Tatelman (1997: xiv) はネワールの歴史書 vaṃśāvalī に登場する Jayaśrī という仏僧について調査すると同時に、現に Patan に三つの Jayaśrī の名を冠した寺、Jayaśrī Mahāvihāra が存在することも報告している。その中の最も古い寺は 1391 年創建らしい。

16. Jayamuni の家系については４代前まで歴史書でかなり詳しく確認できる。彼の父親 Jīvarāja や祖父 Bauddhajū や曾祖父 Abhayarāja などの一族は特に Jaya- で始まる名前を持っていない。Jayamuni の寺である Mahābuddha（= Bodhimaṇḍa-vihāra）に Jayaśrī の法統があったかどうかは不明である。作品ごとに変動する弟子の Jinaśrī, Jineśvara, Jineśvari, Jayavāgīśvara, Jinamuni などの名前には胡散臭さがあり、Jayamuni の時代に彼のアヴァダーナマーラー文献の権威づけのためにJayaśrī の対告者として名前が適当に創作された可能性があろう。

17. Tatelman (1997), p. xv を参照。

18. Locke (1985), p. 100 を参照。Locke はこの曾祖父 Abhayarāja の家族と子孫（すなわち Jayamuni の一族）が大いに栄えていたことを次のように記している。"The family of Abhayarāja grew and prospered and his descendants are now scattered in a number of further branches of Uku Bāhā. According to tradition his immediate descendants built or repaired five bāhās which became branches for their families: Yachu Bāhā, Naudau Bāhā, Sikuca Bāhā, Twāya Bāhā and Jātha Bāhā. Another lineage broke off and took up residence in U Bāḥā Bahī, making that their own, thereby becoming a separate sangha established in a bahī. The descendants of Abhayarāja still inhabit these branches and

もし Patan の Jayamuni の寺院がその Jayaśrī という伝説上の師から始まる法統と繋がっていたとすると、Jayamuni は自分の Bodhimaṇḍa-Vihāra つまり Mahābuddha の場で説法がなされたと再話文献の枠物語が言うところの、その Jayaśrī の説法の法統を受け継いで世に弘める者として、自分の伝灯上の役割を自覚していたのかもしれない。もしそうであるならば、Jayamuni は、彼が受け継いだ有名な寺に与えられた使命・家業として、Jayaśrī という師が Bodhimaṇḍa で説法する枠物語をそなえたそれらの再話文献を、Rudravarma-Mahāvirāra (= Uku Bāhā) の僧の組合に属する他の金剛師・学僧などを動員して製作させる理由があったと考えておかしくはないであろう。アヴァダーナマーラーを自ら筆写したばかりか、それらの再話文献の製作を後押しし、自ら企画・監督したとしても不自然ではないほどの、それほどの強い動機が彼にはあったかもしれない[19]。そのことが、「Jayaśrī が Bodhimaṇḍa で説法した」という、恐らく彼の寺の大きな影響力をうかがわせる枠物語の内容設定から推測されよう[20]。

学者が気づいている範囲で少なくとも五つのネパール撰述の梵文説話文献において、作品冒頭に Mahābuddha の語が見出される。その事はそれらの作品の編集あるいは筆写行為の背後に Jayamuni の Mahābuddha 寺院があることを濃厚に感じざるを得ない[21]。17

---

in later years built further braches [...]". (p. 100)　当時 Jayamuni が再話文献群を製作する音頭を取れるだけの高い社会的立場と経済力を具えていたことは間違いないようだ。

19. Jayamuni の、Bodhgayā の仏塔を模したシカラ塔をそなえた Mahābuddha-vihāra は、彼の曾祖父 Abhayarāja がインドの釈尊の悟りの聖地 Bodhgayā を巡礼した時に受けた宗教体験 —— すなわち Wright (1877: 204-205) が英訳する歴史書によれば、その聖地に３年滞在していた時にその曾祖父は空から天女 (Mahābuddha の侍女) たる Vidyādharī-devī が彼に呼びかける声を聞き、Mahābuddha が彼の供養と信仰を受けとめたことと、彼がネパールの家に戻るべきであってその家に仏が訪れるであろうことと、王から恩恵を受けるであろうことを彼に告げ知らされたという —— その体験の感激により創建され、彼の子孫たちによって次第に建築が進められ、Jayamuni の父の代に完成された、Mahābuddha たる釈尊を崇拝する寺院である。その事を考えると、浩瀚な仏伝アヴァダーナマーラーの２作品を自ら筆写した Jayamuni が釈尊の仏伝文献に強い関心をもっていたことは、頷けるものがある。釈尊の仏伝と前生話に関する再話文献の製作の地が、彼の寺を中心とする地域であったとしても、Jayamuni の宗教的立場の点から不思議ではない。

20. ただし Jayamuni が筆写したアヴァダーナマーラーがすべて Jayaśrī の枠物語をもっているわけではない。３仏伝マーラー文献はその枠物語をもっているが、Avadānaśataka 再話のマーラー文献群は Aśokāvadānamālā 以外は Upagupta の枠物語だけで、Jayaśrī 枠物語をもたない。そして Jayamuni が写した Aśokāvadānamālā はまだ写本が見つかっていない。

21. 作品の冒頭に Mahābuddha の語が見出される五つのネパール撰述の梵文説話文献について出典を示すと、次のとおり：（１）Saṃbhadrāvadānamālā の I. 1ab に yo bhagavān **mahābuddhaḥ** paśyan pāti jagat sadā / という句がある。（２）Tathāgatajanmāvadānamālā I. 1ab にも（１）と

世紀頃に成立した幾つかの説話集は Mahābuddha と関係する僧たちによって作られたのではないか。

ネパールの梵文の Avadānaśataka を再話する「Avadānaśataka 系列アヴァダーナマーラー」文献群は、すでに19世紀の西洋の学界において Léon Feer 等によって写本の研究が始められたが、しかし西洋の学会で未だその連続性がよく認知されていない、もう一つの重要なネパール撰述のアヴァダーナマーラーの１ジャンルが、「仏伝の再話アヴァダーナマーラー」と名づけることができる、ネパール撰述の梵語仏伝文献のジャンルである。それは Lalitavistara や Mahāvastu や Buddhacarita などのインド伝来の難解な梵文作品を一般のネワール人に聞いてわかるようにするための、15世紀から始まり17世紀に成熟期に達する当時の文化的 domestication の動きとして、古い権威ある梵文仏伝文献を参照しつつ、それを anuṣṭubh 韻律を用いて耳で聞いて理解しやすい形に再話したアヴァダーナマーラーであり、具体的には Tathāgatajanmāvadānamālā と Saṃbhadrāvadānamālā と Bhadrakalpāvadāna という３作品が写本として現存している[22]。

この「仏伝の再話アヴァダーナマーラー」のジャンルに属する文献においては、Jayamuni が書いた諸写本が極めて重要な役割を果たしている。上記の３文献のうち、Tathāgatajanmāvadānamālā と Saṃbhadrāvadānamālā には、Jayamuni 筆写の写本が存在しており、それらは校訂の底本となりうる良い写本である。（Jayamuni の筆写であると私が判断した理由は後述する。）

私がこれまで『南アジア古典学』誌上に校訂を発表してきた Tathāgatajanmāvadānamālā の梵文テクスト研究は、その Jayamuni 写本を底本に用いており、校訂がすでに発表された諸章として第１章、３章、４章、８章、13章がある。また第14章 (前半) の梵文校訂テクストが今回の論文において、更に追加される。

もう一つ別の「仏伝の再話アヴァダーナマーラー」の作品である Saṃbhadrāvadānamālā (東大 Matsunami No. 429) は、その作品内容から判断して、その Tathāgatajanmāvadānamālā の仏伝の「続き」として作られたものと思われる[23]。内容的に「続き」であ

同じ句がある。Cf. 岡野 (2014), p. 112.（３）Mahajjātakamālā の冒頭 0.e に namaḥ śrīmate bhagavate śākyamunaye **mahābuddhāya** namo namaḥ // という帰命文があり、また I. 1ab にyaḥ śrīmān bhagavāñ chāstā **mahābuddho** munīśvaraḥ / という句がある。（４）Guṇakāraṇḍavyūha の I. 1ab に yaṃ śrīghano **mahābuddhaḥ** sarvalokādhipo jinaḥ / という句がある。（５）Svayambhūpurāṇa の10章本にも I. 1cd に śrīghanaṃ taṃ **mahābuddhaṃ** vandeka'haṃ śaraṇāśritaḥ / という句がある。（３）～（５）については Tournier (2017: 385-386) を参照。

22. この３作品については岡野 (2013) で報告した。

23. 同じジャンルで、Tathāgatajanmāvadānamālā の「続き」の作品として位置するもう一つの仏伝 avadānamālā 文献である Bhadrakalpāvadāna よりも、Saṃbhadrāvadānamālā のほうが、作品全体

るその作品も Jayamuni によって筆写されていることは、Jayamuni においては両者の仏伝が連続する一つの巨大な仏伝作品として捉えられていたことを示唆する。

このように、「Avadānaśataka の再話アヴァダーナマーラー」と「仏伝の再話アヴァダーナマーラー」の両方のジャンルの写本群にまたがって、後世に影響力をもった写本の筆写活動をしたことが明らかになった Jayamuni という人物は、17世紀のネパールにおける梵文仏教説話文学の製作運動を考察する上で、最も鍵となる人物であろう。このジャンルにおける編集を含む写本筆写活動を評価する時、彼は「梵文アヴァダーナマーラー諸文献の完成者」として位置づけられるかもしれない。この Jayamuni が17世紀の梵語によるネパール撰述説話文献の完成期における最大の立役者であるかも知れないという見通しのもとに、今後のネパールの梵文仏教説話研究は、彼と彼の周辺にいる Patan の学僧たちの活動に焦点を当てながら、ネパールにおける17世紀を中心にした梵文仏教説話文学の展開の歴史、インド伝来の書承の仏教説話や仏伝がネワール文化の中で土着化してゆく詳細な変化を、考察してゆくことが望まれる。

★

私は先に Subhāṣitamahāratnāvadānamālā と Tathāgatajanmāvadānamālā と Saṃbhadrāvadānamālā の３作品が Jayamuni 筆写の写本であると語ったが、これらの３作品が Jayamuni の筆写であることは、Formigatti (2016) や Tournier (2017) の研究では指摘がなされていない。そこで、何を根拠に私が Jayamuni の筆写であると判断したのか、以下にその３作品の写本について説明を行いたい。

まず Tathāgatajanmāvadānamālā と Saṃbhadrāvadānamālā の Jayamuni 写本について説明する。私が Jayamuni の筆写であるとみなす Tathāgatajanmāvadānamālā の写本は、これまでこの作品に対する校訂研究で私が底本として用いた、A という記号で表記される１写本（NGMCP A 125/3）である。ただ正確にいえば、そのA写本には３種類の筆写者の筆跡を見分けることが出来る。この A という１本の写本は、私が2013年の論文で仮に X, Y, Z と名づけた３人の筆写者が書いた葉が合わさって出来ている。その写本の前半部分の大半の葉を筆写したのは写字生 X であるが、その前半部分でも所々に、後の時代の写字生らしい Y や Z が差し替えて新調した葉がはさまる。またその写本の後半部分

の章立てから判断して、作品の成立が古いと思われる。Saṃbhadrāvadānamālā では Jayaśrī の説法の場が Bodhimaṇḍa であるが、Bhadrakalpāvadāna では Bodhimaṇḍapa となっていることは、時代あるいは環境の変化を示すのではないか。かなりの部分で Saṃbhadrāvadānamālā と同じ章を有する Bhadrakalpāvadāna には Jayamuni 筆写の写本が見つかっていないようであるが、そうであれば、その作品は Jayamuni の生存した時代まで遡らない、18世紀初め頃の編集と推測される。

は明らかにYが筆写したものである[24]。このA写本は、Xが書いた前半部分の後に、YやZが書いた葉が追加された歴史をもつのだろう。その作品の前半部分（現存する写本の最古の部分）を書いた写字生Xこそが Jayamuni なのである。どうして Jayamuni が書いたと推測できるかというと、推測の最大の根拠は、そのA写本つまり Tathāgatajanmāvadānamālā における写字生Xの字は、Saṃbhadrāvadānamālā (東大 Matsunami No. 429) の写本の字と同じと判断されることである（Figure 3 と 4 を参照）。その筆跡の同一性については、岡野 (2013) の論文においてすでに私は指摘した。

そのA写本の最後の葉には奥書があり、写本の筆写年が記されているが、その奥書はXではなくYの筆跡で書かれている。その、明らかに後の時代に追加された部分に属している奥書は、その最後の葉がネパール暦1004年つまり西暦1889年に書かれたものであることを伝える[25]。その奥書により、A写本に後半部分の筆写を追加し（新テクストの追加というより、Xが書いた後半部分を再編集するためにそれを新しい紙に書き直しただけの可能性もある）、また前半部分のあちこちに新しい紙で補修を行った写字生Yは、19世紀後半に活動した写字生であることがわかる。このように、A写本の古い前半部分を書いたX (= Jayamuni) の筆写年を、その最後の葉の奥書そのものから知ることは、諦めざるをえないのであるが、しかし Saṃbhadrāvadānamālā の写本については、Jayamuni による筆写年がわかる。その写本は最初の葉の裏面（1b）から最後の葉の裏面（330b）の2行目まで、ずっとA写本のX (= Jayamuni) と同じ筆跡で書かれている。その最後の葉の裏面（330b）には4行の文が書かれており、その裏面の第1行と第2行目は Jayamuni の筆跡による奥書である。第3行と第4行目（つまり終わりの2行）の文は、それまでの筆跡とは違う、やや下手な筆跡で書かれている。その2行の post-colophon の文は別人が追記したものであろう。その文の前に記された、Jayamuni 本人が書いたと思われる2行（裏面 330b の第1行と第2行目）の奥書は次のとおりである：

[sva]sti nepālika-varṣe haya-śūnya-gajānvite pauṣe śukla-trayadaśyāṃ rohinyāṃ śubhayogake / śukravāre samāpteyaṃ buddhāvadānamālikā / likhitā bodhisattvena **śrījayamuninā** mu[dā] /

和訳：　めでたし。ネパール年 haya (7) śūnya (0) gaja (8)（つまりネパール暦807年；西暦1686年）の Pauṣa 月の白分13日、Rohinī 宿との善き合の時、金曜日に、筆写が完成した Buddhāvadānamālikā が、菩薩である śrī-Jayamuni によって、歓びをもって筆写された。

Buddhāvadānamālikā（仏陀のアヴァダーナの花鬘）と記された作品名は、仏伝アヴァダーナマーラー文献たる Saṃbhadrāvadānamālā の別名である。śrī-Jayamuni の名が記さ

24. 岡野 (2013), 324頁註4を参照。

25. 岡野 (2013), 326頁を参照。

れたこの奥書の２行の文が、Saṃbhadrāvadānamālā の写本が Jayamuni の筆写であると判断することの、決定的な第１の根拠になる。また重要な第２の判断根拠として、その写本の筆跡がある（Figure 4 を参照）。Formigatti (2016) の論文で Jayamuni が筆写した写本として認められている12本の写本のうち、５本ほどの写本の複写が私の手元にもあるので、それらの Jayamuni 筆写本の筆跡をこの写本と比べて見ることで、また同時に Tathāgatajanmāvadānamālā の筆跡（Figure 3）とも比べて見ることで、私は同じ筆写者の筆跡であると判断した。更に第３の根拠として、写本の紙の寸法がある。Tathāgatajanmāvadānamālā の Jayamuni 筆写本（A 123/5）の紙の縦横の長さ（42.5 × 8.5 cm）、ならびに Mahajjātakamālā の Jayamuni 筆写本（B 98/15）の紙の縦横の長さ（43 × 9 cm）が、この Saṃbhadrāvadānamālā の写本の紙の縦横の長さ（16 3/4 × 3 1/2 inch. [= 42.5 × 8.9 cm]）と、大体合致することを指摘できる。

こうして Saṃbhadrāvadānamālā の写本を Jayamuni の筆写と確定することが出来る。すると、その写本と同じ筆跡ならびに写本の紙の長さをもつ Tathāgatajanmāvadānamālā の A 写本の筆写生 X も Jayamuni である、とかなりの確信をもって知ることが出来る。姉妹的な関係にある二つの仏伝アヴァダーナマーラーのどちらの写本も Jayamuni は基本的に各葉８行のレイアウトで書いている。Saṃbhadrāvadānamālā 写本は筆写年代から判断して、Jayamuni の最晩年の筆写であろう。老いた Jayamuni はその仏伝を「歓びをもって」（mudā）、熱心に書いたのである。

次に Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の写本も、次の二つの根拠から Jayamuni の筆写と判断できる。第１の根拠は他の Jayamuni の筆写本たちと同じ筆跡をもつことである（Figure 1 と 2 を参照）。これが最も大きな判断根拠となる。第２の根拠はその紙写本の寸法であり、Jayamuni が筆写した写本と認められている Kalpadrumāvadāna（A 117/13）と比べてみると、写本の紙の縦横の長さが大体同じであるといえる。NGMCP によれば Subhāṣitamahāratnāvadānamālā は 36.5 × 9 cm、Kalpadrumāvadāna は 35 × 8.3 cm である。また１葉が８行で書いてある点も両写本は同じであり、最初に定規で細い横線を引いてから字を書くやり方も両写本は同じである。この Kalpadrumāvadāna と Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の両写本は、同じ「Avadānaśataka 系列のアヴァダーナマーラー」に属する作品である故に、Jayamuni が筆写にあたって、意図的に両者をほぼ同じ大きさの紙に同じ様なレイアウトで筆写したのだと思われる。

以上、３作品の写本を私が Jayamuni 筆写本と認定した理由を述べた。Formigatti (2016: 112-113), Tournier (2017: 385-388), Marciniak (2017c 123-125) によって Jayamuni の筆写と推測される13本の写本のリストに、私が本論文で追加したこの３写本を加えると、以下のような16本の Jayamuni 筆写本のリストが出来る：

A List of Manuscripts Written by Jayamuni

Avadānaśataka (CUL, Add. 1611)

Rāṣṭrapālaparipṛcchā (CUL, Add. 1586)

Sumāgadhāvadāna (CUL, Add. 1585)

Divyāvadānamālā (NGMCP A 123/6)

Mahāvastu (NGMCP B 98/14)

Bodhicaryāvatāra (NGMCP H 380/7)

Kalpadrumāvadānamālā (NGMCP A 117/13 to A 118/1; A 861/5)

Mahajjātakamālā (NGMCP B 98/15)

Dhīmatīparipṛcchāvadāna (NGMCP A 131/14)

Sphuṭārthā Abhidharmakoṣavyākhyā by Yaśomitra (CUL, Add. 1041)

Dṛḍhādhyāśayāvadāna by Gopadatta (NGMCP H 380/7)

Bodhisattvajātakāvadanamālā (NGMCP B 98/4)

Sugatāvadāna (NGMCP H 380/7)

［以下、岡野が新たに表に追加する３写本：］

Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B 101/3)

Tathāgatajanmāvadānamālā [= Padya-Lalitavistara] (NGMCP A 123/5)

Saṃbhadrāvadānamālā (東大 Matsunami No. 429)

この Jayamuni が筆写した作品のリストは、今後の研究によってさらに作品数が増えてゆくことが期待される[26]。

本節の参照文献

Asplund, L. (2013): *The Textual History of Kavikumārāvadāna: the Relations Between the Main Texts, Editions and Translations.* Stockholm: Stockholm University.

Bajracharya, M. & Michaels, A. & Gutschow, N. (2015): *History of the Kings of Nepal: A Buddhist Chronicle.* 3 vols. Kathmandu: Social Science Baha.

Demoto, M. (2006): "Fragments of the Avadānaśataka", In: Jens Braarvig (Ed.), *Buddhist Manuscripts, Volume III of Manuscripts in the Schøyen Collection*, 207–244. Oslo: Hermes Publishing.

Fino, L. (1901): *Rāṣṭrapālaparipṛcchā sūtra du Mahāyāna*, Bibliotheca Buddhica No.2, St.-Petersburg.

Formigatti, C. (2016) "Walking the Deckle Edge: Scribe or Author? Jayamuni and the Creation of the Nepalese Avadānamālā Literature", *Buddhist Studies Review*, 2016, pp. 101-140.

---

26. 上記の Jayamuni 筆写写本リストの中の CUL の諸写本は Cambridge Digital Library (https://cudl.lib.cam.ac.uk/collections/sanskrit/1) で写本画像を確認できた（2019年3月12日）。Jayamuni の Mahāvastu 写本（B 98/14）の筆跡字体表は、Marciniak (2017b) の巻末にある。

Gail, A.J. (1991): *Klöster in Nepal. Ikonographie buddhistischer Klöster im Kathmandutal, Mit 145 Abbildungen und einigen Textillustrationen*, Alademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Gellner, D.N. (1992): *Monk, Householder, and Tantric Priest. Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*, Cambridge Studies in Social and Cultural Anthropology, Cambridge University Press.

Hahn, M. (1985): *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā). Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal.* Asiatische Forschungen, Bd.88, Wiesbaden.

Haraprasād Śāstrī (1894-1900): *The Vṛhat Svayambhū Purāṇam, containing the traditions of the Svayambhū Kshetra in Nepal*, Bibliotheca Indica, work 133, Calcutta.

Liland, F. (2009): *The transmission of the Bodhicaryāvatāra*, A Thesis presented to University of Oslo.

Locke, J.K. (1985): *Buddhist Monasteries of Nepal. A Surveys of the Bāhās and Bāhīs of the Kathmandu Valley,* Kathmandu: Sahayogi Press.

Marciniak, K. (2017a): "Padumāvatī-jātaka attested in the Manuscript Sa of the Mahāvastu", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology*, XX, pp. 68-102.

Marciniak, K. (2017b): "The oldest paper manuscript of the Mahāvastu", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology*, XX, pp. 103-121.

Marciniak, K. (2017c): "A manuscript of Gopadatta's Jātakamālā copied by Jayamuni Vajrācārya", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology*, XX, pp. 123-128.

Speyer, J. S. (1906, 1909): *Avadānaśataka, a century of edifying tales belonging to the Hīnayāna,* Bibliotheca Buddhica No. 3, St.-Pét. 2 vols.

Tatelman, J. (1997): *The Trials of Yaśodharā. A Critical Edition, Annotated Translation and Study of Bhadrakalpāvadāna II–V.* Unpublished PhD thesis, Oxford University.

Tournier, V. (2012): "The Mahāvastu and the Vinayapiṭaka of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology*, Vol. XV, 2012, pp. 87-104.

Tournier, V. (2017): *La formation du Mahāvastu et la mise en place des conceptions relatives à la carrière du bodhisattva.* EFEO Monographies No. 195, Paris.

Wright, D. (1877): *History of Nepāl. Translated from the Parbatiyā by Shew Shunker Singh and Pandit Gunānand; with an Introductory Sketch of the Country and People of Nepāl by the Editor, Daniel Wright.* Cambridge: Cambridge University Press.

岩本裕 [Iwamoto Yutaka] (1979)：『スマーガダー＝アヴァダーナ研究』、開明書院。

岡野潔 [Okano Kiyoshi] (2006)：「Subhāṣitamahāratnāvadānamālā について」、『南アジア古典学』 1号 (2006年7月), 1-19頁。

岡野潔 (2013)：「ネパールの仏伝アヴァダーナ・マーラー Tathāgatajanmāvadānamālā」、『印度学仏教学研究』62巻1号 (2013年12月), 323-330頁。

岡野潔 (2014)：「Kalpalatā と Avadānamālā の研究（5）—TJAM 第1章 と Virūpāvadāna と Padmākṣāvadāna —」『南アジア古典学』9号、2014年7月、101-198頁。

筆跡の同一性の確認

Figure 1: MS written by Jayamuni: Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B 101/3)

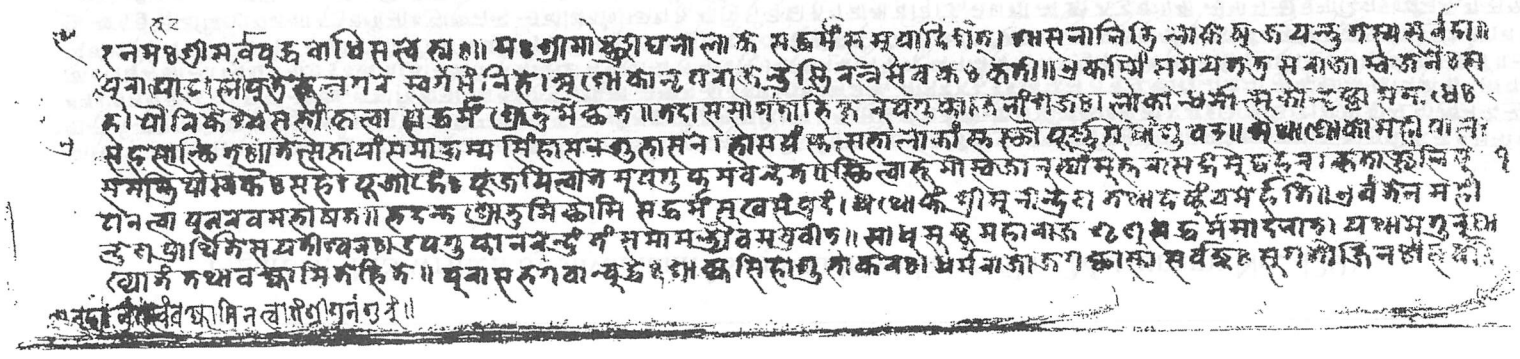


Figure 2: MS written by Jayamuni: Kalpadrumāvadānamālā (NGMCP A 117/13)

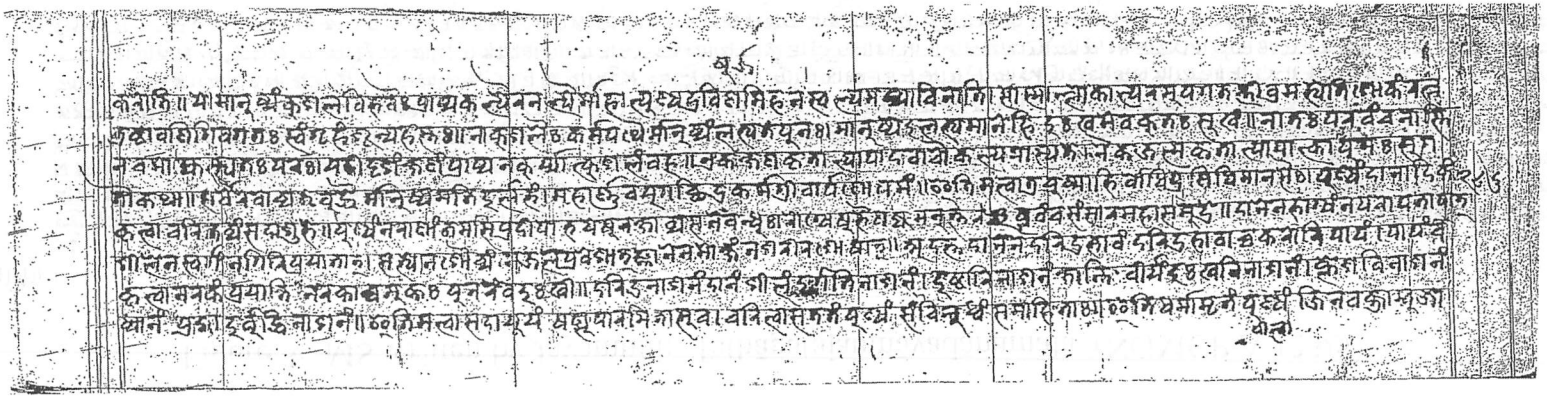


Figure 3: MS written by Jayamuni: Tathāgatajanmāvadānamālā (NGMCP A 123/5)

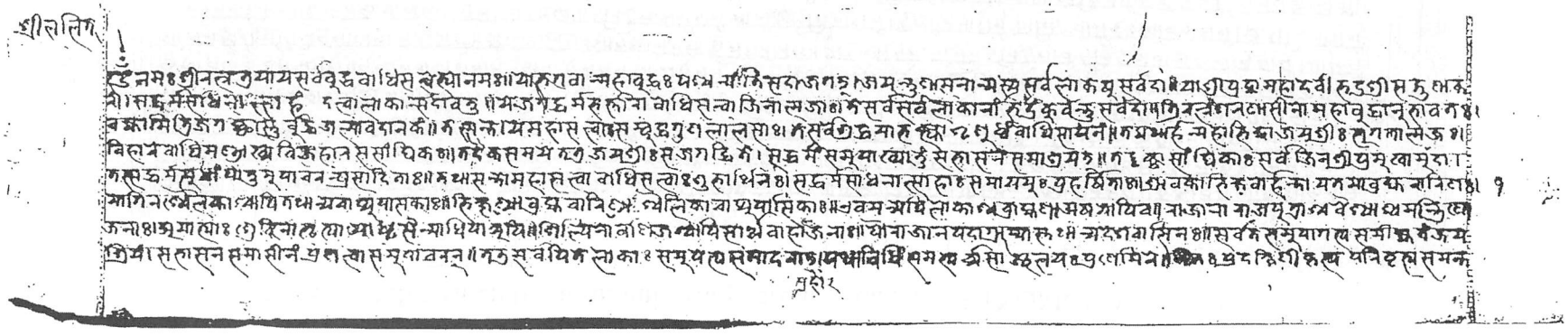
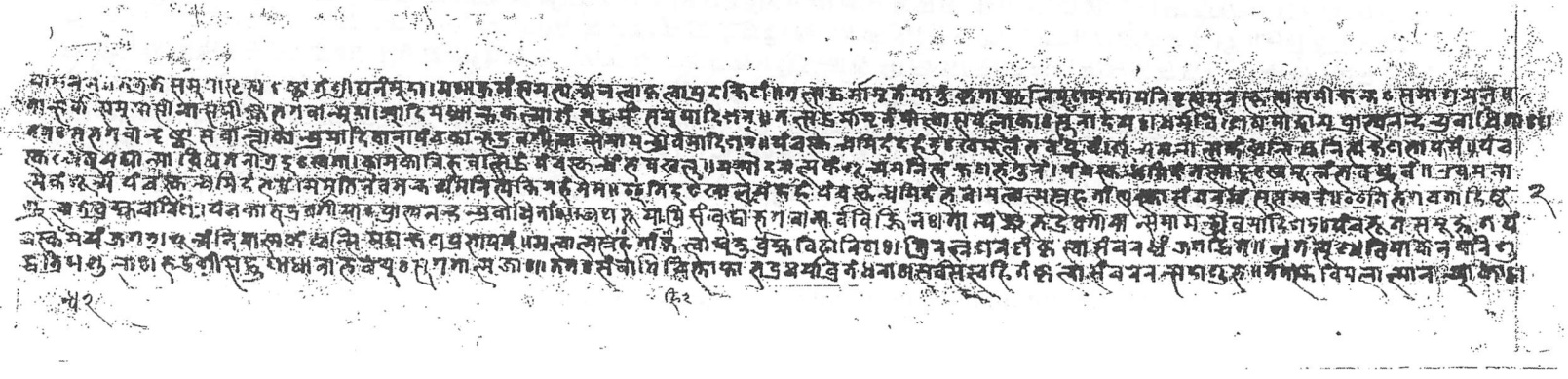


Figure 4: MS written by Jayamuni: Saṃbhadrāvadānamālā (Matsunami No. 429)



2. Tathāgatajanmāvadānamālā 第14章前半の校訂・翻訳

略号　A = NGMPP A123/5 [a ms of TJAM, = BauDV 51(87)]

B = NGMPP B100/2 [a ms of TJAM, = BSP ca266(3-14)]

D = NGMPP D43/4-44/1 [a ms of TJAM]

H = HOKAZONO's Lalitavistara edition, 1994

L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902

TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

ネパールの仏伝アヴァダーナマーラーである TJAM 第14章の前半部分（第1〜244偈）の校訂・翻訳を以下に行う。（後半部分は次回に掲載する予定である）

Tathāgatajanmāvadānamālā 第14章
Śilpakalāsarvavidyāsaṃdarśanayaśodharāstrīratnasamāgamaparivarta

A 82a1-93b4;　B 122a3-139b4;　D 111b6-128a9[27]

以下のテクスト中の [ ] の数字は A 写本の葉を示し、例えば [82b] は A 写本の第82葉の裏面であることを示す。また TJAM テクストが Lalitavistara の内容と密接に関係する箇所では、その詩節の右側に ≈ という「類似」を意味する記号を使って、Lefmann（略号 L）と外薗幸一（略号 H）の両方の Lalitavistara 出版本[28]の参照すべき箇所を示した。例えば H 552(vs.)1 とあるのは外薗本の 552頁の第1詩節をさす。(vs.) は詩節を意味する。また H 550.3-4 とある場合は、散文の箇所であり、外薗本の550頁3-4行を意味する。

---

27. 本章のテクスト校訂においては主に A 写本と B 写本を用いたが、A 写本（Jayamuni 筆写写本）が底本となる。B 写本は A 写本から派生した粗悪な伝承本であると思われる。もし注に B 写本の誤りの全部を異読として報告すると、注に記す異読の数が無用にやたら膨大なものになってしまう。そのため注に記した B 写本の異読は網羅的なものではない。ほとんどが A 写本の読みを確認するだけに限定したものである。また B 写本以外に、必要に応じて D 写本（系統的に B と同じであるがもっと粗悪な伝本）も参照した。

28. S. Lefmann (1902, 1908): *Lalita Vistara. Leben und Lehre des Śākya-buddha*, erster Teil: Text, 1902; zweiter Teil: Varianten-, Metren- und Wörterverzeichnis, 1908, Halle.　外薗幸一 (1994)：『ラリタヴィスタラの研究　上巻』、大東出版社。

[82a1] atha so 'rhan mahābhijña *upaguptaḥ sudhīr yatiḥ /
aśokaṃ taṃ mahāsattvaṃ samāmantryaivam abravīt // 1
tatra śuddhodano rājā prāsāde mantribhiḥ saha /
śākyair mahallakaiś cāsau saṃsthāgāre nyaṣīdata // 2 ≈ L 136.10-11; H 550.3-4.
tadā śākyāḥ samutthāya nṛpateḥ purato gatāḥ /
pādābje praṇatiṃ kṛtvā sādaram evam abruvan // 3 ≈ L 136.11-12; H 550.4-5.
yat khalu deva jānīyāt kumāro 'yaṃ tavātmajaḥ /
dṛṣṭvarṣibhir nimittajñair evaṃ samupadiśyate // 4 ≈ L 136.12-14; H 550.5-6.
kumāro 'yaṃ mahāsattvo yady abhiniṣkramiṣyati /
sarvajño 'rhan mahābhijñas tathāgato bhaved api // 5 ≈ L 136.14-15; H 550.7-8.
yady ayaṃ śrīguṇārakto rājyāśrame ramiṣyati /
cakravartī mahīndraḥ syāt sarvadharmādhipaḥ prabhuḥ // 6 ≈ L 136.15-16; H 550.8-9.
bhadraśrīsadguṇādhāraḥ saptaratnasamanvitaḥ /
sarvavidyādhipaḥ śāstā sarvasattvahitārthabhṛt // 7 ≈ L 136.16-17; H 550.9-10.
nirjitya durjanān sarvān bodhayitvā prayatnataḥ /
saddharme saṃpratiṣṭhāpya saṃrakṣan pālayed jagat // 8 ≈ L 136.20-137.1; H 550.13-14.
tasmād asya kumārasya niveśane matir yathā /
rakto niṣkramaṇe naiva tathāśu kriyatāṃ prabho // 9 ≈ L 137.1; H 550.15.
yady ayaṃ ramaṇīrakto ratisaukhyaṃ prabhokṣyate /
tadā rājyābhiraktātmā naivābhiniṣkramiṣyati // 10 ≈ L 137.1-2; H 550.15-16.
tato 'smaccakravartiśrīvaṃśacchedo bhaven na hi /
mānitāś ca bhaviṣyāmo 'pradhṛṣyāś cānyarājabhiḥ // 11 ≈ L 137.2-4; H 550.16-18.
iti taiḥ kathitaṃ śrutvā śuddhodano nṛpādhipaḥ /
evaṃ khalv iti vijñāya tān paśyann evam abravīt // 12 ≈ L 137.5; H 550.19.
bhavanto 'tra pure kasya śākyasya śrīguṇānvitā /
kanyā yānurūpāsya samīkṣyāgacchata drutam // 13 ≈ L 137.5-6; H 550.19-20.
iti rājñoditaṃ śrutvā śākyāḥ sarve 'numoditāḥ /
ekaikas taṃ nṛpaṃ natvā sāñjalir evam abravīt // 14 ≈ L 137.7; H 550.21.
kanyā me duhitā rājan kumārasyānurūpikā /
tat tāṃ kanyāṃ sa[82b]mādāya kumārāya prayacchatu // 15 ≈ L 137.7-8; H 550.21-22.
evaṃ taiḥ prārthite sarvaiḥ śākyaiḥ pañcaśatair api /
niśamya sa pitā rājā manasaivaṃ vyacintayat // 16
durāsadaḥ kumāro hi sarvāḥ kanyāḥ subhadrikāḥ /
tad yām icchati saṃvīkṣya tām ādāya dadāny aham // 17 ≈ L 137.9-10; H 550.23-24.
iti niścitya bhūmīndraḥ sabhāsanasamāśritaḥ /

sarvāñ chākyān samāmantrya sampaśyann evam abravīt // 18
bhavanto 'sya kumārasya yasyāṃ mano 'bhirocate /
tām evādātum icchāmi tat saṃpradātum arhatha // 19
iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā sarve 'pi te mudā /
nṛpānujñāṃ samāsādya kumārasyālaye yayuḥ // 20
tatra sarve 'pi te śākyāḥ samupāśritya sādaram /
kumāraṃ taṃ samāmantrya paśyanta evam abruvan // 21 ≈ L 137.11; H 550.25-26.
kumāra yat pravṛddho 'si tad vaṃśasthitisādhane /
kuladharmasamācāraḥ saṃcarasva prajāhite // 22
tad asmākaṃ sutāḥ kanyāḥ sarvā api subhadrikāḥ /
yāsu te rocate cittaṃ tāḥ samāhartum arhasi // 23
iti taiḥ prārthitaṃ śrutvā kumāra evam abravīt /
saptame 'hni pradāsyāmi prativākyaṃ niśamyatām // 24 ≈ L 137.12; H 550.26.
iti proktaṃ kumāreṇa śrutvā sarve tato gatāḥ /
śākyā etat pravṛttāntaṃ nṛpasyāgre nyavedayat // 25
tat samākarṇya bhūpendraḥ śuddhodanaḥ prabodhitaḥ /
kumāraḥ kiṃ vaden nūnam iti dhyātvā nyaṣīdata // 26
tataḥ sarvārthasiddho 'sau kumāro 'pi samāhitaḥ /
pūrvabuddhān anusmṛtvā manasaivaṃ vyacintayat // 27
viditā hi mayānantāḥ kāmadoṣā bhavālaye /
saraṇāḥ sabhayāḥ kāmāḥ savairāḥ śokaduḥkhadāḥ // 28 ≈ L 137.14; H 552(vs.)1ab.
viṣāgnisannibhās tīkṣṇā asidhārābhayaṃkarāḥ /
kleśamānamadādhārā bhadraśrīsadguṇāntakāḥ // 29 ≈ L 137.15; H 552(vs.)1cd.
iti kāme na me chando duḥkhamūle sukhārthinaḥ /
vana ekānta āśritya rantum eva samutsahe // 30 ≈ L 137.16; H 552(vs.)2ac.
na hi śobhāmy ahaṃ strībhiḥ sahāgāre ramann api /
samādhinihitātmaiva śobheyaṃ ni[83a]rjane vasan // 31 ≈ L 137.16-17; H 552(vs.)2b-d.
iti sa cintayan dhīmān upāyakauśalārthavit /
sarvān sattvān samālokya kleśavyākulitāśayān // 32 ≈ L 137.18-20; H 552.11-13.
mahākāruṇyam utpādya bodhayitvā prayatnataḥ /
sarvān sattvān samuddhartuṃ punar evaṃ vyacintayat // 33 ≈ ibid.
ākīrṇapaṅkajātāni padmāni vardhitāni hi /
*sthitvākīrṇanarendrāṇāṃ madhye labheyam arhaṇām // 34 ≈ L 137.21-22; H 552(vs.)3ab.
ekānte nirjane 'raṇye kāṣṭhapāṣāṇavat sthitaḥ /
kaṃ sattvaṃ bodhayan dharme yojayeyaṃ sadā śubhe // 35 ≈ L 138.1-2; H 552(vs.)3cd.

yadā saṃbodhicittena caturbrahmavihārikaḥ /
bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā pracarāmi jagaddhite // 36
tad yathā prakṛtaṃ pūrvaṃ praṇidhānaṃ tathādhunā /
sarvasattvahitaṃ kṛtvā pūrayeyaṃ nṛpo bhavan // 37
ye cāpy āsan mahāsattvā bodhisattvāḥ sadā bhave /
rājyāśrame samāśritya sattvān dharme 'bhyayojayan // 38 ≈ L 138.3; H 552(vs.)4a.
yathākāmaṃ sukhaṃ bhuktvā ramitvā saha bhāryayā /
satsantatiṃ samutpādya kuladharme samācaran // 39 ≈ L 138.4; H 552(vs.)4b.
tato rājyaṃ parityajya sarvān api parigrahān /
pravrajya nirjane sthitvā pracerur duṣkaraṃ tapaḥ // 40 ≈ L 138.5; H 552(vs.)4c.
tato māragaṇāñ jitvā niḥkleśā nirmalendriyāḥ /
arhantaḥ prāpya saṃbodhiṃ sambuddhapadam āyayuḥ // 41 ≈ ibid.
aham api tathā teṣāṃ saṃbuddhānāṃ sutāyinām /
saddharme bodhisattvānām anuśiṣye jagaddhite // 42 ≈ L 138.6; H 552(vs.)4d.
iti niścitya dhīmān sa bodhisattvo vicakṣaṇaḥ /
paṭṭikāyāṃ suvarṇasya saṃlilekha tathā svayam // 43 ≈ L 138.11; H 554(vs.)6a.
na me prākṛtakāntāyāṃ mano 'bhirocate khalu /
yā nu saṃcarate dharme, tasyā me vābhirocate // 44 ≈ L 138.12-14; H 554(vs.)6b-d.
yasyā na vidyate citta īrṣyāmātsarya iṣṭatā /
mithyādharmābhivādaṃ ca daśapāpānusaṃratiḥ // 45
sadā saddharmaraktā yā satyadharmārthasādhinī /
viśuddhakulasaṃjātā pariśuddhendriyāśrayā // 46
svaparātmasa[83b]mācārā caturbrahmavihāriṇī /
dānaśīlakṣamāraktā lajjālur damitendriyā // 47
bhadraśrīsadguṇādhārā kuladharmānucāriṇī /
sarvaśāstrakalāvidyāvicakṣaṇā pativratā // 48 ≈ L 138.19-22; H 554(vs.)8.
nirmadamānagarvā ca nirlobhā paritoṣitā /
viṣayānatiraktā ca pānabhogyānatispṛhā // 49 ≈ L 139.1-4; H 554(vs.)9.
anuddhatāpragalbhā ca nirbhrāntācañcalā sudhīḥ /
*anatistyānamiddhā ca pariśuddhatrimaṇḍalī // 50 ≈ L 139.5-9; H 554(vss.)10, 11a.
saddṛṣṭidharmasaṃraktā mīmāṃsābhiratāśayā /
snehārdritasucittā ca dāsīkomalamānasā // 51 ≈ L 139.10; H 554(vs.)11b, d.
śvaśrūśvaśurasadbhaktibandhumitrasuhṛtpriyā /
akuhā mārdavā sādhvī saṃvṛticaraṇārjavā // 52 ≈ L 139.11-15; H 556(vss.)11c-12c.
etādṛśīṃ varāṃ kāntāṃ vṛṇīṣva nṛpate vadhūm /

na me prākṛtakāntāyāṃ mano 'bhirocate kila // 53 ≈ L 139.16; H 556(vs.)12d.
iti pattre likhitvā sa sarvārthasiddha ātmanā /
svajanaṃ samupāmantrya sādaram evam abravīt // 54
sādho pattram imaṃ dhṛtvā vraja tūrṇaṃ nṛpālaye /
rahasy enaṃ narendrasya haste dattvā sara drutam // 55
iti tena samādiṣṭaṃ niśamya sa suhṛjjanaḥ /
tatheti pattram ādāya tato 'caran nṛpālaye // 56
tatra sa samupāsṛtya rājño natvā padāmbuje /
kumārapreṣitaṃ pattram idam iti vadan dadau // 57
taṃ saṃpaśyan samādāya śuddhodano narādhipaḥ /
vācayitvā svayaṃ sarvaṃ dhyātvaivaṃ samacintayat // 58
kutraitadguṇasampannā vidyate viṣaye mama /
kasya vā duhitā kāntā bhaved īdṛgguṇāśrayā // 59
nirdoṣā śīlasampannā bhadraśrīsadguṇānvitā /
iti cintāviṣaṇṇātmā tasthau tadgatamānasaḥ // 60
tasminn avasare tatra purohitaḥ samāgataḥ /
evaṃsthitaṃ narendraṃ taṃ vīkṣyaivaṃ paryapṛcchata // 61
rājan kiṃ bhavatām adya duḥkhacintāviṣādatā /
agopyaṃ cet puro 'smākaṃ tat samādeṣṭum arhati // 62
iti tena dvijenoktaṃ niśamya sa narādhipaḥ /
taṃ pattraṃ samu[84a]pasthāpya taṃ gurum evam abravīt // 63
idaṃ pattraṃ kumāreṇa prahitaṃ me puro 'dhunā /
tad enaṃ samudāhṛtya vicārayitum arhati // 64
īdṛgguṇavatī kanyā kasyātra vidyate pure /
samīkṣya tāṃ bhavāñ chāstaḥ puro me prativedaya // 65
iti rājñā samādiṣṭaṃ niśamya sa purohitaḥ /
vācayitvā svayaṃ pattraṃ tatheti pratyabhāṣata // 66
tatas taṃ pattram ādāya purohitas tato gataḥ /
pure sarvatra geheṣu praviṣṭaḥ samalokayat // 67 ≈ L 140.6-8; H 556.18-20.
etadguṇasamāyuktāṃ kanyāṃ kasyāpi mandire /
apaśyan vimanaskaḥ sa purohito 'nyato 'carat // 68 ≈ L 140.8; H 556.20.
tatra so 'nucaran gehe daṇḍapāṇer upācarat /
praviṣṭas tatra saṃvīkṣya varāṃ kanyām apaśyata // 69 ≈ L 140.8-10; H 556.20-22.
tāṃ sukanyāṃ subhadrāṅgāṃ samīkṣya sa dvijo mudā /
strīratnam iyam ity uktvā ciraṃ tasthau vilokayan // 70 ≈ L 140.10-13; H 556.22-25.

tam evaṃ saṃsthitaṃ vipraṃ purohitaṃ vilokya sā /
daṇḍapāṇeḥ sutā kanyā gopākhyā samupāsarat // 71
atha sā kanyakā tasya dvijasya caraṇāmbuje /
praṇatvā sādaraṃ vīkṣya sāñjalir evam abravīt // 72 ≈ L 140.14-15; H 558.1-2.
kim artham iha viprendra samāyāsi yadīcchasi /
tat kāryaṃ me bhavān agre samupādeṣṭum arhati // 73 ≈ ibid.
iti tayoditaṃ śrutvā sa dvijaḥ saṃprasāditaḥ /
saṃpaśyaṃs tāṃ subhadrāṅgīṃ kumārīm evam abravīt // 74
kumāra ātmajo rājñaḥ śuddhodanasya yaḥ sudhīḥ /
dvātriṃśallakṣaṇāśītivyañjanamaṇḍitāśrayaḥ // 75 ≈ L 140.16-19; H 558(vs.)15.
tenātra likhitāḥ pattre vadhūnāṃ ye guṇā varāḥ /
vidyante te guṇā yasyāḥ sā bhāryā hi priyā mama // 76
iti tal likhitaṃ pattram idaṃ dattvā mahībhujā /
vadhūnāṃ darśanārthe 'haṃ preṣito 'tra samācare // 77
ity uktvā sa dvijo vijñaḥ kumārasya guṇān vadan /
tat pattraṃ puratas tasyā gopāyāḥ samupārpayat // 78 ≈ L 140.20; H 558.8.
tad upanāmitaṃ pattraṃ sādāya dārikā mudā /
vācayitvā svayaṃ smitam upadarśyaivam abravīt // 79 ≈ L 140.21-22; H 558.9-10.
vidyante mama te sarve ye tena likhi[84b]tā guṇāḥ /
tena tasyānurūpāhaṃ so 'pi mamānurūpakaḥ // 80 ≈ L 141.1-2; H 558(vs.)16ab.
iti vipra kumārasya pura evaṃ samādiśa /
mātra kārye vilambo 'pi karaṇīyo yadīcchasi // 81 ≈ L 141.3; H 558(vs.)16c.
na hi me prākṛte puṃsi rocate 'dhyuṣituṃ manaḥ /
tad idaṃ hi mahat kāryam āśu sādhaya sadguro // 82 ≈ L 141.4; H 558(vs.)16d.
iti tayoditaṃ śrutvā brāhmaṇaḥ sa prasāditaḥ /
tathetyi pratibhāṣitvā tato 'caran nṛpālayam // 83 ≈ L 141.5; H 558.16.
tatra sa samupāsṛtya saprasannamukhāmbujaḥ /
śuddhodanaṃ narendraṃ taṃ saṃpaśyann evam abravīt // 84 ≈ L 141.5-6; H 558.15-16.
prasīdatu mahārāja yan mayā dṛśyate vadhū /
daṇḍapāṇeḥ sutā kanyā subhadrāṅgī ramopamā // 85 ≈ L 141.6-7; H 558.16-17.
ity etat sarvavṛttāntaṃ brāhmaṇena niveditam /
śrutvā sa janako rājā manasaivaṃ vyacintayat // 86 ≈ L 141.8; H 558.18.
durāsadaḥ kumāro 'pi sukhādhimuktamānasaḥ /
mātṛgrāmo 'pi vijño hi nātmani manyate guṇān // 87 ≈ L 141.8-10; H 558.18-20.
tad atrāśokabhāṇḍāni kārayeyam ahaṃ drutam /

kumāro yāni sarvābhyaḥ kanyakābhyaḥ samarpayat // 88 ≈ L 141.10-11; H 558.20-21.
tatra yasyāṃ kumārasya dṛṣṭir abhinivekṣyati /
tāṃ kumārīṃ kumārasya variṣyāmi subhadrikām // 89 ≈ L 141.11-12; H 558.21-22.
iti niścitya bhūmīndro raupyāni kāñcanāni ca /
ratnāny aśokabhāṇḍāni bahūni samakārayat // 90 ≈ L 141.13-14; H 560.1-2.
tataḥ sa jagatīpālaḥ śuddhodano nṛpādhipaḥ /
sarvatra nagare ghaṇṭāghoṣam evam akārayat // 91 ≈ L 141.14-15; H 560.2-3.
ito 'hni saptame dadyāt kumāro darśanaṃ khalu /
sarvābhyo 'śokabhāṇḍāni kanyābhyaḥ saṃpradāsyati // 92 ≈ L 141.15-16; H 560.3-5.
tatra draṣṭuṃ kumārasya vastrālaṃkārabhūṣitāḥ /
saṃsthāgāre samāyantu sarvāḥ kanyāḥ subhadrikāḥ // 93 ≈ L 141.17; H 560.4-5.
tatra sarvārthasiddho 'sau kumāraḥ saptame dine /
saṃsthāgāre 'bhisaṃkramya bhadrāsane nyaṣīdata // 94 ≈ L 141.18-19; H 560.6-7.
tatra śuddhodano rājā tatpravṛttābhidarśane /
adṛśyapuruṣān gupte samasthāpayad āptikān // 95 ≈ L 141.19-21; H 560.7-9.
tatas tā bhadrikāḥ kanyā vastrālaṃkāramaṇḍi[85a]tāḥ /
sarvā draṣṭuṃ kumāraṃ taṃ bodhisattvaṃ manoramam // 96 ≈ L 142.1-2; H 560.10-11.
tasmād aśokabhāṇḍāni grahītuṃ ca pramoditāḥ /
krameṇa samupākramya saṃsthāgāre samāyayuḥ // 97 ≈ L 142.2-3; H 560.11-12.
tā dṛṣṭvā sa mahāsattvaḥ sarvābhyo 'pi yathākramam /
kanyābhyo 'śokabhāṇḍāni svahastena mudā dadau // 98 ≈ L 142.4-5; H 560.13-14.
tat pradattaṃ samādāya sarvās tā dārikāḥ kramāt /
aśokabhāṇḍam evāśu tato 'caraṃs trapāhatāḥ // 99 ≈ L 142.5-7; H 560.14-16.
tato gopā subhadrāṅgī daṇḍapāṇeḥ sutā sudhīḥ /
kanyāsakhījanaiḥ sārdhaṃ dāsībhiś ca samanvitā // 100 ≈ L 142.8-9; H 560.17-18.
kumāraṃ taṃ mahāsattvaṃ paśyantī dūrato mudā /
suprasannamukhāmbojā tatrāntikam upāśrayat // 101 ≈ L 142.9-10; H 560.18-19.
tāṃ dṛṣṭvā sa mahāsattvaḥ subhadrāṅgīm upāśritām /
saṃpaśyan suprasannāsyas tasthau niścalalocanaḥ // 102 ≈ L 142.10-11; H 560.19-20.
taṃ dṛṣṭvā sā subhadrāṅgī smitānanāntikāśritā /
bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ saṃpaśyanty evam abravīt // 103 ≈ L 142.11-12; H 560.20-21.
kumāra kiṃ mayā kiñcid apakāraṃ kṛtaṃ tava /
vimānayasi yan māṃ tvaṃ tad vadasva nṛpātmaja // 104 ≈ L 142.13; H 560.22.
iti tad uktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa saṃsmitaḥ /
tāṃ gopāṃ bhadrikāṃ kanyāṃ saṃpaśyann evam abravīt // 105

nāhaṃ tvāṃ bhadrike kanye vimānayāmy ahaṃ khalu /
yat tvaṃ paścād ihāyāsi tat kiṃ dāsyāmi te 'dhunā // 106 ≈ L 142.14-15; H 560.23-24.
sarvāṇy aśokabhāṇḍāni sarvābhyo 'pi yathākramam /
āgatābhyaḥ kumārībhyaḥ pradattāni mayā khalu // 107
ity uktvā sa mahāsattvo mahārgham aṅgulīyakam /
tasyai subhadrikāyai svam nirmucya pradadau mudā // 108 ≈ L 142.15; H 560.24-25.
tad aṅgulīyakaṃ dṛṣṭvā samādāya kumārikā /
sā gopā taṃ mahāsattvaṃ vihasanty evam abravīt // 109
iyad eva mahābhāga *mahyam arhati te 'ntikāt /
ity uktvā sā subhadrāṅgī paśyanty eva samāśrayat // 110 ≈ L 142.16; H 560.26.
tac chrutvā sa mahāsattvaḥ sarvārthasiddha ātmanaḥ /
nirmucya pradadau tasya sarvāṇy ābharaṇāny api // 111 ≈ L 142.17; H 562.1.
tāni sarvāṇi sālokya vihasantī subhadrikā /
kumāraṃ [85b] taṃ subhadrāṅgī saṃpaśyanty evam abravīt // 112
ayi kumāra nārhāmi vyalaṃkartuṃ nṛpātmajam /
ity uktvā prākramat tāni dṛṣṭvaivābharaṇāni sā // 113 ≈ L 142.18-19; H 562.2-3.
tat samīkṣya samākarṇya te guptapuruṣās tataḥ /
sahasā samupāsṛtya rājña evaṃ nyavedayan // 114 ≈ L 142.20-21; H 562.4-5.
deva bhavān vijānīyād yac chākyasya mahāmateḥ /
daṇḍapāṇeḥ sutā kāntā gopākhyā śrīsamākṛtiḥ // 115 ≈ L 142.21-22; H 562.5-8.
tasyām eva kumārasya sudṛṣṭiḥ saṃniveśitā /
muhūrtaṃ ca tayo rājan saṃlāpo 'pi pravartitaḥ // 116
iti taiḥ kathitaṃ śrutvā śuddhodanaḥ sa bhūmipaḥ /
purohitaṃ samāmantrya sādaram evam abravīt // 117
bho dvijendra vijānīhi yat kumārasya mānasam /
daṇḍapāṇeḥ sutāyāṃ hi saṃraktaṃ bhavati dhruvam // 118
tad bhavāṃs tasya śākyasya daṇḍapāṇeḥ prayatnataḥ /
bodhayitvā manaḥ kanyāṃ saṃprārthayitum arhati // 119
iti saṃprārthitaṃ rājñā niśamya sa purohitaḥ /
tatheti prativijñapya daṇḍapāṇer gṛhe yayau // 120
taṃ dṛṣṭvā samupāyātaṃ daṇḍapāṇiḥ pramoditaḥ /
sādaraṃ samupāmantrya śuddhāsane nyaveśayat // 121
tatas tadāsanāsīnaṃ brāhmaṇaṃ taṃ samīkṣya saḥ /
daṇḍapāṇiḥ prasannātmā saṃpaśyann evam abravīt // 122
upādhyāya kim arthaṃ hi samāyāti bhavān iha /

yan mama vidyate gehe tat samādeṣṭum arhati // 123
iti tenoditaṃ śrutvā brāhmaṇaḥ sa pramoditaḥ /
daṇḍapāṇiṃ tam āmantrya saṃpaśyann evam abravīt // 124
daṇḍapāṇe nṛpeṇāhaṃ preṣito yat tavāntike /
tadarthaṃ prārthayāni tvāṃ saṃdiṣṭaṃ prabhuṇā yathā // 125 ≈ L 143.1-2; H 562.8-9.
sutāyāṃ te kumārasya mano *'bhirajyate mama /
tan me putrāya te kanyāṃ saṃpradātuṃ tvam arhati // 126 ≈ L 143.2-3; H 562.9-10.
iti rājñā samādiśya dūto 'haṃ prahitas tvayi /
tat te kanyā narendrasya nandanāya pradīyatām // 127
iti tenoditaṃ śrutvā daṇḍapāṇiḥ sa saṃsmitaḥ /
upādhyāyaṃ dvijendraṃ taṃ saṃpaśyann eva[86a]m abravīt // 128
āryāyaṃ kuladharmo no yat kanyā saṃpradāsyate /
sarvakalāguṇajñāya na tu kalāvisaṃvide // 129 ≈ L 143.4-5; H 562.11-12.
kumāraḥ sukhasaṃvṛddho nṛpātmajo durāsadaḥ /
na hi kalāvidhijñaḥ syāt, kathaṃ tasmai pradāsyate // 130 ≈ L 143.5-7; H 562.12-14.
iti tenoditaṃ śrutvā brāhmaṇaḥ sa tataś caran /
nṛpateḥ purato gatvā tathā sarvaṃ nyavedayat // 131
iti taduktam ākarṇya śuddhodanaḥ sa bhūpatiḥ /
taccintāpratibhinnātmā manasaivaṃ vyacintayat // 132 ≈ L 143.8; H 562.15.
yadāpy evaṃ mayā proktaṃ kasmāc chākyakumārakāḥ /
upasthānāya nāyātāḥ kumārasyātmajasya me // 133 ≈ L 143.8-10; H 562.16-17.
tadāpy ahaṃ kumārais tair iti proktaṃ purā mama //
kiṃ vayam samupasthānaṃ mandakasya carema hi // 134 ≈ L 143.10-11; H 562.17-18.
dvidhā tridhā mayākhyātaṃ tair api coditaṃ tathā /
iti dhyātvā viṣaṇṇātmā tasthau garbhālayāśritaḥ // 135 ≈ L 143.11-12; H 562.18-19.
etad vṛttāntam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
sahasā svapitū rājñaḥ purataḥ samupāsarat // 136 ≈ L 143.13-14; H 562.20-21.
tatra taṃ janakaṃ dṛṣṭvā vibhinnāsyaṃ sa ātmajaḥ /
bodhisattvaḥ kumāro 'pi papracchaiva samādaram // 137
kim evaṃ tiṣṭhase tāta dīnacitto nṛpādhipa /
yat te duḥkhaṃ tad ākhyāhi nivārayāni sarvataḥ // 138 ≈ L 143.14; H 562.21-22.
iti putroditaṃ śrutvā pitā sa nṛpatiḥ punaḥ /
tam ātmajam kumāraṃ ca saṃpaśyann evam abravīt // 139
kiṃ kumārātra vakṣyāmi śrutvāpy alaṃ tad ātmaja /
yad aśakyaṃ na tad vācyaṃ śrotavyam api naiva hi // 140 ≈ L 143.15; H 562.23.

iti pitrā samādiṣṭaṃ niśamya sa mahāmatiḥ /
janakaṃ taṃ mahārājaṃ saṃpaśyann evam abravīt // 141
avaśyaṃ tāta vaktavyaṃ yadi me hitam icchasi /
sarvathāhaṃ kariṣyāmi bhavadduḥkhanivāraṇam // 142 ≈ L 143.16; H 562.24.
evaṃ sarvārthasiddho 'sau kumāraḥ pitaraṃ tridhā /
sāñjaliḥ praṇatiṃ kṛtvā papracchaivaṃ samādarāt // 143 ≈ L 143.16-17; H 562.24-25.
tataḥ sa janako rājā daṇḍapāṇyuditaṃ yathā /
tathā sarvaṃ kumārasya nandanasya puro 'vadat // 144 ≈ L 143.18-19; H 562.25-564.1.
taṃ niśamya sa sarvārthasiddho mahāvicakṣaṇaḥ /
ja[86b]nakasya puro bhūyo vihasann evam abravīt // 145 ≈ L 143.19; H 564.1-2.
astīha nagare kaścit kalāvidyāviśāradaḥ /
yo mayā saha saṃvādaṃ kartuṃ śilpe 'pi śaknute // 146 ≈ L 143.19-20; H 564.2-3.
etat putroditaṃ śrutvā janakaḥ sa narādhipaḥ /
bodhisattvaṃ kumāraṃ taṃ saṃpaśyann agadat punaḥ // 147 ≈ L 143.21; H 564.4.
kiṃ putra śakyate śilpam upadarśayituṃ tvayā /
yat kumārānabhijño 'pi kim evaṃ lapase svayam // 148 ≈ L 143.22; H 564.4-5.
iti pitroditaṃ śrutvā kumāro 'pi sa sanmatiḥ /
pitaraṃ taṃ punaḥ paśyan saṃsmita evam abravīt // 149
vāḍhaṃ śaknomy ahaṃ śilpam upadarśayituṃ pitaḥ /
sarvāñ chilpakalāvijñān pure 'tra saṃnipātaya // 150 ≈ L 143.22-144.2; H 564.5-7.
iti putrasamākhyātaṃ niśamya sa narādhipaḥ /
tataḥ tatra pure ghaṇṭāghoṣam evam akārayat // 151 ≈ L 144.3-4; H 564.8-9.
saptame 'hni kumāro 'tra svaṃ śilpaṃ darśayed api /
tad draṣṭuṃ samupāyāntu sarvaśilpakalāvidaḥ // 152 ≈ L 144.4-5; H 564.9-10.
tac chrutvā nagare tatra sarvaśilpakalāvidaḥ /
tad draṣṭuṃ samupāyātāḥ saṃnipatyābhitasthire // 153 ≈ L 144.6-7; H 564.11-12.
tato gopābhidhā kanyā svātmajā daṇḍapāṇinā /
jayapaṭātikā tatra saṃsthāpyaivam agadyata // 154 ≈ L 144.7-8; H 564.12-13.
yo śilpakalābhijñaḥ sarvāñ chilpakalāvidaḥ /
jeṣyatīyaṃ subhadrāṅgī kāntā tasya bhaved api // 155 ≈ L 144.8-9; H 564.13-14.
tataḥ śuddhodano rājā sarvāñ chilpakalāvidaḥ /
purataḥ samupāmantrya saṃpaśyann evam ādiśat // 156
bhoḥ śilpakalābhijñāḥ sarve 'muṣmin mahītale /
draṣṭuṃ śilpaṃ kumārasya pravrajantu purād bahiḥ // 157
iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā śilpakalāvidaḥ /

sarve 'pi te samutsāhās tatra gantuṃ pratasthire // 158
vrajatāṃ puratas teṣāṃ devadattaḥ kumārakaḥ /
tataś caran puradvāra upāyayau madoddhataḥ // 159 ≈ L 144.10; H 564.15.
tadā tatra mahatkāyaṃ śvetavarṇaṃ gajaṃ varam /
arthe sarvārthasiddhasya pure prāveśayañ janāḥ // 160 ≈ L 144.11; H 564.16.
tad dṛṣṭvā devadatto 'sāv īrṣyāmānamadoddhataḥ /
nihantuṃ saṃmukhaṃ tatra saha[87a]sā samupāsarat // 161 ≈ L 144.11-12; H 564.17-18.
tatra sa devadattas taṃ śuṇḍāyāṃ vāmapāṇinā /
gṛhītvā dakṣahastena jaghānaiva capeṭayā // 162 ≈ L 144.12-14; H 564.18-19.
taṃ hatvā sa pramattātmā devadatto 'bhimānikaḥ /
sahasā pracaraṃs tatra bhūpradeśe mudāsarat // 163
tasyānantaram āyātaḥ sundaranandasaṃjñakaḥ /
kumāras taṃ vyasuṃ nāgaṃ dṛṣṭvaivaṃ paryapṛcchata // 164 ≈ L 144.15-16; H 564.20-21.
kenāyaṃ nihato hastī sarvalakṣaṇamaṇḍitaḥ /
īdṛśe 'pi dayā nāsti yasya dhik tasya durmatim // 165 ≈ L 144.16; H 564.21-22.
iti tenoditaṃ śrutvā taddraṣṭāraḥ paurikā janāḥ /
hato 'yaṃ devadattena svayam iti nyavedayat // 166 ≈ L 144.17; H 564.22.
iti taiḥ kathitaṃ śrutvā sundarananda āha saḥ /
aśobhanam idaṃ devadattena prakṛtaṃ nv iti // 167 ≈ L 144.17-18; H 564.22-23.
tataḥ sa taṃ mahānāgaṃ gṛhītvā lāṅgulaṃ svayam /
sahasā nagaradvārād apakṛṣyākṣipad bahiḥ // 168 ≈ L 144.18-19; H 564.23-24.
tadanantaram evāsau bodhisattvo mahāmatiḥ /
rathābhirūḍha ālokya lokāṃs tatra mudāyayau // 169 ≈ L 144.20; H 564.25.
sa taṃ dṛṣṭvā vyasuṃ nāgaṃ tatrasthān paśyakāñ janān /
kenāyaṃ nihato nāga ity evaṃ paryapṛcchata // 170 ≈ L 144.20-21; H 564.25-566.1.
tac chrutvā te janāḥ sarve rathasthaṃ taṃ nṛpātmajam /
kumāram abhisaṃvīkṣya praṇatvaivaṃ nyavedayan // 171 ≈ L 144.22; H 566.2.
iti taiḥ kathitaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
aśobhanam idaṃ vīryaṃ devadattasya durmatiḥ // 172 ≈ ibid.
yad ayaṃ kṣipyate yena dūrato nagarād bahiḥ /
vīryaṃ sundaranandasya śobhate sanmater idam // 173 ≈ L 144.22-145.2; H 566.2-4.
kiṃ tv ayaṃ vigataprāṇo mahākāyo gajo hy api /
klinna1, idaṃ puraṃ sarvaṃ daurgandhena spharisyati // 174 ≈ L 145.2-3; H 566.4-5.
ity uktvā sa mahāsattvo rathastha eva taṃ gajam /
pādāṅguṣṭhena taṃ nāgaṃ gṛhītvā lāṅgule 'kṣipat // 175 ≈ L 145.4-5; H 566.6-7.

tatkṣiptaḥ sa vyasur hastī prākārān parikhān api /
atikramyāśu saṃpātaḥ krośamātre 'patad bhuvi // 176 ≈ L 145.5-6; H 566.7-8.
yatra bhūmipradeśe sa hastī nipatito vyasuḥ /
tatra deśe mahadgartaḥ saṃpravṛtto 'dhunāpi saḥ // 177 ≈ L 145.6-7; H 566.8-10.
evaṃ tasya mahāvī[87b]ryaṃ dṛṣṭvā sarve surā api /
hīhīkārapramuñcantaś cailāni prākṣipan mudā // 178 ≈ L 145.8-9; H 566.11-12.
evaṃ cāpi surāḥ sarve gagaṇasthāḥ pramoditāḥ /
tad dṛṣṭvā vismayākrāntamānasāḥ prababhāṣire // 179 ≈ L 145.9-10; H 566.12-13.
yathāyaṃ puruṣo dhīmān mahāvīryaprabhāvavān /
īdṛkkāyaṃ mahānāgaṃ pādena prākṣipad bahiḥ // 180 ≈ L 145.11-12; H 566(vs.)17.
tathāyaṃ buddhimān vīro sarvāṃs sattvān bhavāratān /
bhavodadheḥ samuddhṛtya buddhakṣetre hy udānayet // 181 ≈ L 145.13-14; H 566(vs.)18.
evaṃ sarve manuṣyāś ca śuddhodananṛpādayaḥ /
tat samīkṣya niśamyāpi pracerur vismayānvitāḥ // 182
tatra śākyakumārā ye śilpavidyākalāvidaḥ /
tatra bhūmipradeśe te sarve 'pi samupākraman // 183 ≈ L 145.15-17; H 566.23-568.1.
rājā śuddhodanaś cāpi samantrijanabāndhavaḥ /
śākyā mahallakāś cāpi tatpredeśa upācaran // 184 ≈ L 145.17-18; H 568.1-2.
tatra śuddhodano rājā draṣṭukāmo viśeṣatām /
viśvāmitram ṛṣiṃ vijñaṃ samāmantryaivam ādiśat // 185 ≈ L 145.18-19; H 568.2-3.
tvaṃ sākṣī bho maharṣe 'tra lipiviśeṣadarśane /
tad bhavān samupālokya satyam ādeṣṭum arhati // 186 ≈ L 145.20-146.2; H 568.4-7.
iti rājñoditaṃ śrutvā viśvāmitraḥ sa saṃsmitaḥ /
bodhisattvaṃ kumārāṃs tān samālokyaivam ādiśat // 187 ≈ L 146.2-3; H 568.8-9.
yāvatyaḥ santi lipyo hi sarveṣu bhuvaneṣv api /
tāvatīr api sarvā hi vijānīte sudhīr ayam // 188 ≈ L 146.4-5; H 568(vs.)19.
aham api na jānāmi tā lipīḥ sakalāḥ khalu /
nāmāpi hi na jānanti tāsāṃ sarve kumārakāḥ // 189 ≈ L 146.6-7; H 568(vs.)20a-c.
ko 'nyo vijño kumārasya lipijñāne 'bhidarśane /
tad ayam eva vijño 'tra sarvān api vijeṣyate // 190 ≈ L 146.7; H 568(vs.)20d.
iti tenarṣiṇākhyātaṃ niśamya sa narādhipaḥ /
sajanaḥ suprasannātmā prābhyanandan prabodhitaḥ // 191
tato mahallikāḥ śākyāḥ sarve 'pi saṃprasāditāḥ /
śuddhodanaṃ narendraṃ taṃ samāmantryaivam abruvan // 192
nṛpate 'yaṃ kumāras te lipijñāne viśiṣyate /

tat saṃkhyājñānam asyātra draṣṭum icchāmahe vayam // 193 ≈ L 146.8-9; H 568.19-20.
tad bhavān gaṇakān sarvān saṃkhyāvidyāvicakṣaṇān /
samāmantrya kumā[88a]rasya saṃkhyājñāne *vivādaya // 194
iti taduktam ākarṇya śuddhodano narādhipaḥ /
arjunaṃ gaṇakācāryaṃ samāmantryaivam ādiśat // 195 ≈ L 146.9-11; H 568.20-21.
arjunātra bhavān sākṣī saṃkhyāvijñānadarśane /
tad viśeṣam samālokya satyam ādeṣṭum arhati // 196 ≈ L 146.11-12; H 568.21-22.
iti rājñā samādiṣṭaṃ niśamya so 'rjunaḥ sudhīḥ /
śuddhodanaṃ narendraṃ taṃ saṃpaśyann evam abravīt // 197
yāvat saṃkhyāḥ kumāro 'yaṃ vijānāti vicakṣaṇaḥ /
aham api na jānīyām tāvat saṃkhyā narādhipa // 198
tac chrutvā sa mahāsattvo bodhisattvo vilokya tān /
sarvāñ chākyakumārāṃs tam arjunam evam abravīt // 199
alam alaṃ vivādena nikṣepsyāmi yathākramam /
yūyaṃ sarve 'pi *saṃmilya samuddiśata me punaḥ // 200 ≈ L 146.21-22; H 570.11-12.
ity uktvā sa mahāsattvo yāvat saṃkhyā yathākramam /
tāvat sarvāḥ nicikṣepa teṣāṃ saṃkhyābhimānināṃ // 201
etāsāṃ sarvasaṃkhyānāṃ nāmāpi taiḥ kumārakaiḥ /
arjunapramukhaiḥ sarvair api naivābhyamanyata // 202
tatra sarve kumārās ta ekībhūtvā yathākramam /
uddiśanti sma tasyāgre bodhisattvasya saddhiyaḥ // 203
tac chrutvā sa mahāvijñaḥ samāhito yathākramam /
nikṣipya sakalāḥ saṃkhyāḥ sarvāṃl lokān vyanodayat // 204
tat samīkṣyārjunaḥ sarvakumārāś ca prasāditāḥ /
bodhisattvaṃ tam ālokya praśaśaṃsuḥ prabodhitāḥ // 205
athārjuno mahāmātro gaṇakācārya unmanāḥ /
kumāraṃ taṃ mahāsattvaṃ saṃpaśyann evam abravīt // 206
kumāra tvaṃ vijānīyāḥ paramāṇurajomukhā /
praveśāgaṇanāsaṃkhyā kathaṃ jñeyā nigadyatām // 207 ≈ L 149.3; H 576.2-3.
iti tenārjunenoktaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
arjunaṃ tān kumārāṃś ca saṃpaśyan samupādiśat // 208
ekam aṇurajaḥ siddhaṃ saptabhiḥ paramāṇubhiḥ /
saptabhir aṇubhiś cāpi truṭir eko nigadyate // 209 ≈ L 149.4; H 576.6-7.
saptabhis truṭibhiś caikaṃ vātāyanarajaḥ smṛtam /
saptabhis tadrajobhiś ca śaśapādotthitaṃ rajaḥ // 210 ≈ L 149.5; H 576.8-9.

saptabhiḥ [88b] śaśapādotthair eḍakacaraṇotthitam /
saptabhir eḍakair ekaṃ gocaraṇotthitaṃ rajaḥ // 211 ≈ L 149.5-6; H 576.10-11.
saptabhir gorajobhiś ca yūkaikā kathyate jinaiḥ /
yūkābhiḥ saptabhiś cāpi sarṣapa eka ucyate // 212 ≈ L 149.6-7; H 576.12-13.
saptabhiḥ sarṣapaiś cāpi yava ekaḥ samucyate /
saptabhiś ca yavair evam aṅgulīparva ucyate // 213 ≈ L 149.7; H 576.14-15.
dvādaśaparvabhiś cāpi vitastiḥ kathyate budhaiḥ /
*dvitayābhyāṃ vitastibhyām eko hasto nigadyate // 214 ≈ L 149.8; H 576.16-17.
dhanur ekaṃ caturhastaiḥ krośo dhanuḥsahasrakaiḥ /
yojanaṃ ca catuḥkrośair ity ākhyātaṃ munīśvaraiḥ // 215 ≈ L 149.8-9; H 576.18-20.
kiyanti yojane santi paramāṇurajāṃsi hi /
etāni yo vijānāti sa samuddeṣṭum arhati // 216 ≈ L 149.9-11; H 576.21-22.
iti tena kumāreṇa samādiṣṭaṃ niśamya saḥ /
arjuno gaṇakācāryo vismita evam abravīt // 217
aham api kumārātra saṃkhyājñāne 'bhimohitaḥ /
ke 'nye 'lpabuddhayo reṇusaṃkhyāṃ kartuṃ praśaknuyuḥ // 218 ≈ L 149.12-13; H 576.23-24.
athāsau ca mahāsattvaḥ kumāraḥ saṃsmitānanaḥ /
arjunādīn sabhālokān saṃpaśyann evam abravīt // 219
bhūyo 'pi saṃpravakṣyāmi śṛṇuta yūyam ādarāt /
sarvabhūmipramāṇāni yathādiṣṭaṃ munīśvaraiḥ // 220
saptayojanasāhasraṃ jambudvīpasya vistaraḥ /
yojanāṣṭasahasraiś ca dvīpaḥ pūrvavidehakaḥ / 221 ≈ L 149.18-19; H 578.5-6.
daśayojanasāhasrair uttarakuru ucyate /
navayojanasāhasraiḥ paścimadvīpa ucyate // 222 ≈ L 149.19-20; H 578.6-7.
caturaśītisāhasrair yojanānāṃ nagādhipaḥ /
caturaśītisāhasrair avagāhyāsthito 'mbudhim // 223
etair eva samucchrāyo merū ratnācayaḥ smṛtaḥ /
tasyārdhārdhena dīrghā āyāmābhyāṃ saptaparvatāḥ // 224
nimindharayugaṃdhareśādharakhadirās tathā /
sudarśanavinītāśvakarṇāḥ kāñcanaśobhanāḥ // 225
tathopadvīpakā aṣṭau saptabhir abdhibhir vṛtāḥ /
tathā kṣārekṣudravyājyamadhudadhipayo'ntakaiḥ // 226
cakravāḍamahācakravāḍābhyām anta āvṛtāḥ /
abdher dvi[89a]guṇitā dvīpā dvīpadviguṇitābdhayaḥ // 227
etanmadhye mahāmerau sarvadevālayaḥ smṛtaḥ /

tatra saptādaśakhyāto rūpadhātuḥ prabhāsvaraḥ // 228
viṃśatiḥ kāmadhātus tadadho yāvad rasātalam /
etatsarvo parikhyāta ārūpyadhātur uttamaḥ // 229
etattridhātuko loko ālayo bhavacāriṇām /
karmaṇāṃ phalasaṃbhogabhojanasthāna ucyate // 230
etat koṭīśataṃ lokaṃ trisāhasraṃ bhavālayam /
mahāsāhasrikaṃ ceti sarvabudhair nigadyate // 231 ≈ L 150.11-12; H 578.20-21.
etattrisāhasrikāṃl lokān sarvān kṛtvā rajomayān /
sarvān etadrajaḥsaṃkhyāṃ kartuṃ śaknoti yaḥ sudhīḥ // 232
sa sudhīmān mahāvijñaḥ sabhāyām atra me puraḥ /
etatparamareṇūnāṃ saṃkhyām ādeṣṭum arhati // 233
tac chrutvā gaṇakācāryaḥ so 'rjuno vismitāśayaḥ /
bodhisattvaṃ kumāraṃ taṃ saṃpaśyann evam abravīt // 234
mamāpi vidyate naitatsaṃkhyāvijñaptiśemuṣī /
kutra etadrajaḥsaṃkhyāṃ kartum anyo 'tra śaknuyāt // 235
tataḥ śākyakumārās te sarve 'tivismayānvitāḥ /
bodhisattvaṃ kumāraṃ taṃ samīkṣya sahasotthitāḥ // 236 ≈ L 150.19-21; H 580.5-7.
svasvavastraiḥ samācchādya sarvaiś ca bhūṣaṇair api /
tatpāde praṇatiṃ kṛtvā samupatasthur ānatāḥ // 237 ≈ L 150.21-22; H 580.7-9.
tac chrutvā gagaṇāyātā sarve devāḥ pramoditāḥ /
samīkṣya taṃ mahābhijñaṃ praṇatvaivaṃ babhāṣire // 238
yad atrāyaṃ mahāsattvo vijānāti yathākramam /
gaṇanāntam asaṃkhyeyam api hy etat kim adbhutam // 239 ≈ L 151.4-5; H 580(vs.)23cd.
sarveṣām api sattvānām manovitarkitāny api /
karmajāny api sarvāṇi saṃprajānāty ayaṃ sudhīḥ // 240 ≈ L 151.12-15; H 582(vs.)25.
ity uktvā te surāḥ sarve gagaṇasthāḥ pramoditāḥ /
tasyopari kumārasya puṣpavṛṣṭiṃ nyapātayan // 241
tat samīkṣya niśamyāpi sarve lokāḥ pramoditāḥ /
bodhisattvaṃ tam ānamya jayavādair vyanodayan // 242
śuddhodanādayaś cāpi sarve nṛpāḥ pramoditāḥ /
samantrijanapaurās tat samīkṣya saṃprasedire // 243
evaṃ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo mahāmatiḥ / [89b]
sarvasaṃkhyāvivādeṣu viśiṣṭo jayam āyayau // 244 ≈ L 151.16-17; H 582.8-9.

(It is to be continued to the second half of the chapter 14.)

Apparatus criticus

1b upaguptaḥ] corr.: upagupto A(post corr.): śākyasiṃhaḥ A(ante corr.; seconda manu!) B.

1c aśokaṃ] A(post corr.): ānandaṃ A(ante corr.; seconda manu!) B.

6a yady ayaṃ] A(ante corr.): yac cāyaṃ A(post corr.) B.

9c niṣkramaṇe naiva] A: niṣkramaṇaiva B.

10b prabhokṣyate] corr.: prabhotsyate A B.

13c kanyā yā°] sic A B. Metrically one syllable is lacking.

17c tad yām] A: nadyām B.

18b sabhāsana] A: sabhāsane B.

23d arhasi] A: arhati B.

26a °karṇya bhūpendraḥ] ex coni (cf. 90a): °karṇṇya sa bhūpendraḥ A (metre!): °karṇā bhūpendraḥ B.

29a tīkṣṇā] A: tīkṣā B.

29b asidhārā°] B: asidhāra° A.

34c *sthitvākīrṇanare°] ex coni: sthitvākīrṇe nare° A B.

50c *anatistyāna°] ex coni: anabhistyāna° A B.

50d maṇḍalī] corr.: maṇḍalīḥ A B.

51a saddṛṣṭi°] A: sadṛṣṭi° B.

60a nirdoṣā] corr.: nirdoṣāḥ A B.

61c evaṃsthitaṃ] corr.: evaṃ sthite A B.

64c tad enaṃ] A: tad evaṃ B.

69c saṃvīkṣya] B: sa vīkṣya A (metre!).

79c smitaṃ] metre!

81d karaṇīyo] corr.: karaṇīyā A B.

90a niścitya bhūmīndro] ex coni (cf. 18a): niścitya sa bhūmīndro A B (metre!).

97b grahītuṃ] corr.: gṛhītuṃ A B.

102a mahāsattvaḥ] corr.: mahāsatvas A: mahāsatvo B.

108c subhadrikāyai] corr.: subhadrakāyai A B.

108d nirmucya] corr.: nimucya A B.

110b *mahyam] ex coni: gahyam A: makram B.

122a tadāsanā°] corr.: tam āsanā° A B.

126b *'bhirajyate] ex coni: bhirujyate A: abhirakṣyate B || mama] corr.: mamaḥ A: mara B.

127c kanyā] corr.: kanyāṃ A B.

140a kumārātra] A: kumārotra B.

148c kumārānabhijño] A: kumāronabhijño B.

157a bhoḥ śilpa°] Metrically one syllable is lacking.

159c puradvāra] A: puradvāram B.

161b īrṣyā] corr.: irṣyā A B.

166b] pāda b is hypermetric.

167a kathitaṃ] B D: kathikaṃ A.

173ab] pāda ab are written in the margin of A (seconda manu[?]).

181a vīro] corr.: vīron A B.

181d hy udānayet] A: bhyanāmayan B: tyanāmayan D.

182d pracerur] corr.: praceru A B.

185b draṣṭukāmo] corr.: draṣṭuṃ kāmo A B.

194c kumārasya] B: kumārarasya A.

194d *vivādaya] ex coni: vinādaya A: vinodaya B.

196a sākṣī] D: sākṣīn A B.

196b saṃkhyā°] D: saṃjñā° A B.

200b nikṣepsyāmi] B: nikṣepsāmi A.

200c *saṃmilya] ex coni (cf. sarva idānīm ekībhūtvā in Lal): saṃmīlya A.

203d saddhiyaḥ] B D: suddhiyaḥ A.

205d praśaśaṃsuḥ] A: prasaśaṃsuḥ B.

207b °rajomukhā] corr.: °rajomukhāḥ A B.

209a aṇurajaḥ] corr.: anurajaḥ A B.

214c *dvitayābhyāṃ] ex coni: dvitīyābhyāṃ A B.

216a ekaṃ] corr.: ekaś A: ekaṃś B.

216c catuḥkrośair] corr.: catuḥkrośaiḥ A: catuḥkrośai B.

216d] pāda d is written in the margin of A.

218c reṇu°] A(post corr. marg.): rajaḥ° A(ante corr.): reya° B.

224cd dīrghā āyāmābhyāṃ] A: dīrghāyāyāmābhyāṃ B: dīrghyayāṃ yāmābhyāṃ D.

225a °yugaṃdhare°] corr.: °yugādhare° A B.

226c vyājya] A: vyākṣya B.

231c °kaṃ ceti] B D: °kaṃ śceti A.

232a] pāda a is hypermetric.

242c ānamya] corr.: āṇamya A B.

第14章 ［菩薩が］技芸と一切の学問を示しヤショーダラー女宝と夫婦になる品

かの阿羅漢・大通慧者である出家・賢者ウパグプタは、かの偉大な人（大士）アショーカに語りかけ、次のように説きました。—[1]

さてシュッドーダナ王はその宮殿で大臣たちや釈迦族の長老たちと共に集会所に坐っていました。[2]　その時釈迦族の者たちは立ち上がって王の前に行き、蓮の御足に拝礼を行い、丁重に次の様に語りました。[3]

「閣下、このことをお知り下さい。あなた様の御子息であるかの王子は、占相術に精通する仙人たちに［かつて］観られて、次の様に告げられました。[4]

—『偉大な人（大士）であるこの王子は、もし出家すれば、一切智・阿羅漢・大通慧者・如来になられるでしょう。[5]　もし彼が栄光という徳性に執着をなされて、王位での家住期を楽しまれるならば、転輪王・一切法王である君主となるでしょう。[6]　彼は幸と美とよき徳性の保持者として、七宝をそなえもち、一切の学問の王・教師として、あらゆる有情への饒益を目的とする者として、[7]　邪悪な者たちに打ち勝ち、努力してあらゆる者に覚知を得させ、正法の上に安立せしめて、生類を保護し、守護するでしょう』と。[8]

その［予言の］故に、［彼が］出家することへと執着しないように、かの王子の婚姻について、すみやかに思案がなされるべきです、王よ。[9]　もしあの方が美しい女に愛著し、性愛の歓び・快楽を享受されるならば、王位を楽しむ心をいだいて、出家することをなさらないでしょう。[10]　そうすれば、わが転輪王の栄光ある家系の断絶が起こりません。われわれは他の王たちから敬われ、侵略を受けることはないでしょう。」[11]

このように彼ら（釈迦族の長老）が語るのを聞いて、シュッドーダナ王は「まさにそのとおりである」と認識し、彼らを見つめて、語りました。[12]

「あなた方はこの都城において、或る釈迦族の子女で、かの［王子］にふさわしい美の徳質をそなえている娘を見たならば、ただちに［私のもとに］来なさい。[13]

このように王がお命じになったのを聞いて、釈迦族のすべての者は喜びました。そして一人一人が王を拝し、合掌して、次の様に言いました。[14]

「王よ、私の娘は王子にふさわしい者です。ですからその娘を受け取って、王子にお与え下さい」と。[15]

このように釈迦族の五百人すべてが請願した時に、かの父王は聞いて心で次の様に考えました。[16]

「王子は比類なき者であり、また娘たちはすべて美しい。そこでよく観察して、彼が欲するところの女をもらって、私は［彼に］与えよう。」[17]

集会場の座にすわる王はこのように決意して、釈迦族すべてに呼びかけて、見つめながら次のように語りました。[18]

「かの王子の心が好む娘を私はもらい受けることを希望する。そのため、あなた方は［娘を］与えてもらいたい。」[19]

この王の命令を聞いて、彼らすべては嬉々として、王の命令を果たすために王子の住まいに行きました。[20]　彼らすべての釈迦族たちはそこに至ると、丁重にかの王子に話しかけて、見つめつつ語りました。[21]

「王子よ、あなた様は［大人として十分に］成長されました。それ故、［王の］家系継続の達成のために、どうか家の伝統法に則った行為をなす［後継者］として、人々の益のために、行動なさってください。[22]　私たちの息女・娘たちは皆とても美しく、それ故、あなた様の心が好むところの彼女たちをどうか娶られますように。」[23]

このように彼らが請うのを聞いて、王子は次の様に答えました。「七日後に私は返答をお与えしますので、どうかあなた方は聞かれますように。」[24]

このように王子が答えられたのを聞いて、彼らは其処から立ち去りました。釈迦族の人々はその事を王の前で報告しました。[25]

それを聞くとシュッドーダナ王は理解し、「いったい王子は何を話すのだろうか」と考えながら坐っていました。[26]

その後かのサルヴァールタ・シッダ王子は、意識を集中し、過去の仏たちを憶念して、心で次の様に考えました。—[27]

「生存の住まい（輪廻界）において、愛欲の悪害は無限である、と私は知る。愛欲とは、闘諍・危難・敵意をもたらすもの、悲悩の苦を与えるものである。[28]　それ（愛欲）は毒や火のように激烈であり、剣の刃のように恐ろしいものである。［それは］煩悩・慢心・傲りを保持するもので、幸と美とよき徳質を破壊するものである。[29]　幸せを求める者の苦の根であるところの愛欲を、私は欲しない。孤独処の森にいて、楽しむことを私は願う。[30]　女たちと一緒に家で娯楽する時も、私は喜びを感じない。無人の地に住して瞑想に専念した時、私は喜びを味わうだろう。」[31]

このように考えてから、『善巧方便』の［行為の］意義を知っている賢い彼は、煩悩に惑乱した心をもつ生類すべてを観察し、大きな憐れみを起こして、努力してあらゆる有情に覚知を得させて救済するために、次のように再び考え直しました。[32-33]

「おびただしい泥の中で生じたものとして、蓮は成長する。おびただしい王たちの中にとどまり、敬意（供養）を私は得ることにしよう。[34]　［私が］もし孤独処の無人の森の中で、一片の木や石ころのようにいるならば、［他の］いかなる有情にたえず覚知を得させて、教法において浄善へと導くことができるだろうか。[35]　私は菩提心により、四梵住（四無量心）に住しつつ、菩提行の誓願を持して、生類の益のために行動しよう。[36]　そうして、先（前世）になした誓願のとおりに、今、王としてありながら、あらゆる有情に益をなして、私は［誓いを］満たすことにしよう。[37]

［過去の］菩薩・大士たちも、かつて生存の中にあった時、常に王位での家住期を送りつつ、生類を法に導いたのだ。[38]　［彼らは］欲するままに快楽を享受し、妻と楽しんで、善人の［家系の］相続を生じさせながら、家の伝統法に則って、活動をした。[39]　その後［彼らは］王位と、すべての所有物を捨てて、出家し、無人の地に住して、難行である苦行をした。[40]　そして［彼らは］魔の群れに勝利し、煩悩無く、清らかな感官をもつ阿羅漢として、悟りを達成し、仏の位に至ったのだ。[41]　私も彼ら、仏たち・すぐれた救護者たち・菩薩たちを、正法において、生類への利益において、見習いたい。」[42]

このように決意して、聡明で思慮深いかの菩薩は、黄金の筆記板に、次の様に自ら書きました。[43]

『私の心が凡俗なる美人に惹かれることはありません。法に従って生きる女性を私は好みます。[44]　その女性は心に嫉妬と慳貪を好むことが無く、誤った法を主張することと十種の悪（十不善業道）への愛好がなく、[45]　常に正法を愛好し、真実の法の目的を達成し、清浄なる家柄に生まれ、清らかな感官の身体をもち、[46]　身内と他者と自分とを平等に扱い、四梵住（四無量心）をもち、布施と戒と忍辱を好み、羞恥心あり、感官を制御し、[47]　幸と美とよき徳性の保持者であり、家の伝統法に素直に従い、あらゆる論書・技芸・学問に精通し、夫への貞節をもち、[48]　驕慢・傲り・傲慢がなく、欲ばりでなく、自足しており、感官の対象に過度に執着せず、飲物・食物を過度に欲しがることがなく、[49]　思い上がった者でなく、不遜ではなく、心乱れておらず、軽はずみでなく、思慮深く、過度の昏沈睡眠がなく、三輪清浄をそなえ、[50]　正しい見解の教法を愛好し、論究を愛する心をもち、愛情に濡れたやさしい心をもち、女召使たちをいたわる心をもち、[51]　姑と舅に対して本当に献身的な心をもち、親族・友人・親友に対して親切であり、詐ることなく、温和で、制戒の行為をなし、正直である善女が［いるならば］、[52]　王よ、そのような最高の娘・婦女を選びなさい。私の心が凡俗の美人に惹かれることはないのです。』[53]

かのサルヴァールタ・シッダはこのように自ら文書（黄金の葉）に書くと、自分の友人を呼んで、丁重に次の様に言いました。[54]

「善き人よ、この文書を持って、速やかに王のもとに行ってください。これを秘かに王様の手に渡して、すぐに立ち去りなさい。」[55]

そのような彼の指示を聞いて、その親友は「そうします」と、文書を受け取って、それから王の住まいに行きました。[56]　彼は其処に着くと、王の蓮の御足を拝してから、「この文書は王子が送ったものです」と伝えながら、渡しました。[57]

シュッドーダナ王はそれを見つめながら受け取って、自らすべて読み終えると、熟考して次の様に考えました。[58]

「私の領土において、このような徳性をそなえた女が何処にいるだろうか。このような徳性と身体をもつ娘が、誰かの息女として存在しているだろうか。[59] 欠点なく、よい気質をそなえ、幸と美とよき徳質を有する、［そんな］女性が［いるだろうか］。」［王は］そのことを懸念して、落胆した心でいました。[60]

その時、其の場に宮廷祭僧（プローヒタ）がやって来て、そのような状態でいる王を観察すると、尋ねました。[61]

「王様、今日どうしてあなた様は、苦悩に落胆した心であられるのですか。私たちの前ではお隠しになられるべきではありません。どうかその［悩み］をお告げください。」[62]

そのようにその婆羅門が言うのを聞いて、かの王はその文書を提示して、次の様にその師に命じました。[63]

「この文書は今日王子が私のもとに送ってきたものだ。そこで、どうかこれを読んでから、［娘を］調査してほしい。[64] いったい誰の娘が、しかじかの徳性を持って、この都城に存在するのか。師よ、あなたはその娘を観て、私の前で報告してほしい。」[65]

このように王が命じるのを聞いて、その宮廷祭僧は自ら文書を読むと、「そのようにいたします」と答えました。[66]

そして宮廷祭僧はその文書を受け取ってから、其処を去り、都城のあらゆる場所で家々に入って、［娘たちを］観察しました。[67] それらの徳性に適合する娘をどの人の住まいにおいても見なかったので、その宮廷祭僧は落胆して他の場所へ歩いて行きました。[68] 彼はその地を次第に歩いて行き、ダンダパーニの家に近づきました。其処に入って彼が眺めると、最高の娘を目にしました。[69]

全身悉く美しい、よい娘を見て、その婆羅門は喜悦して、「これは女宝である」と呟き、久しい間眺めながら、立ったままでいました。[70]

そのように立ったままでいる、かの婆羅門・宮廷祭僧を見て、そのダンダパーニの息女であるゴーパーという娘は近づいて来ました。[71] そしてその娘はその婆羅門の蓮の御足を拝すると、見つめながら丁重に合掌して、次の様に言いました。[72]

「大婆羅門さま、いかなる目的でここにいらっしゃったのでしょうか。もしよろしければ、その御用をあなた様は私にご教示いただけないでしょうか。」[73]

そのように彼女が尋ねるのを聞いて、心に清らかな歓びを得たその婆羅門は、全身悉く美しいその令嬢に次の様に答えました。[74]

「シュッドーダナ王のご子息である王子は、聡明であり、三十二相と八十種好によって体が飾られています。[75] 彼はこの文書（金の葉）に、『最高の徳性が見られるところの女性が私にとって好ましい妻である』と書いたのです。[76] そのように書いて

あるこの文書を私は王から与えられて、娘たちを観察するために派遣されて、ここに至ったのです。」[77]

そう言って、賢者であるかの婆羅門は、王子の［提示した］徳性を語りながら、その文書をそのゴーパーの前に差し出しました。[78]　その差し出された文書をその娘は悦んで受け取って、自ら読んでから、微笑みを示すと、次のように語りました。[79]

「かの［王子］がお書きになったところのすべての徳性が、私にはあります。それ故、私は彼にふさわしく、彼のほうも私にふさわしい。[80]　ですから、婆羅門さま、王子の前で次の様にお伝え下さい、『もしあなたが望むのなら、この事（婚姻）においては、遅滞せずに行動なさってください』と。[81]　品性下劣な男性のもとで共に暮らすことを、私の心は悦びません。それ故、お師匠さま、この大切な務めを速やかに成就なさってください。」[82]

このように彼女が言うのを聞いて、心に清らかな歓びを得たその婆羅門は、「そういたします」と答えて、其処から王の住まいに歩いて戻りました。[83]

清澄な蓮の顔をもつかの［婆羅門は］其処にやって来ると、シュッドーダナ王を見つめながら、次の様に語りました。[84]

「お歓び下さい、大王よ。私は［求めていた］娘に会いました。ダンダパーニの息女である、全身悉く美しい、まるでラマー（女神ラクシュミー）のような娘です。」[85]

そう言って、その出来事すべてを婆羅門は報告しました。［しかし］その王は聞いてから、心の内で次の様に考えました。[86]

「比類のない王子にも、快（安楽）を求める傾向が心にある。また本当に賢い女性は、自分が徳性をもつとは思わないものだ。[87]　そこで、沢山の『歓喜の小箱』を私はすぐに作らせることにしよう。王子はそれらをあらゆる娘たちに配るのだ。[88]　その場において、王子の眼が一人の娘に惹きつけられたなら、その美しい娘を王子のために選ぶことにしよう。」[89]

そう決意すると、王は金製や銀製や宝石製の『歓喜の小箱』を沢山作らせました。[90]　そしてかの人民の保護者、シュッドーダナ王は都城のすべての場所で、鐘による布告を行いました。[91]

「これから七日後に王子が会見をしてくださり、あらゆる娘に『歓喜の小箱』を贈られるであろう。[92]　すぐれた娘は皆、其処で王子にお目にかかるため、衣や装飾品で着飾って、会堂に集合なされよ。」[93]

七日後、かのサルヴァールタ・シッダ王子は会堂にやってくると、玉座に坐りました。[94]　シュッドーダナ王は其処でその出来事を観察させるために、有能な、身を隠した家来たちを秘かに配置しました。[95]

其処でかの美しい娘たちは皆、衣や装飾品で着飾って、その魅力的な菩薩に会うために、そして彼から『歓喜の小箱』を受け取るために、嬉々として次々にやって来て、会堂に集まりました。[96-97]

彼女たちを見ながら、かの大いなる人（菩薩）は欣然と、すべての娘に順々に『歓喜の小箱』を自分の手で与えました。[98]　与えられたその『歓喜の小箱』を受け取って、それらの娘は皆、羞恥心のあまり、次々に、すぐにその場から立ち去りました。[99]

その後に、女友達らと一緒に、侍女たちを伴って、ダンダパーニの息女である聡明で美しい体のゴーパー、清澄な蓮の顔をもつ女は、かの大いなる人、王子を遠くから欣然と見つめながら、其処でそばにやって来ました。[100-101]

かの偉大な人は全身が悉く美しい彼女が近づいて来たのを見て、明るく澄んだ顔で、視線を動かさずに、見つめながら立っていました。[102]

全身悉く美しい彼女は、彼を見て、微笑んだ顔で、近くにやって来ると、菩薩・偉大な人をみつめて次の様に言いました。[103]

「王子よ、私はなにか、あなたに過ちを犯したのでしょうか。王子、あなたが私に軽蔑的な扱いをするわけを教えて下さい。」[104]

その言葉を聞いて、かの菩薩は微笑し、その美しい娘ゴーパーを見つめながら、次の様に言いました。[105]

「善き娘御よ、私はあなたに軽蔑的な扱いをしていません。あなたがここに遅くやって来たので、私は今あなたに何を差し上げましょうか。[106]　すべての『歓喜の小箱』を、やって来たすべての娘たちに順々に私は与えてしまいました。」[107]

このように言うと、かの大いなる人は、自分の大変高価な指輪を外すと、欣然としてその美しい娘に与えました。[108]

その娘ゴーパーはその指輪を見て、受け取ると、笑ってかの大いなる人に次の様に言いました。[109]

「大きな幸に恵まれた方よ、あなたにおいては、この程度のものが、わたしに値するのですか。」— そう、美しいその女は言って、見つめながら、詰め寄りました。[110]

それを聞くと、かの大いなる人サルヴァールタ・シッダは彼の自分の装身具すべてを外し、与えました。[111]

それらすべての装身具を見ると、全身悉く美しい娘は笑い、その王子を見つめながら、次の様に言いました。[112]

「あらら。王子よ、私が王子を装身具の無い者にしてよいはずがありません。」— そう言って、彼女はそれらの装身具を見て、立ち去りました。[113]

それを観察し、聞いていたかの隠密の男たちは、ただちに王のもとに来て、次の様に報告しました。[114]　「閣下、あなた様はお知り下さい。釈迦族の大慧者ダンダパーニに、息女であるゴーパーという、女神シュリーに等しい容姿をもつ娘がおります。[115]　彼女だけに、王子の美しい眼は惹きつけられました。また王よ、両人の間にはしばし、会話がありました。」[116]

このように彼らが報じたのを聞いて、かのシュッドーダナ王は宮廷祭僧を呼んで、丁重に次の様に言いました。[117]

「おお大婆羅門よ、お知り下さい。王子の心はダンダパーニの息女であるゴーパーに、疑いなく魅せられています。[118]　それ故、あなたはかの釈迦族、ダンダパーニの心をなんとしても納得させて、娘を請い受けて来ていただけないでしょうか。」[119]

このように王が頼むのを聞いて、その宮廷祭僧は「そういたします」と承諾して、ダンダパーニの家に赴きました。[120]

彼がやって来たのを見て、ダンダパーニは悦び、丁重に招き入れて、清らかな座に坐らせました。[121]　そしてかのダンダパーニはその座に坐ったその婆羅門を観察し、清澄な心で、見つめながら言いました。[122]

「導師様、あなた様はいかなる目的のため、ここに来られたのですか。わが家にあるものでしたら、それをご教示ください。」[123]

このように尋ねるのを聞いて、婆羅門は喜び、そのダンダパーニに話しかけて、見つめながら次の様に語りました。[124]

「ダンダパーニ殿、王が私をあなたのもとに派遣したその目的のため、私はあなたにお願いをしたいのです。王はこう伝言されました。[125]　—『わが王子の心はあなたの娘を好いています。それ故、私の息子にあなたの娘をお与えくださるよう、あなたにお願いいたします』と。[126]　このように、王から指示を受けて、私は使者としてあなたのもとに派遣されたのです。それ故、あなたの娘を王の子息に与えて下さい。」[127]

このように彼が語ったのを聞いて、そのダンダパーニは微笑み、その導師・大婆羅門を見つめながら、次の様に言いました。[128]

「聖師よ、これは私どもの家門の伝統法なのですが、あらゆる技芸の種類を知悉した者に娘を与え、技芸に疎い者には与えません。[129]　王子は、安楽の中で成長なさった、人の滅多に接することができない王の息子です。技芸をよく知らないのであれば、どうして彼に［娘を］与えられましょう。」[130]

彼がそう語ったのを聞いて、かの婆羅門は其処から立ち去り、王の前に行って、すべてをそのとおりに報告しました。[131]

彼が語った言葉を聞いて、かのシュッドーダナ王は憂慮のあまり、千々に乱れた心で、次の様に思いました。[132]

「かつて私は質問したことがあった、『なぜほかの釈迦族の王族の青年たちは、わが息子である王子に奉侍しに来ないのか』と。[133]　その時、それらの王族の青年たちは私の前で次の様に答えたのだ、『どうしてわれらが遅鈍な者に奉侍をなすでしょうか』と。[134]　二度、三度と、私が尋ねた時も、彼らは同じ様に答えたのだった」— と、そう沈思しながら、落胆した心で［王は］宮殿の内奥に坐っていました。[135]

その出来事を耳にして、やさしい心をもつかの菩薩は、すぐに自身の父である王の前にやって来ました。[136]　其処で王子たる菩薩は、普段と表情が違っているその父王の顔を眺めて、丁重に尋ねました。[137]

「王よ、わが父よ、どうしてこのように落胆した心でいらっしゃるのですか。あなたが苦しまれていることをお話しください。私がすべて阻止いたします。」[138]

このように息子が語ったのを聞いて、かの父王は再度その息子である王子を見つめながら、次の様に語りました。[139]

「王子よ、尋ねられても、私はここで何を語れようか。息子よ、その［質問］は無用だ。不可能であることは語るべきでない。また聞くべきでもない。」[140]

このように父が答えたのを聞いても、かの大慧者は、その父である大王を見つめながら、次の様に語りました。[141]

「父よ、もし私の利益をあなたが望んでいらっしゃるのなら、是非ともお話しください。あなたの苦しまれるのを阻止するために、私はどんなことでもいたします。」[142]

このように、かのサルヴァールタ・シッダ王子は父に向かって三度、合掌拝礼し、丁重にそう尋ねました。[143]

そこでかの父王はダンダパーニが語ったことを、そのまますべて、王子である息子の前で話しました。[144]

それを聞くと、その大聡明者、サルヴァールタ・シッダは父の前で笑って、再び次の様に言いました。[145]

「この都城に、誰か、［何らかの］技量において私と競争できる、技芸や学問に達者な者がいるでしょうか。」[146]

そのように息子が語ったのを聞き、その父王は菩薩であるかの王子を見つめて、再び言いました。[147]

「息子よ、いったいお前は技芸を示すことができるのか。王子よ、［技芸の］達人でなければ、どうしてお前は自らそのように語るのか。」[148]

このように父が尋ねたのを聞いて、やさしい心のかの王子は、父を再び見つめながら、微笑して次の様に答えました。[149]

「はい。父よ、私は技芸を示すことが出来ます。この都城において、すべての技芸に熟練した者たちをお集めになってください。」[150]

このように息子が語ったのを聞いて、その後かの王は次の様にその都城に鐘を鳴らさせて布告しました。[151]

「七日後に此処で王子も自らの技芸を示すであろう。それを［競技で］見るため、技芸の熟練者たちは皆集合しなさい。」[152]

それを聞いて、その都城においてあらゆる技芸の達人たちがそれを［確かめて］見ようとやって来て、集まって、立ちました。[153]

するとダンダパーニは、自身の息女であるゴーパーという名の娘を「勝利の旗」（優勝旗）として其処に立たせて、次の様に宣言しました。[154]

「技芸の達人として、すべての技芸の熟達者たちに勝利した者が、全身悉く美しいこの娘を獲得するであろう。」[155]

するとシュッドーダナ王が技芸の熟練者たち全員に呼びかけて、［彼らの］面前で見つめながら次の様に命じました。[156]

「君たち、この大地において技芸のわざに勝れた者であるすべての者よ、王子の技芸を見たいなら、都城の外に進み行きなさい。」[157]

このように王が命じたのを聞いて、彼ら技芸の熟練者たち全員が、やる気と興奮をもって、その場から出発しました。[158]

進み行く者たちの先頭を切って、傲岸で不遜な王族の青年デーヴァダッタは、そこから歩いて、都城の門にやって来ました。[159]

その時、人々によって白色・巨躯のすばらしい一匹の象が、サルヴァールタ・シッダの用のために都城に引き入れられてきました。[160]　それを見て、嫉妬を感じた、誇りと驕慢により思い上がったそのデーヴァダッタは、［象を］打ち殺さんとして、その場でただちに真っ直ぐに近づきました。[161]

其処でかのデーヴァダッタは左手で象の鼻をつかみ、右手でその［象］を平手打ちをして殺しました。[162]　それを殺すと、心傲って驕慢なかのデーヴァダッタは、嬉しげにすぐにその地を去りました。[163]

彼の直後に、スンダラナンダという王族の青年がやって来て、その死んだ象を見て、次の様に尋ねました。[164]

「あらゆるめでたい特徴に飾られたこの象が、誰に殺されたのか。このような［行為］には慈悲がない。悪い心をもつ者は恥を知れ。」[165]

このように彼が尋ねたのを聞いて、それを目撃していた都民たちは、「デーヴァダッタが自らこの象を殺したのです」と報告しました。[166]

そのように彼らが語ったのを聞いて、スンダラナンダは言いました。「これはじつに不善なることをデーヴァダッタはしたものだ。」[167]　そして彼は尻尾をつかんで、その大象を自らただちに城門から曳き出すと、外に捨てました。[168]

その直後に、大慧あるかの菩薩が、車に乗って、欣然と人々を見ながら、その場にやって来ました。[169]

彼はその死んだ象を見ると、その場に立って眺めている人々に、「誰がこの象を打ち殺したのか」と尋ねました。[170]　それを聞いて、それらの人々は皆、王の子息たるかの王子が車中に居られるのを認めると、お辞儀して、先と同様に報告しました。[171]

彼らが語ったことを聞いて、善慧者たるかの菩薩は［言いました］。「この力業は不善なることである。悪い心をデーヴァダッタはもつ。[172]　善良な心をもつスンダラナンダの、この［象］を都城の外に遠く捨てた、その力業は、立派である。[173]　しかしこの死んだ大きな体の象が腐敗すれば、この都城すべてが悪臭に満たされるだろう。」[174]

そう言うと、かの偉大な人は、車に乗ったままで、足の親指で尻尾をつかむと、その象を抛り投げました。[175]　その抛られた死象は、［幾重の］城壁も堀も越えて飛んでゆき、1クローシャ［遠方］にある地面に落下しました。[176]　今日でもその死象が落下した地面の場所には、大きな穴が生じたままです。[177]

そのような彼の偉大な力業を見て、すべての神々は歓声を発して、嬉々として衣を投げ散らしました。[178]　虚空にいる、このように歓喜したすべての神々は、その［力業］を見て驚嘆した心をいだいて、［次の様に］語りました。[179]

「知性がすぐれ、偉大な勇猛の力をお持ちになるこの人は、これほどの体をもつ大象を足で外にお投げになった。[180]　まさにそのように、この知性すぐれた英雄は、生存を厭うあらゆる有情を、生存の海から引き上げて、仏国土に導くことでしょう。」[181]

［神々と］同様に、シュッドーダナ王をはじめとするすべての人々はそのことを見、あるいは聞いて驚嘆しながら、進み行きました。[182]

学問や技芸に熟練した釈迦族の王族の青年が［集う］その場所に、その全員はやって来ました。[183]　シュッドーダナ王や大臣たちや親族たち、釈迦族の長老たちもその場所に到着しました。[184]

其処でシュッドーダナ王は、［王子の技芸の］秀でたることを見ようと欲して、学者であるヴィシュヴァーミトラ仙に呼びかけて、次の様に命じました。[185]

「おお大仙よ、御身は此処で、文字の卓越を見ることの証人（試験官）である。それ故、御身はよく見て、真実を告げてもらいたい。」[186]

このように王が命じたのを聞いて、かのヴィシュヴァーミトラは微笑し、菩薩とそれらの王族の青年たちを見つめながら、次の様に言いました。[187]

「あらゆる世界にある、ありとあらゆる文字、そのすべてをこの賢い人（菩薩）は知っています。[188] それらすべての文字を私も知っているわけではありません。王族の青年たち全員がそれらの［文字の］名前すら知っていません。[189] 王子の文字の知識が示された阿合、どんな［匹敵する］賢い者も他におりません。それ故この場で、賢いこの方があらゆる者たちに勝利するでしょう。」[190]

そのようにその仙人が語ったのを聞いて、人々と共に、かの王は澄んだ心で喜悦しつつ、納得しました。[191]

すると釈迦族の長老たちは皆、澄んだ心の歓びを得て、かのシュッドーダナ王に話しかけて、次の様に言いました。[192]

「王様、あなた様のこの王子は、文字の知識においては秀でています。そこで、彼の計算に関する知識を見ることを私たちは希望します。[193] そこであなた様は、計算の学問に詳しいすべての算師たちを呼び出して、王子がもつ計算に関する知識において、競わせてください。」[194]

このように彼らが語るのを聞いて、シュッドーダナ王は、計算師で教師であるアルジュナを呼び出して、次の様に命じました。[195]

「アルジュナ殿、御身は此処で、計算の知識を見ることの証人（試験官）である。それ故、卓越をよく見て、真実を告げてもらいたい。」[196]

このように王が命じたのを聞いて、理知すぐれたかのアルジュナは、かのシュッドーダナ王を見つめながら、次の様に語りました。[197]

「王様、聡明なこの王子が知るところの計算のすべては、私ですらも知り得ないのです。」[198]

それを聞くと、かの菩薩・偉大な方は、それらすべての釈迦族の青年たちを眺めて、かのアルジュナに次の様に語りました。[199]

「さあ競争はやめましょう。私が順次に計算問題を解いてゆきましょう。あなた方全員は合同して、私に出題しなさい。」[200]

そのように言って、かの偉大な人は、それらの計算に誇りをもつ者たちが［出題した］計算すべてを順次に解いてゆきました。[201] それらの計算すべての名称すらも、それらの王族の青年たち、アルジュナを上首とするすべての人たちには推測できませんでした。[202]

そこですべての王族の青年たちは、皆が合同して、聡明な菩薩の前で、順次に唱えて出題しました。[203] それを聞いて、かの偉大な賢者は心集中して、順々にあらゆる計算を解いて、すべての人々を喜ばせました。[204]

それを見て、アルジュナとすべての王族の青年たちは清澄な心で歓び、かの菩薩を眺めながら納得して、誉め称えました。[205]

高官である計算の師アルジュナは興奮して、かの王子・偉大な方を見つめながら、次の様に述べました。[206]

「王子よ、あなたはご存知でしょうが、パラマーヌ（極微）の塵［の桁］を最初として始まる計算数は如何に知りうるのか、お説きください。」[207]

このようにかのアルジュナが質問したのを聞いて、その菩薩はアルジュナとそれらの王族の青年たちを見つめながら、教示しました。[208]

「7パラマーヌ（極微）より1アヌの塵が成ずる。7アヌから1トゥルティ、と説かれる。[209]

7トゥルティからヴァーターヤナ（窓）の1塵［が出来る］と説かれる。その塵が7つで、シャシャ（兎毛）の位に出来る1塵がある。[210]

シャシャの位に出来る7塵で、エーダカ（羊毛）の位に出来る［1塵がある］。7エーダカからゴー（牛毛）の位に出来る1塵がある。[211]

7ゴーの塵から1ユーカー（虱）［になる］と勝者たちに説かれる。7ユーカーから1サルシャパ（芥子）と説かれる。[212]

7サルシャパから1ヤヴァ（大麦）と説かれる。7ヤヴァから1アングリーパルヴァン（指節）と説かれる。[213]

12パルヴァンから1ヴィタスティ（尺）と賢者に説かれる。2ヴィタスティから1ハスタ（前膊）と説かれる。[214]

4ハスタから1ダヌス（弓）。千ダヌスから1クローシャ（倶盧舎）。4クローシャから1ヨージャナ（由旬）になると牟尼の王に説かれる。[215]

――では1ヨージャナの中にどれほどの数のパラマーヌ（極微）の塵があるだろうか。その数を知る者がいれば、［答えを］示していただきたい。」[216]

そのようにかの王子が指示したのを聞いて、計算師の教師であるアルジュナは驚愕して次の様に言いました。[217]

「王子よ、ここで私すらも計算の学において意識が混乱いたします。少ない知性をもつ他の者たちの誰が、塵の計算をすることが出来るでしょうか。」[218]

その時かの王子・偉大な方は、顔に微笑みを湛えて、アルジュナをはじめとする集会場にいる人々を見つめながら、次の様に語りました。[219]

「では更に、牟尼の王たちが教示するとおりの、地の全体の大きさを説明しましょう。あなた方は一心によく聞きなさい。[220]

ジャンブ・ドヴィーパ（閻浮提）の広さは、7千ヨージャナ。プールヴァ・ヴィデーハ（東勝身洲）は8千ヨージャナ。[221] ウッタラ・クル（北倶盧洲）は1万ヨージャナと説かれ、西の洲（牛貨洲）は9千ヨージャナと説かれる。[222]

山王（須弥山）［の高さ］は８万４千ヨージャナあり、海の中に８万４千ヨージャナ沈んでいる。[223]

［高さと横幅との］二つの長さにより、七山は［それぞれ］半分半分ずつ長い。[224]　黄金に輝く、ニミンダラ・ユガンダラ・イーシャーダラ・カディラ・スダルシャナ・ヴィニータ・アシュヴァカルナ［の七山］がある。[225]

また副洲（副次的な大陸）は八つあり、七つの海、つまり塩水・甘蔗汁・バターの上澄み液・蜜・凝乳・乳・最後のもの［という名の海］に囲まれている。[226]

辺縁においてはチャクラヴァーダと大チャクラヴァーダ［の２山］によって囲まれている。［内側の］一つの海より、［それぞれ幅が］２倍の大きさの大陸が［外側に］、そして［内側の一つの］大陸より、［それぞれ幅が］２倍の大きさの海が［外側に同心円状に並んでいる］。[227]

その中心の大メール山（須弥山）にあらゆる神々の住まいがあると説かれる。［また］そこに十七［天］と呼ばれる、輝く色界がある。[228]

その下に、地獄までの、２０の［有情の種類をもつ］欲界がある。無色界のそのすべては、最高なるものとして名高い。[229]

この三界の世界は輪廻的生存をなす者たちの住まいである。業をもつ者たちにとって、業果の報いを享受する場所と言われる。[230]

この三千の百コーティの世界、輪廻的生存の住まいは、大千［世界］と、すべての賢者によって説かれる。[231]

――この三千世界すべてを、塵から成るものと考え、その塵の総数の計算をすることが出来るところの、その知恵ある大賢者は、この集会場において、私の前で、その極微塵の計算を示していただきたい。」[232-233]

その［言葉］を聞いて、計算師の教師であるかのアルジュナは驚愕して、かの王子・菩薩を見つめて、次のように言いました。[234]

「私にも、この計算に答える知恵がございません。その塵の計算を一体ここで誰が出来るでしょうか。」[235]

すると釈迦族の王族の青年たちは皆、非常に驚嘆して、かの王子・菩薩を見つめて、直ちに立ち上がり、各自がもつ衣とあらゆる装身具を贈って、お辞儀し、彼の足許に拝礼して、供養しました。[236-237]

これを聞いて、空をやって来たすべての神々は大通慧者である彼（菩薩）を拝礼して、次のように語りました。[238]

「この偉大な方がここで次第に［計算して］、計算の究極であるアサンクエーヤ（阿僧祇）をも認識されること、これは驚くべきことだ。[239]　すべての有情の、心中に思念したことや業から生じたことすべても、この勝れた知性の方は、知っておられる。」[240]

こう言って、虚空にいるかの神々すべては歓喜し、かの王子の上に花の雨を降らせました。[241]　それを目撃し、また聞いて、すべての人々は歓喜し、かの王子に敬礼し、『万歳！』の叫び声［を発すること］によって、愉快な気持ちになりました。[242]

シュッドーダナ王をはじめとするすべての王たちも歓喜し、大臣・家臣・都民たちはそれを見て、心に清らかな喜びを得ました。[243]

このように大慧あるかの菩薩サルヴァールタ・シッダはあらゆる計算の競争において勝れ、勝利を得ました。[244]

（第14章の後半に続く）

第二部

ネパールの Avadānaśataka 系アヴァダーナマーラーの研究

略号

Avś = Avadānaśataka

Ed. = the edition of Ratnamālāvadāna by K. TAKAHATA (1954)

SMRAM = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

S21 = the chapter 21 of the Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

1. SMRAM 写本の筆写年と奥書の問題

Subhāṣitamahāratnāvadānamālā（SMRAM）という世界に唯一存在する作品の写本（NGMCP B 101/3）を報告した私の論文（『南アジア古典学』第1号に掲載）は、ネパールの「Avadānaśataka 系列のアヴァダーナマーラー」についての私の研究の出発点なのであるが、その論文で報じられた SMRAM 写本こそが、上の第一部で記したように、Jayamuni の筆写した写本である。その写本を、略号を Ms. として、これまで校訂の底本として私は用いてきた。

私は過去の 2006 年と2009年の２論文において、その写本 B 101/3 をネパール暦1012年つまり西暦1892年の筆写、と記したが[29]、その日付は、Jayamuni の筆跡で書かれたものではなく、最後の葉に別人（写本の新しい所有者か）が書き加えた文の中にあるものなので、Jayamuni による写本の本当の筆写年を示すものではないと私は判断すべきであった。ここで私がその過去の論文に記した日付の誤りを訂正したい。正確には、この写本は「筆写年代不明」としなければならない。

この誤りの訂正について、もう少し詳しく説明すると、このSMRAM（B 101/3）の写本は368葉から成り、その368葉の表(おもて)面の最後の文までが Jayamuni の筆跡であるが、368葉の裏面にある全部の文は Jayamuni とは異なる筆跡をもつ。ネパール暦1012年という日付の情報はその裏面（368b）にあるのである。それ故、その別人が記した日付の情報を、写本の最後の葉にあるからといって、安易に写本の筆写年と見なすべきではなかった。

---

29. 岡野 (2006)：「Subhāṣitamahāratnāvadānamālā について」、『南アジア古典学』1号、1頁；岡野 (2009)：「Avadānakalpalatā 94-97章と SMRAM 23章 — Yaśomitra, Vyāghrī, Hastin, Kacchapa の校訂・和訳 —」、『南アジア古典学』4号、143頁。

368葉の表面（368a）の最後の文は // iti subhāṣitamahāratnāvadānamālā samāptā // śubham astu sarvajagatāṃ sarvadā // となっており、その colophonの文（368a の８行目）で、Jayamuni の筆跡は終わっている。この写本は本来ここで書き終わっていたと見るべきであり、Jayamuni 自身は筆写した年を記さなかったと判断できる[30]。その写本の最後の葉の裏面（368b）が空白のままであったので、後の時代の人がその裏面に post-colophon として余計な文を書き加えたのであろう[31]。

368a までの Jayamuni の筆跡の文字はネワール文字であるのに、その裏面 368b にある最初の４行は、Devanāgarī 的な長母音符号を付けた文字で書かれていて、その点から見ても明らかに Jayamuni の筆跡ではない。368b の１行目は、yā māyābhidhamātṛsundara-kaṭiṃ bhi(?)syā(?)ta(?)ga(?) という句である（その最後の4文字はよく読めない）。この文は或る韻文を書こうとして、途中でやめたものだろうか。

その後に続く 368b の２行目から４行目は、梵語による祈願の言葉として、３つの anuṣṭubh と１つの Upajāti からなる、祈願を内容とする韻文が書かれている。その韻文を行分けして示すと、次の４詩節である：

yatredaṃ sūtrarājendraṃ prāvartayet kalāv api /
bhā[ṣ]ed yaḥ śṛṇuyād yaś ca śrāvayed yaś ca cārayet //
eteṣāṃ tatra sarveṣāṃ saṃbuddhāḥ sakalāḥ sadā /
kṛpādṛṣṭyā samālokya kurvantu bhadram ābhavaṃ //
sarvāḥ pāramitādevyas teṣāṃ tatra sadā śivaṃ /
kurvantyo bodhisaṃbhāraṃ pūrayaṃtu jagaddhite //
anena saddharmarasāmṛtena , sarvajñabhāsvadvadanodbhavena /
kleśānalaprajvalitāturāsu , prajāsu duḥkhapraśamo (')stu nityam // //

この４詩節から成る韻文の後に、なぜか「ya」と１文字だけが左端に書かれた１行がある。

その「ya」の行の後に、３行から成るネワール語（Nevārī）による散文がある。その３行の文は、前の４行の文とは明らかに別の筆跡によってネワール文字で書かれている。筆跡は Jayamuni の字に一見似ているが —— その字の似ていることが 2006年に私が判断を誤った原因であったのであるが ——、よく見るといくつかの字の字体が決定的に

30. Marciniak (2017c: 125) が報告する Dṛḍhādhyāśayāvadāna の Jayamuni 筆写本においても、Jayamuni は śubham astu sarvadā // という言葉をもって写本を書き終える。

31. 後代の人々が写本の最後の葉の裏面に日付を含む post-colophon の文を幾重にも書き加えるのは珍しいことではなく、例えば Mahāvastu の貝葉写本 Sa の最後の 427b もその様な有様である。その 427b に二つも書かれた日付は、その写本が寺で読誦された年の記録らしい。

違っているので、Jayamuni の筆跡ではないと判断できる。問題となる1012年の日付は、そのネワール語で書かれた文の中にあるのである。私はネワール語を理解できないが、字を転写してみると、その文は次のように始まる：

śubha sambat 1012 miti jyaṣṭhakṛṣṇasaptami śukravāraṣunusvālavālāyāvajrācāryyaṃ tejaratnanaṃ elayāpaṃ dinapiniguratnābaddhārapustakathamanaṃ guṇaprakāśayāyayānimirttinaṃ [...]（以下省略）

sambat 1012 は、ネパール暦で西暦1892年にあたる。考えると、そもそも17世紀の梵語に精通した学者 Jayamuni がネワール語で奥書を書くとは思えない。実際に他の Jayamuni 筆写本では、奥書に日付を書く場合、必ず梵語で書いている。その点からも、この1012という年は Jayamuni がその写本を筆写した年を示していると見ることは出来ない。この SMRAM 写本の筆写年を判断する場合、正確な年は不明であるが、この作品と姉妹的な作品であって内容的に続編であるところの Saṃbhadrāvadāna の東大写本を Jayamuni が筆写した年（西暦1686年）よりも前に書かれたのであろうと推測される。一続きの仏伝たる２作品を筆写する場合、順に書くのが自然であろうから。

２．第21章 Pāñcālarājāvadāna 校定梵文・和訳

昨年『南アジア古典学』13号1-164頁に私は「六道頌 (Ṣaḍgatikārikāḥ) の研究 — 梵蔵漢巴 対照テクスト —」と題する論文を載せたが、その『六道頌』梵文の校訂において新たな梵語資料として利用したのが、SMRAM の中にある第21章 Pāñcālarājāvadāna（パーンチャーラ王のアヴァダーナ）の梵文テクストであった。この第21章のアヴァダーナの中に、仏の説法の言葉として、『六道頌』の第１偈（帰敬偈）以外の全部の梵文テクストが丸ごとそっくり入っていたのである。昨年に私はその『六道頌』のテクストだけを発表したのであるが、今回はその『六道頌』のテクストを含む第21章 Pāñcālarājāvadāna の全部の梵文テクストと和訳を示したい。それによってこのアヴァダーナの作者がどのように『六道頌』のテクストを引用して、第21章の話を作ったのかがわかるであろう。

以下に SMRAM 第21章『パーンチャーラ王のアヴァダーナ』の校定梵文テクストの全文と和訳を挙げる。

21 Pāñcālarājāvadāna

Ed. (= Takahata 1954), pp. 323-334

Ms. (= SMRAM) 161a1-170a1

[161a] athāśoko mahīpālaḥ kṛtāñjalipuṭo mudā /
upaguptaṃ guruṃ bhikṣuṃ natvaivaṃ punar abravīt // 1
bhadanta śrotum icchāmi punar anyat subhāṣitam /
tad yathā guruṇākhyātaṃ tathādeṣṭuṃ ca me 'rhati // 2
iti saṃprārthite rājñā sa upagupta ātmavit /
tam aśokaṃ mahīpālaṃ samāmantryaivam ādiśat // 3
sādhu śṛṇu mahārāja yathā me gurubhāṣitam /
tathāhaṃ te pravakṣyāmi śrutvānumodaya prabho // 4
tadyathāsau jagacchāstā śākyasiṃhas tathāgataḥ /
sarvajñaḥ sugato nātho dharmarājā munīśvaraḥ // 5
ekasmin samaye tatra śrāvastyā bahir āśrame /
vihāre jetakodyāne vijahāra sasāṃghikaḥ // 6
tadā sa bhagavāṃs tatra bhikṣusaṃghaiḥ puraskṛtaḥ /
sabhāmadhyāsanāsīno dharmam ādeṣṭum ārabhat // 7
taddharmadeśanāṃ śrotuṃ sarve lokāḥ samāgatāḥ /
devā daityāś ca nāgendrā yakṣagandharvakinnarāḥ // 8
siddhā vidyādharāś cāpi garuḍā rākṣasā api /
ṛṣayo brāhmaṇā vijñā rājānaḥ kṣatriyā api // 9
vaiśyā rājakumārāś ca mantriṇaś ca mahājanāḥ /
vaṇijaḥ sārthavāhāś ca gṛhasthāḥ śilpino 'pi ca // 10
grāmyā jānapadāś cāpi kārvaṭikādayo 'pi ca /
tīrthikā api te sarve jetārāma upāgatāḥ // 11
vihāre taṃ jagannāthaṃ dṛṣṭvā sāñjalayo mudā /
natvā pradakṣiṇīkṛtya samabhyarcya yathākramam // 12
tatas te muditāḥ sarve [161b] parivṛtya samantataḥ /
tat saddharmāmṛtaṃ pātum upatasthuḥ samāhitāḥ // 13
tadā sa bhagavān dṛṣṭvā sarvāṃs tān samupasthitān /
ādimadhyāntakalyāṇaṃ dideśa dharmam uttamam // 14
tat saddharmāmṛtaṃ pītvā sarve lokāḥ prabodhitāḥ /
saṃbuddhaśaraṇaṃ kṛtvā pracerur bodhisaṃvaram // 15
tasminn avasare tatra pañcāla uttarādhipaḥ /
dakṣiṇādhipapañcālaṃ parājetum upākramat // 16
tayoḥ pañcālayo rājñor viruddhātmābhimāninoḥ /

mahāyuddham abhūn nityaṃ parasparavighātanam // 17
pravartite sadā yuddhe tayo rājñor hi māninoḥ /
durbhikṣam api tatrābhūd bahulokavighātanam // 18
tadā tau kṣatriyau krūrau parasparavighātinau /
viruddhamānasau vīrau vairaśāmyaṃ na jagmatuḥ // 19
tad dṛṣṭvā nṛpatī rājā prasenajit sa kauśalaḥ /
tadvairaśamanopāyaṃ ciraṃ dhyātvā vyacintayat // 20
yad etau nṛpatī vīrau nityaṃ yuddhābhikāṅkṣiṇau /
saṃbodhisādhanaṃ dharmaṃ śrotuṃ naivābhivāñchataḥ // 21
sarve 'pi mantriṇo 'mātyāḥ sarve lokāś ca yodhinaḥ /
saṃbuddhadarśane cāpi nātrāgacchanti ke cana // 22
evaṃ teṣāṃ sadā nityaṃ hiṃsākarmābhirāgiṇām /
saddharme śravaṇe vāpi gocaraṃ naiva vidyate // 23
dharmaṃ vinātra saṃsāre kiṃ sāraṃ janma mānuṣe /
parasparaṃ nihatyaiva yāsyanti narake dhruvam // 24
dhig janma mānuṣe teṣāṃ kevalaṃ pāpasādhanam /
ye [162a] kleśamānadarpāndhā na paśyanti munīśvaram // 25
ye cātra saugataṃ dharmaṃ na śṛṇvanti kadā cana /
kathaṃ te bhadracaryāyāṃ gocaraṃ samavāpnuyuḥ // 26
sadā te māracaryāyāṃ sthitvā kleśābhimāninaḥ /
bodhicaryāṃ pratikṣipya careyuḥ kāmacāriṇaḥ // 27
tataḥ svayaṃ paribhraṣṭā bhraṃśayantaḥ parān api /
yathecchayā carantas te cinuyur bahupātakam // 28
tatas te kleśasaṃtaptāḥ svaparārthābhighātinaḥ /
tīvraduḥkhāgnisaṃtaptāḥ pateyur narake dhruvam // 29
narakeṣu bhramantas te sadā duḥkhābhibhojinaḥ /
paścāttāpāgnisaṃtaptāś careyur ābhavaṃ tathā // 30
tad eṣāṃ sarvalokānāṃ bhadrārthaṃ hitakāraṇam /
sarvathopāyam ādhātum arhāmi sāṃprataṃ drutam // 31
yāvad etau nṛpau vīrau viruddhau nopaśāmyataḥ /
tāvad atra bhuvi kvāpi maṅgalaṃ na bhavet sadā // 32
tad etau nṛpatī tāvad bodhayitvā prayatnataḥ /
maitrasnehasaṃbaddhau kuryāṃ nirvairabhāvinau // 33
etau hi kṣatriyau vīrau pāñcālau mānagarvitau /
anayor mitrabandhaṃ ko bodhayitvā kariṣyati // 34

buddha eva jagacchāstā dharmarājaḥ prabodhayan /
anayoś ciravairyāgniṃ śamayituṃ praśaknuyāt // 35
tad atra sahasā gatvā prārthayeyaṃ munīśvaram /
nūnaṃ buddhānubhāvāt tau nṛpau mitratvam āpsyataḥ // 36
iti niścitya rājā sa prasenajit samutthitaḥ /
vihāre sahasā gatvā nanāma taṃ munīśvaram // 37
tatra sa purato gatvā sāñjaliḥ samupāśrayan [162b] /
etat sarvapravṛttāntaṃ nivedyaivam abhāṣata // 38
bhagavan nātha sarvajña vijānīyād bhavān api /
yat tau pāñcālabhūpālau viruddhau bhavato 'dhunā // 39
yad etayor viruddhena sarve lokā virodhitāḥ /
tad atra sarvadā yuddhaṃ pravartate divāniśam // 40
tat tesāṃ sarvalokānāṃ saddharme gocaraṃ kadā /
sadā yuddhābhisaktās te sādhayeyuḥ śubhaṃ katham // 41
tad atra bhagavāñc chāstā bodhayaṃs tau narādhipau /
saṃbodhimārgam ādiśya śubhe cārayitum arhati // 42
iti saṃprārthite tena rājñā sa bhagavān muniḥ /
tasya rājño narendrasya tūṣṇībhūtvādhyuvāsa tat // 43
tataḥ sa nṛpatī rājā matvā śāstrādhivāsitam /
sāñjalis taṃ muniṃ natvā muditaḥ svālayaṃ yayau // 44
tataḥ sa bhagavān pātram ādāya cīvarāvṛtaḥ /
bhāsayan bhadratāṃ kurvan pratasthe saha sāṃghikaiḥ // 45
evaṃ sarvatra mārgeṣu bhāsayan sa munīśvaraḥ /
kṛtvā bhadraṃ krameṇaivaṃ vārāṇasīm upācarat // 46
tatra sa bhagavān prāpto bhābhiḥ saṃbhāsayan kramāt /
caran kṛtvā subhadratvaṃ mṛgadāva upācarat // 47
tatra sa bhagavān prāptaḥ sasaṃghaḥ saugatāśrame /
sabhāmadhyāsanāsīnaḥ saddharmaṃ samupādiśat // 48
tat saddharmāmṛtaṃ pītvā sarve lokāḥ pramoditāḥ /
triratnaṃ śaraṇaṃ kṛtvā prabhejire samādarāt // 49
tadā dakṣiṇapāñcālanṛpatiḥ sa pramoditaḥ /
saṃbuddhadarśanaṃ kartuṃ mṛgadāva upācarat // 50
tatra taṃ śrīghanaṃ dṛṣṭvā nṛpatiḥ sa pramoditaḥ /
sāñjaliḥ purato gatvā natvaikānta [163a] upāśrayat // 51
tasminn avasare tatra mṛgadāve samāśritaḥ /

bhagavān iti śuśrāva pāñcāla uttarādhipaḥ // 52
sa uttarapāñcālo nṛpatiḥ pratiroṣitaḥ /
taṃ nṛpaṃ yāmyapāñcālaṃ parājetum upācarat // 53
tatra sa nṛpatir vīraś caturaṅgabalaiḥ saha /
jayavādyamahotsāhaiḥ sahasā samupāsarat // 54
tatra sa yāmyapāñcālo rājā taṃ ripum āgatam /
niśamya sahasotthāya natvāha taṃ munīśvaram // 55
bhagavan nātha sarvajña sa me vaira ihāgataḥ /
tad atra kiṃ kariṣyāmi tadanujñāṃ dadātu me // 56
iti tena narendreṇa prārthite sa jineśvaraḥ /
dṛṣṭvā taṃ yāmyapāñcālaṃ samāśvāsyaivam ādiśat // 57
nṛpate mā vibhaiṣīs tvaṃ dhairyam ālambya tiṣṭhata /
tad upāyaṃ kariṣyāmi yenāsau te vaśe caret // 58
ity ādiśya sa sarvajñaś caturaṅgabalānvitam /
mahatsainyādhipaṃ vīraṃ nirmāya 'preṣayat tataḥ // 59
sa sainyādhipatir vīraś caturaṅgabalaiḥ saha /
carann uttarapāñcālam abhiyoddhum upācarat // 60
tan mahat sainyam āyātaṃ samālokyābhyupadrutam /
sarva uttarapāñcālasainyā bhītāḥ parāyayuḥ // 61
tad dṛṣṭvottarapāñcālo nṛpatiś cāpi kheṭitaḥ /
ekākī ratham āruhya bhagavatsaṃmukhe 'carat // 62
tatra sa dūrato dṛṣṭvā śrīghanaṃ taṃ sabhāśritam /
avatīrya rathāt tatra mṛgadāva upācarat // 63
tatra sa nṛpatī rājā samupetya kṛtāñjaliḥ /
tridhā pradakṣiṇī[163b]kṛtya nanāma śaraṇaṃ gataḥ // 64
tataś cirāt samutthāya sa pāñcalo narādhipaḥ /
tatsaddharmāmṛtaṃ pātuṃ tatraikānte samāśrayat // 65
tadā sa bhagavān dṛṣṭvā nṛpatiṃ taṃ samāśritam /
āryasatyaṃ samārabhya dideśa dharmam uttamam // 66
tad āryasatyam ākarṇya nṛpatiḥ so 'bhibodhitaḥ /
saṃsārasādhanaṃ dharmaṃ punaḥ śrotuṃ samaicchata // 67
tataḥ sa nṛpatī rājā samutthāya kṛtāñjaliḥ /
praṇatvā bhagavantaṃ taṃ prārthayad evam ādarāt // 68
bhagavan nātha sarvajña bhavatāṃ śaraṇaṃ vraje /
tan me 'trānugrahaṃ kṛtvā samyag ādeṣṭum arhati // 69

yad atra bhagavan sattvāḥ pravartanto bhavodadhau /
sukhaduḥkhābhibhuñjānā bhramante ṣaḍgatau katham // 70
karmaṇā kena devāḥ syur mānuṣāḥ kena karmaṇā /
daityāś ca karmaṇā kena tat samyak samupādiśa // 71
tiryañcaḥ karmaṇā kena pretāś ca kena karmaṇā /
nārakāḥ karmaṇā kena tat sarvaṃ samupādiśa // 72
tatrāpy anekarūpāś ca sarve bhinnāśayā api /
nihīnamadhyamotkṛṣṭāḥ sukhaduḥkhānvitā api // 73
etat sarvaṃ samākhyāya bhavāñ chāstā jagadguruḥ /
saṃsāragatisaṃcāraṃ prabodhayitum arhati // 74
iti saṃprārthite tena rājñā sa bhagavān sudhīḥ /
taṃ viśuddhāśayaṃ bhūpaṃ dṛṣṭvaivaṃ samupādiśat // 75
sādhu śṛṇu mahārāja saṃsāragaticāraṇam /
samyag dharmaṃ pravakṣyāmi yuṣmākaṃ paribodhane // 76

kāyavāgmānasaṃ karma kṛtaṃ yac ca śubhā[164a]śubham /
lokas tasya phalaṃ bhuṅkte kartā nānyo 'sti kasya cit // 77 = SGK 2
iti sarve kṛpāviṣṭās trailokyaguravo jināḥ /
uktavantas tathā tad dhi karmaṇo yasya yat phalam // 78 = SGK 3
tad vakṣāmi samāsena śrotuṃ yuktaṃ bhavārthibhiḥ /
karma kartuṃ vihātuṃ ca sadasadgatihetukam // 79 = SGK 4
lobhamohabhayakrodhā ye narā naraghātinaḥ /
*saṃvadhyānyāṃś ca hiṃsanti saṃjīvaṃ yānti te dhruvam // 80 = SGK 5
saṃvatsarasahasrāṇi bahūny api hatā hatāḥ /
saṃjīvanti yatas tatra tena saṃjīva ucyate // 81 = SGK 6
mātāpitṛsuhṛdbandhumitradrohakarāś ca ye /
paiśunyānṛtavaktāraḥ kālasūtrābhigāminaḥ // 82 = SGK 7
kālasūtreṇa saṃsūtrya pāṭyante dāruvad yataḥ /
jvaladbhiḥ krakacais tatra kālasūtras tataḥ smṛtaḥ // 83 = SGK 8
dāvādau dahanair dāhaṃ dehināṃ vidadhāti yaḥ /
sa tīvrair jvalanair jantus tapyate tapane raṭan // 84 = SGK 9
tīvraṃ tapanasaṃtāpaṃ tanoty eva nirantaram /
yat tato *'nvarthayā loke khyātas tapanasaṃjñayā // 85 = SGK 10
dharmādharmaviparyāsaṃ nāstiko yaḥ prakāśayan /
saṃtāpayati cānyāṃś ca tapyate sa pratāpane // 86 = SGK 11
pratāpayati tatrasthān sattvāṃs tīvreṇa vahninā /

tapanātiśayenāsau proktas tasmāt pratāpanaḥ // 87 = SGK 12
ajaiḍakaśṛgālāṃś ca śaśākhumṛgasūkarān /
anyāṃś ca prāṇino ghnanti saṃghātaṃ yānti te narāḥ // 88 = SGK 13
saṃhatās tatra ghātyante samyag vā *hananaṃ yataḥ /
tasmāt saṃghāta ity evaṃ vikhyāto 'nvarthasaṃjñayā // 89 = SGK 14
kāyavāgmānasaṃ tāpaṃ ye kurvantīha dehinām /
ka[164b]ṭukāpaṭikā ye ca rauravaṃ yānti te narāḥ // 90 = SGK 15
tīvreṇa vahninā tatra dahyamānā nirantaram /
raudraṃ ravaṃ vimuñcanti yatas tasmāt sa rauravaḥ // 91 = SGK 16
devadvijaguror dravyaṃ hṛtaṃ yair duḥkhinām iha /
te mahārauravaṃ yānti ye cānyasvāpahāriṇaḥ // 92 = SGK 17
raudratvād vahnidāhasya ravasya ca mahattayā /
rauravo hi mahāṃs tasya mahattvarauravād api // 93 = SGK 18
kṛtvā guṇādhike tīvram apakāraṃ nihatya ca /
mātāpitṛgurūn kalpam avīcau pacyate dhruvam // 94 = SGK 19
asthīny api viśīryante raudrāgnau tatra dehinām /
yato na vīciḥ saukhyasya tenāvīcir udāhṛtaḥ // 95 = SGK 20
mithodroharatā ye 'tra raṇe ghnantīva dehinaḥ /
pāpād asinakhās te tu jāyante duḥkhabhāginaḥ // 96 = SGK 21
nakhā evāsayas teṣām āyasā jvalitāḥ kharāḥ /
tair anyonyaṃ nikṛntanti yat tenāsinakhāḥ smṛtāḥ // 97 = SGK 22
lohajvalitatīkṣṇāgrāṃ (or °grāḥ) ṣoḍaśāṅgulakaṇṭakām (or °kāḥ) /
balād ārohyate krandan śālmalīṃ (or °līḥ) pāradārikaḥ // 98 = SGK 23
lohadaṃṣṭrā mahākāyā jvalitās tīvrabhairavāḥ /
āśliṣya bhakṣayanty enaṃ paradārāpahāriṇam // 99 = SGK 24
āraṭanto 'pi khādyante śvagṛdhrolūkavāyasaiḥ /
asipattravane chinnā narā viśvāsaghātinaḥ // 100 = SGK 25
ayoguḍāni *bhojyante prataptāni punaḥ punaḥ /
pāyyante kvathitaṃ tāmraṃ ye parasvāpahāriṇaḥ // 101 = SGK 26
krūraiḥ śvabhir ayodaṃṣṭraiḥ khādyante vivaśā bhṛśam /
varṣakoṭī raṭanto 'pi ye sadākheṭake ratāḥ // [165a] 102 = SGK 27
matsyādīñ jalajān hatvā jvalattāmradravodakām /
yāti vaitaraṇīṃ śaśvad vahninā dahyate naraḥ // 103 = SGK 28
yaḥ svārthalavasaṃmūḍho vyavahāram adhārmikam /
karoti narake krandan sa cakreṇābhipīḍyate // 104 = SGK 29

pīḍā bahubhir ākāraiḥ kṛtā yair dehināṃ iha /
pīḍyante te ciraṃ taptair yantraparvatamudgaraiḥ // 105 = SGK 30
bhedakā dharmasetūnāṃ ye cāsanmārgavādinaḥ /
kṣuradhārācitaṃ mārgaṃ gatvā krāmanti te narāḥ // 106 = SGK 31
nakhaiḥ saṃcūrṇya yūkādīṃś cūrṇyante meṣaparvataiḥ /
bhūyo bhūyo mahākāyāḥ krandantas te śaracchatam // 107 = SGK 32
vrataṃ yas tu samāśritya samyag no parirakṣati /
sa śīryamānamāṃsāsthiḥ kukūle pacyate dhruvam // 108 = SGK 33
aṇunāpi hi yaḥ kaścin mithyājīvena jīvati /
bhakṣyate kṛmibhiś caṇḍaiḥ sa magno gūthamṛttike // 109 = SGK 34
dṛṣṭvāpi vrīhimadhyasthān prāṇinaś cūrṇayanti ye /
āyasair muṣalais taptaiḥ kṣobhyante te punaḥ punaḥ // 110 = SGK 35
atyantakrodhanāḥ krūrāḥ śaṭhāḥ pāpābhikāṅkṣiṇaḥ /
paravyasanahṛṣṭāś ca jāyante yamarākṣasāḥ // 111 = SGK 36
sarveṣām eva duḥkhānāṃ bījaṃ *mṛdvādibhedataḥ /
kāyavāgmānasaṃ pāpaṃ yat tad aṇv api varjayet // 112 = SGK 37
// narakakāṇḍaṃ samāptam //
haṃsapārāvatādīnāṃ kharāṇām api rāgiṇām /
yonau rāgeṇa jāyante mūḍhāḥ kīṭādiyoniṣu // 113 = SGK 38
sarpāḥ krodhopanāhābhyāṃ mānastabdhā mṛgādhipāḥ /
abhimānena jāyante gardabhaśvādiyoniṣu // 114 = SGK 39
mātsaryerṣyādidoṣeṇa vānarāḥ pretya dehinaḥ /
jāyante mukharā dhṛṣṭāś capalātmāś ca vāyasāḥ // 115 = SGK 40
vadhabandhanamātsaryair gavāśvādiṣu dehi[165b]naḥ /
jāyante krūrakarmāṇo lūtāḥ kharjūravṛścikāḥ // 116 = SGK 41
vyāghramārjāragomāyu-ṛkṣagṛdhravṛkādayaḥ /
jāyante pretya māṃsādāḥ krodhanā matsarā narāḥ // 117 = SGK 42
dātāraḥ krodhanāḥ krūrā narā nāgamaharddhikāḥ /
bhavanti tyāgino darpāt krodhāc ca garuḍeśvarāḥ // 118 = SGK 43
kṛtaṃ yat pāpakaṃ karma svayaṃ vākkāyamānasam /
tiryañcas tena jāyante tan manāg api mā kṛthāḥ // 119 = SGK 44
// iti tiryakkāṇḍaṃ samāptam //
bhakṣyabhojyāpahartāro ye kṣudrā dānavarjitāḥ /
bhavanti kuṇapāhārāḥ pretās te kaṭapūtanāḥ // 120 = SGK 45
viheṭhayanti ye bālān vañcayanty api tṛṣṇayā /

te 'pi garbhamalāhārā jāyante kaṭapūtanāḥ // 121 = SGK 46
hīnācārātidīnāś ca matsarā nityakāṅkṣiṇaḥ /
jāyante ye narāḥ *pretya pretās te galagaṇḍakāḥ // 122 = SGK 47
dānaṃ nivārayaty eva na ca kiṃcid dadāti yaḥ /
kṣutkṣāmo 'sau mahākukṣiḥ pretaḥ śūcīmukho bhavet // 123 = SGK 48
dhanaṃ rakṣati vaṃśārthaṃ na bhuṅkte na dadāti yaḥ /
dattādāyī tataḥ pretaḥ śrāddhabhoktā sa jāyate // 124 = SGK 49
yaḥ parasvāpahārepsur dattvā caivānutapyate /
bhoktā viṭśleṣmavāntānāṃ pretya pretaḥ sa jāyate // 125 = SGK 50
apriyaṃ vakti yaḥ krodhād vākyaṃ marmāvaghaṭṭanam /
bhavaty ulkāmukhaḥ pretaḥ suciraṃ tena karmaṇā // 126 = SGK 51
kurute kalahaṃ [166a] yas tu niṣkṛpaḥ krūramānasaḥ /
kṛmikīṭapataṅgādaḥ preto 'sau jyotiko bhavet // 127 = SGK 52
grāmakūṭo dadāty eva yo dānaṃ pīḍayaty api /
kumbhāṇḍo vikṛtākāraḥ pūjyamānaḥ sa jāyate // 128 = SGK 53
nirdayāḥ prāṇino ghnanti bhakṣyārthaṃ ye dadaty api /
bhakṣyabhojyāni te 'vaśyaṃ labhanti pretya rākṣasāḥ // 129 = SGK 54
gandhamālāratā nityaṃ mandakrodhāḥ pradāyakāḥ /
gandharvāḥ pretya jāyante devānāṃ ratihetavaḥ // 130 = SGK 55
krodhanaḥ piśunaḥ kaś cid arthārthaṃ yaḥ prayacchati /
sa piśācaḥ praduṣṭātmā jāyate vikṛtānanaḥ // 131 = SGK 56
nityapraduṣṭāś capalāḥ parapīḍākarā narāḥ /
saṃpradānaratā nityaṃ bhūtāḥ pretya bhavanti te // 132 = SGK 57
krūrāḥ kruddhāḥ pradātāraḥ priyāsavasurāś ca ye /
jāyante pretya yakṣās te krūrātmānaḥ surāpriyāḥ // 133 = SGK 58
mātāpitṛgurūn yānair ye nayanti yathepsitam /
vimānacāriṇo yakṣā jāyante te sukhānvitāḥ // 134 = SGK 59
tṛṣṇāmātsaryadoṣeṇa pretya pretā bhavanty amī /
yakṣādayaḥ śubhaiḥ kliṣṭair atas tān parivarjayet // 135 = SGK 60
// iti pretakāṇḍaṃ samāptam //
devāsuramanuṣyeṣu dīrgham āyur ahiṃsayā /
jāyate hiṃsayālpāyur ato hiṃsāṃ vivarjayet // 136 = SGK 61
kuṣṭhakṣayajvaronmādā ye cānye vyādhayo nṛṇām /
bhavanti kṛtair bhūteṣu vadhabandhanatāḍanaiḥ // 137 = SGK 62
yo hi hartā parasvānāṃ na ca kiṃcit prayacchati /

mahatāpi prayatnena sa dravyaṃ nādhigacchati // 138 = SGK 63

adattaṃ vittam ādāya dānāni ca dadāti yaḥ /
sa pretya dravyavān bhūtvā bhūyo bhavati nirdhanaḥ // 139 = SGK 64

yo na hartā na dātā ca na [166b] cātikṛpaṇo naraḥ /
kṛcchreṇa mahatā dravyaṃ sthiraṃ sa labhate dhruvam // 140 = SGK 65

yo na hartā parasvānāṃ tyāgavān vītamatsaraḥ /
ahāryaṃ vipulaṃ vittam iṣṭaṃ sa labhate naraḥ // 141 = SGK 66

āyurvarṇabalopetaḥ śrīmān rogavivarjitaḥ /
sukhī ca sa bhaven nityaṃ yo dadātīha bhojanam // 142 = SGK 67

salajjo rūpavān bhogī succhāyaḥ prāṇināṃ priyaḥ /
sa bhaved vastralābhī ca yo vastrāṇi prayacchati // 143 = SGK 68

āvāsaṃ yo dadātīha suprasannena cetasā /
prāsādāḥ sarvakāmāś ca jāyante tasya dehinaḥ // 144 = SGK 69

upānatsaṃkramādīni ye prayacchanti mānavāḥ /
bhavanti sukhino nityaṃ yānāni ca labhanti te // 145 = SGK 70

prapākūpataḍāgādīn kārayitvā jalāśrayān /
sukhinas tyaktasaṃtāpā niṣpipāsā bhavanti te // 146 = SGK 71

puṣpair abhyarcitaḥ śrīmāñ charaṇyaḥ sarvadehinām /
sadā samṛddhaḥ sa bhaved ārāmaṃ yaḥ prayacchati // 147 = SGK 72

vidyādānena pāṇḍityaṃ prajñābhyāsena cāpyate /
bhaiṣajyābhayadānena rogamuktas tu jāyate // 148 = SGK 73

dīpadānena cakṣuṣmān vādyadānena susvaraḥ /
śayanāsanadānena sukhī bhavati mānavaḥ // 149 = SGK 74

gavādīn yo dadātīha bhojyaṃ kṣīrasamanvitam /
balavān varṇavān bhogī dīrghāyuḥ sa bhaven naraḥ // 150 = SGK 75

kanyādānena kāmānāṃ lābhī syāt parivāravān /
dhanadhānyasamṛddhas tu bhūmidānena jāyate // 151 = SGK 76

pattraṃ puṣpaṃ phalaṃ toyam abhayaṃ vacanaṃ priyam /
yad yad evepsitaṃ *bhaktyā dātavyaṃ tat tad arthinaḥ // 152 = SGK 77

kleśayitvā dadātīha svargārthaṃ vā bhayena vā /
yaśaḥsaukhyābhilāṣād vā kliṣṭaṃ sa labhate phalam // 153 = SGK 78

svakārthanirape[167a]kṣeṇa kṛpāviṣṭena cetasā /
parārthaṃ yo dadātīha so 'kliṣṭaṃ phalam aśnute // 154 = SGK 79

yat kiṃcid dīyate 'nyasmai yathākālaṃ yathāvidhi /
tena tena prakāreṇa tat sarvam upatiṣṭhate // 155 = SGK 80

parān anupahatyaiva yathākālaṃ yathepsitam /
kleśayitvā dātavyaṃ hitaṃ dharmāvirodhi yat // 156 = SGK 81
evaṃ hi dīyamānasya dānasyaiva phalodayaḥ /
dānaṃ hi sarvasaukhyānām ananyat kāraṇaṃ matam // 157 = SGK 82
viratah paradārebhyo dārān iṣṭān avāpnuyāt /
svebhyo 'py adeśakālau ca varjayan puṃstvam ṛcchati // 158 = SGK 83
paradāreṣu saṃsaktaṃ cittaṃ yo na niyacchati /
anaṅgeṣu ca rajyeta sa pumān strītvam ṛcchati // 159 = SGK 84
strītvaṃ jugupsate yā tu suśīlā mandarāgiṇī /
puṃstvam ākāṅkṣate nityaṃ sā nārī naratāṃ vrajet // 160 = SGK 85
yas tu samyaṅ nirātaṅkaṃ brahmacaryaṃ niṣevate /
tejasvī sadguṇaḥ śrīmān devair api *sa pūjyate // 161 = SGK 86
dṛḍhasmṛtir asaṃmūḍho madyapānāniṣevaṇāt /
jāyate satyavādī ca yaśaḥsaukhyānvitaḥ pumān // 162 = SGK 87
bhinnānām api sattvānāṃ bhedaṃ naiva karoti yaḥ /
abhedyaparivāro 'sau jāyate sthiramānasaḥ // 163 = SGK 88
yas tv ājñāṃ kurute nityaṃ gurūṇāṃ hṛṣṭamānasaḥ /
hitāhitābhidhāyī ca sa syād ādeyavāṅ naraḥ // 164 = SGK 89
nīcāḥ parāvamānena viparyāsena codgatāḥ /
bhavanti sukhinaḥ saukhyaṃ duḥkhaṃ dattvā ca duḥkhinaḥ // 165 = SGK 90
paraprapañcābhiratāḥ śaṭhāś cānṛtavādinaḥ /
kubjavāmanatāṃ yānti ye ca rūpābhimāninaḥ // 166 = SGK 91
jaḍo vijñānamātsaryād bhaven mūkaḥ priyāpriyaḥ /
bādhiryaṃ yāti mūḍhātmā hitavākyābhyasūyakaḥ // 167 = SGK 92
duḥkhaṃ pāpasya puṇyasya sukhaṃ miśrasya miśritam / [167b]
sarvaṃ sādṛśyanisyandam abhyūhyaṃ karmaṇaḥ phalam // 168 = SGK 93
// iti manuṣyakāṇḍaṃ samāptam //
śāṭhyena māyayā nityaṃ caraty akṛtakilbiṣaḥ /
kalipriyaḥ pradātā ca sa bhaved asureśvaraḥ // 169 = SGK 94
// ity asurakāṇḍam //
nātmanā yaḥ sukhākāṅkṣī na ca hṛṣyet parigrahaiḥ /
grahāṇām agraṇīś cāsau mahārājikatāṃ vrajet // 170 = SGK 95
mātāpitṛkulajyeṣṭhapūjakas tyāgavān kṣamī /
*hṛṣyate yo na kalahais tridaśeṣu sa jāyate // 171 = SGK 96
na vigrahe ratā naiva kalahe hṛṣṭamānasāḥ /

ekāntakuśalodyuktā ye ca yāmopagās tu te // 172 = SGK 97
bahuśrutā dharmadharāḥ suprajñā mokṣakāṅkṣiṇaḥ /
guṇair ye parihṛṣṇāś ca narās te tuṣitopagāḥ // 173 = SGK 98
śīlapradānavinaye pravṛttā ye svayaṃ narāḥ /
mahotsāhāś ca te 'vaśyaṃ nirmāṇaratigāminaḥ // 174 = SGK 99
adīnasattvā ye śreṣṭhāḥ pradānadamasaṃyamaiḥ /
guṇādhikāś ca ye yānti paranirmitatāṃ dhruvam // 175 = SGK 100
śīlena svargam āpnoti dhyānena ca viśeṣataḥ /
yathābhūtaparijñānāt paryante cāpunarbhavaḥ // 176 = SGK 101
śubhāśubhaphalaṃ karma yad etat kathitaṃ sphuṭam /
śubhena labhyate saukhyaṃ duḥkhaṃ tv aśubhasaṃbhavam // 177 = SGK 102
mṛtyur vyādhir jarā caiva cintanīyam idaṃ trayam /
viprayogaḥ priyaiḥ sārdhaṃ karmaṇāṃ ca svakaṃ phalam // 178 = SGK 103
evaṃ virāgam āpnoti viraktaḥ puṇyam ṛcchati /
pāpaṃ ca varjayaty evaṃ tac ca saṃkṣepataḥ śṛṇu // 179 = SGK 104
samyakparārthakaraṇaṃ parānarthavivarjanam /
puṇyaṃ viparyayāt pāpam uktam etad mahātmanā // 180 = SGK 105
// iti devakāṇḍaṃ samāptam //

evaṃ matvā mahārāja ṣaḍgatikārikāṃ bhave /
saṃbodhidharmam ādhāya ca[168a]ritavyaṃ sadā śubhe // 181
ye saṃbodhivrataṃ dhṛtvā pracaranti samāhitāḥ /
sarvasattvahitārthena bodhisattvā bhavanti te // 182
evaṃ vijñāya rājendra sadā bhadraṃ yadīcchasi /
triratnaṃ śaraṇaṃ kṛtvā bhaja nityaṃ samādarāt // 183
etatpuṇyavipākena sarvakleśān vinirjayan /
kramād bodhiṃ samāsādya saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 184
iti tena munīndreṇa samākhyātaṃ niśamya saḥ /
rājāpy uttarapāñcālaḥ pravrajituṃ samaicchata // 185
tataḥ sa nṛpatī rājā samutthāya kṛtāñjaliḥ /
bhagavantaṃ tam ānatvā prārthayad evam ādarāt // 186
bhagavan nātha sarvajña bhavatāṃ śaraṇaṃ gataḥ /
saṃbodhivratam ādhāya precchāmi carituṃ sadā // 187
yad bhavāñ jagatāṃ śāstā saṃbodhidharmadeśikaḥ /
tan me 'nugrahatāṃ kṛtvā pravrajyāṃ dātum arhati // 188
iti saṃprārthite tena rājñā sa bhagavān sudhīḥ /

tasya rājño manaḥ śuddhaṃ vijñāyaivam upādiśat // 189
sādhu rājan mahābhāga yadīcchasi śubhāṃ gatim /
ehi nanu samādhāya cara me śāsane vratam // 190
ity ādiśya munīndro 'sau pāṇinā tacchiraḥ spṛśan /
saṃbuddhe śāsane dharme taṃ narendraṃ samagrahīt // 191
ehīti tena śāstrokte nṛpatiḥ sa prabodhitaḥ /
muṇḍitaḥ khikkhirīpātradharo 'bhūc cīvarāvṛtaḥ // 192
tataḥ sa bhūpatiś cāpi virakto bhogyaniḥspṛhaḥ /
niḥkleśaḥ pariśuddhātmā babhūva vijitendriyaḥ // 193
sākṣād arhattvam āsādya brahmacārī nirañjanaḥ /
sa[168b]mbodhipadam āsādya saṃbuddhaḥ śrāvako 'bhavat // 194
tataḥ sa brahmavid yogī traidhātuvāsinām api /
sadevāsuralokānāṃ vandyo mānyo 'bhavad guruḥ // 195
tato dakṣiṇapāñcālarājā sa pratimoditaḥ /
utthāya sāñjalir natvā prārthayat taṃ munīśvaram // 196
bhagavan nātha sarvajña kṛpayā me prasīdatu /
traimāsyaṃ bhaktum icchāmi tat kurutām anugraham // 197
iti saṃprārthite rājñā bhagavān sa munīśvaraḥ /
nṛpatiṃ taṃ samālokya tūṣṇībhūtvādhyuvāsa tat // 198
tataḥ sa nṛpatī rājā bhagavatādhyuvāsitam /
viditvā sarvasāmagrīṃ sahasā samasādhayat // 199
tataḥ sa sajano rājā bhagavantaṃ sasāṃghikam /
yathārhabhojanair nityaṃ samabhyarcya 'bhyatoṣayat // 200
vicitracīvaraiś cāpi śrīghanaṃ taṃ sasāṃghikam /
ācchādya sāñjalir natvā praṇidhānaṃ mudā vyadhāt // 201
etatpuṇyavipākena loke 'ndhe 'parināyake /
saddharmabhāskaraḥ śāstā saṃbuddho 'haṃ bhaveya hi // 202
evaṃ tena narendreṇa praṇidhānaṃ kṛtaṃ mudā /
matvā sa bhagavān smitaṃ prāmuñcac chubharociṣam // 203
tat smitasamutpannāḥ pañcavarṇāḥ suraśmayaḥ /
prasāritās trilokeṣu bhāsayantyaḥ pracerire // 204
tadrasmisaṃparispṛṣṭāḥ sarve 'pi nārakāśritāḥ /
nirmuktavedanākhedā mahatsaukhyaṃ pralebhire // 205
tadā te vismitāḥ sarve nārakīyāḥ pramoditāḥ /
kim evaṃ jāyate saukhyam iti dhyātvā niṣedire // 206

tataḥ sa bhagavāṃ[169a]s teṣāṃ vismayākrāntacetasām /
manāṃsi paribodhārthaṃ praiṣayat tatra nairmitam // 207
tadā te nārakāḥ sarve dṛṣṭvā taṃ sugataṃ mudā /
upetya praṇatiṃ kṛtvā prābhajañ charaṇaṃ gatāḥ // 208
tatas tatpuṇyaliptās te sarve vimuktapāpakāḥ /
pariśuddhāḥ śubhātmānaḥ sadgatiṃ samupāyayuḥ // 209
tatas tā raśmayaḥ sarvā avabhāsya samantataḥ /
akaniṣṭhālayaṃ yāvat prasṛtāḥ samabhāsayan // 210
gāthāghoṣaiś ca sarvatra sarvān devān pramodinaḥ /
bodhayitvā śubhe dharme pratiṣṭhāpya pacerire // 211
tatas tā raśmayaḥ sarvāḥ piṇḍībhūtā muneḥ puraḥ /
tridhā pradakṣiṇīkṛtvā mahoṣṇīṣe samāviśat // 212
tad dṛṣṭvā te sabhālokāḥ sarve 'tivismayoddhatāḥ /
śāstā kim ādiśed dharmam iti dhyātvā niṣedire // 213
iti teṣāṃ manastarkaṃ matvānandaḥ samutthitaḥ /
upetya sāñjalir natvā prārthayat taṃ munīśvaram // 214
bhagavan hetunā kena smitaṃ muñcati sāṃpratam /
nāhetvapratyayaṃ smitaṃ na muñcanti munīśvarāḥ // 215
tad yadarthe bhavān smitaṃ muñcatīme sabhājanāḥ /
śrotum icchanti sarve tadartham ādeṣṭum arhati // 216
ity ānandoditaṃ śrutvā bhagavān sa jagadguruḥ /
sarvāṃl lokān samālokya tam ānandaṃ samabravīt // 217
evam eva sadānanda sarve buddhā munīśvarāḥ /
nāhetupratyayaṃ smitaṃ vimuñcanti kadā cana // 218
dṛśyatām ayam ānanda rājātisaṃprasāditaḥ /
satkṛtya śraddhayāsmākaṃ traimāsyaṃ bhajate mudā // 219
etatpuṇyavipākena rājāyaṃ sadguṇākaraḥ /
kramāt pāra[169b]mitāḥ sarvāḥ paripūrya balānvitaḥ // 220
sarvakleśagaṇāñ jitvā mārāñ cāpi vinirjayan /
bodhim āsādya sarvajñas tathāgato munīśvaraḥ // 221
sarvavidyādhipaḥ śāstā dharmarājo vināyakaḥ /
vijayo nāma saṃbuddho bhaviṣyati bhavāntare // 222
evam ānanda vijñāya buddhakṣetre śubhaṃ kṛtam /
tadvipāke mahatsaukhyaṃ bhadraṃ saṃbodhisādhanam // 223
triratnaśaraṇaṃ kṛtvā satkāraiḥ śraddhayā sadā /

saṃbodhivāñchibhir lokaiś caritavyaṃ śubhe mudā // 224
ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvānandādayo 'pi te /
sarve lokās tathety uktvā prābhyanandan prasāditāḥ // 225
so 'pi dakṣiṇapāñcālo rājā śrutvā pramoditaḥ /
triratnabhajanaṃ kṛtvā pracacāra śubhe sadā // 226
tadārabhya sadā tatra maṅgalaṃ nirupadravam /
samantato mahotsāhaṃ kṛtayuga ivābhavat // 227
iti me guruṇākhyātaṃ śrutaṃ mayā tathā 'dhunā /
kathyate 'tra tvayāpy evaṃ caritavyaṃ śubhe sadā // 228
prajāś cāpi mahārāja bodhayitvā prayatnataḥ /
bodhimārge pratiṣṭhāpya pālanīyāḥ sadā tvayā // 229
tathā te sarvadā bhadraṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam /
kramād bodhiṃ samāsādya saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 230
iti tenārhatādiṣṭaṃ śrutvāśokaḥ sa bhūmipaḥ /
tathety abhyanumoditvā prābhyanandat sapārṣadaḥ // 231
rājñoḥ pāñcālayor yan munikathitam idaṃ tat prasiddhāvadānam /
śṛṇvanti śrāvayanti pramuditamanasaḥ śraddhayā ye prasannāḥ /
sarve te bodhisattvāḥ sakalaguṇadharāḥ sarvasaṃpatsukhāḍhyāḥ /
kṛ[170a]tvā loke subhadraṃ munivaranilaye saṃprayānti pramodāḥ // 232

// iti pāñcālarājāvadānaṃ samāptam // 21

Apparatus criticus

3b upagupta] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): upaguptar A' N || ādiśat] Ms.: abravīt N Ed.

4b gurubhāṣitam] Ms.: guruṇoditam N Ed.

4d °modaya prabho] Ms. N: °modanāṃ kuru Ed.

8c nāgendrā] Ms.: nāgendro N: nāgāś ca Ed.

11b kārvaṭikā°] Ms. : kārpaṭikā° N Ed.

11c te] Ms. Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): tam A' N.

11d jetārāma] Ms.: jetārāme N Ed.

13c pātum] Ms. N: patu(ṃ)m Ed.

14b sarvāṃs] corr.: sarvāns Ms. N Ed.

15c saṃbuddhaśaraṇaṃ] Ms. N: saṃbuddhaṃ śaraṇaṃ Ed.

16a tatra] Ed. N: tata Ms.

17a rājñor] corr.: rājño Ms. N Ed.

17b viruddhātmābhimāninoḥ] Ms.: viruddhāsy abhimāninoḥ Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): viruddhāsyābhimāninoḥ A' N.

18b rājñor] corr.: rājño Ms. N Ed.

19d jagmatuḥ] Ms. N: jagmataḥ Ed.

20b prasenajit] Ms. N: prasenajin Ed.

21d °vāñchataḥ] ≈ °vāṃchataḥ Ms. N: °vāṃchata Ed.

25c °darpāndhā] corr.: °darppāndhā Ms. N: °darpyāndhā Ed.

33c maitrasnehasaṃ°] sic Ms. N (one syllable short). Read *maitrasnehena saṃ°?

36c °nubhāvāt] Ms. Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): °nubhāvās A'.

39c pāñcāla°] ≈ pāṃcāla° N Ed.: pāñcala° Ms.

40a viruddhena] Ms.: viruddhe ta Ed.

42d] hypermetre.

43c rājño] Ms. N: rājñe Ed.

46b bhāsayan] corr.: bhāsayaṃ Ms. N Ed.

47a bhagavān] corr.: bhagavāṃ Ms. N Ed.

47c caran] corr.: caraṃ Ms. N Ed.

47d mṛgadāva] Ms.: mṛgadāve N Ed.

48a prāptaḥ] Ms. N: prātaḥ Ed.

50d mṛgadāva] corr.: mṛgadāve Ms. N Ed.

51d natvaikānta] Ms.: natvaikānte N Ed.

52c bhagavān] Ms. N: bhagavānn Ed.

52d pāñcāla uttarā°] Ms.: pāṃcāla uttarā° N: pāṃcālauttarā° Ed.

53a sa uttarapāñcālo] sic Ms. Ed. N (one syllable short).

54d samupāsarat] Ms.: samupācarat N Ed.

55ab °pāñcālo rājā] Ms.: °pāṃcālarājā N Ed.

58a vibhaiṣīs] corr.: vibheṣīs] Ms.: vibheṣī Ed.: viṣīdas N.

58b tiṣṭhata] Ed. N: tiṣṭhan_ Ms.

59b caturaṅga°] Ms.: caturaṇga° Ed.: caturaṃga° N.

60d upācarat] Ms. N Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): upācaran A'.

62ab °pāñcālo nṛpatiś] Ms.: °pāṃcālanṛpatiś N Ed.

62d bhagavatsaṃmukhe] Ed. N: bhagavat[su]mukhe Ms.

63d mṛgadāva] Ms.: mṛgadāve N Ed.

64a nṛpatī] Ms.: nṛpati N Ed.

65a samutthāya] Ms. N: samutthāpya Ed.

70c °bhuñjānā] Ms.: °bhuṃjāno N Ed.

70d ṣaḍgatau] Ms.: ṣadgatau N Ed.

71d samyak] Ed.: sampan Ms. N.

72a tiryañcaḥ] Ms. Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): tiryañcuḥ A' N.

76d yuṣmākaṃ] Ms. N: yuṣākaṃ Ed.

The whole text of stanzas 77-180 is the same as SGK 2-105.
For apparatus criticus of SGK 2-105 see Okano (2018), pp. 45-145.

184b kleśān] Ms. N: kleśan Ed.

186c bhagavantaṃ tam ānatvā] Ms. N: bhagavantam ānatvā Ed.

190c ehi nanu] Ms.: ehi cara N Ed.

192c muṇḍitaḥ] Ms. N: om. muṇḍitaḥ Ed.

192d 'bhūc] ≈ bhūc Ms. N: bhikṣu 'bhūc Ed.

193b °niḥspṛhaḥ] Ms.: °nispṛhaḥ N Ed.

194a arhattvam] corr.: arthatvam Ms. N Ed.

200a sa sajano rājā] Ms. N: sa rājā Ed.

202d 'haṃ] ≈ haṃ Ms.: rhaṃ N Ed.

203c smitaṃ] metre!

204a tat smita°] Ms. (one syllable short): ta{ta}t smita° N. (tat add. marg.). Read *tataḥ smita°?

211b pramodinaḥ] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): pramoditaḥ A'.

212a sarvāḥ] Ms.: sarvā N Ed.

214a iti] Ms. Ed.: itis N.

214d prārthayat] Ms.: prārthaye N: prārthayet Ed.

215c smitaṃ] metre!

216a smitaṃ] metre!

218c smitaṃ] metre!

219a dṛśyatām] Ms.: paśyatām N Ed.

223b °kṣetre śu°] Ms.: °kṣetraśu° N Ed.

225d °nandan] Ms. N Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): °nandat A'.

232a rājñoḥ] Ms.: rājño N Ed.

232d loke subhadraṃ] Ms. N: lokeṣu bhadraṃ Ed.

Colophon: iti pāñcāla°] Ms.: iti pāṃcāla° N: iti ratnāvadānatatve pāṃcāla° Ed.

SMRAM 第21章『パーンチャーラ王のアヴァダーナ』 Pāñcālarājāvadāna 和訳

その時大地の守護者アショーカは欣然と合掌して、師である比丘ウパグプタに拝礼し、再び次の様に語りました。[1]

—— 尊師よ、更にまた別の善説を私は聞きたいと思います。師が［あなたに］語られたとおりに、それを私をご教示ください。[2]

このように王から懇請された智者ウパグプタは大地の守護者アショーカに話しかけて、次の様に教示しました。[3]

—— よろしい、聞きなさい、大王よ。師が私に語られたそのままに、私はあなたに語りましょう。聞いて、納得して喜びを得なさい、王よ。[4] それは次のとおりです。かの世界の師・如来・釈迦族の獅子・一切智・善逝・救い主・法王・牟尼の王は、[5](#1) ある時、シュラーヴァスティー（舎衛城）の外にある、ジェータ園のかの精舎・寺院に、僧伽の者たちと共に滞在されていました。[6]

その時かの世尊は其処で、比丘僧伽と一緒に、その前におられて、講堂の中央の座に坐って、法の教示を始められました。[7]

その教法の説示を聴聞するために、あらゆる生類が集まっていました。神々、ダイトゥヤ（阿修羅）たち、龍王たち、ヤクシャたち、ガンダルヴァたち、キンナラたち、[8] またシッダたち、ヴィドゥヤーダラ（持明者）たち、ガルダたち、羅刹たち、仙人たち、婆羅門たち、賢者たち、諸王、クシャトリヤたち、[9] またヴァイシャたち、王子たち、大臣たち、著名な人々、商人たち、隊商主たち、家長たち、工芸の匠たち、[10] また村の者たち、地方の者たち、山村の長（あるいは巡礼）をはじめとする人たち、異教徒たち、彼らジェータ園に集まり来た者すべてが、寺院でかの世界の庇護者（仏）を見て、欣然と合掌して、お辞儀し、右遶して、作法どおりに敬意を示しました。[11-12]

そして彼らすべての者は、歓びながら［仏の］まわりを取り囲んで、その正法の不死の甘露を飲まんと心を集中して、近坐しました。[13]

その時かの世尊は、近坐した彼らすべてを見つめながら、最初も途中も最後も見事な、最高の教えを説きました。[14]

その正法の甘露を飲んで、すべての者たちは覚知を得るを得て、仏に帰依し、悟りのための誓戒を行じました。[15]

その頃、その時北パーンチャーラ王は、南パーンチャーラを打ち負かすために、攻撃をかけました。[16](#2) 敵対心と増上慢をもつそれら二人のパーンチャーラ王の間で、互いに殺戮し合う大きな戦争が持続的に起こりました。[17]

常にそれら二人の高慢な王の間で戦がなされている間、その地に多くの人々を滅ぼす飢饉も起こりました。[18]

その時、互いに殺戮し合うその二人の冷酷で勇猛な王たちは、敵愾心をもち、敵意を鎮めようとしませんでした。[19] それ故、コーサラ国の王であるかのプラセーナ

ジットは、二人の王［の有様］を見て、彼らの間の敵意を消す方法を長い間思い耽って考えました。[20](#3)

「これら二人の勇猛な王たちは、絶えず戦争をしたがり、［仏が］悟りによって達成した法を聴聞することを望まない。[21]　あらゆる大臣・輔臣たちや、兵たち、すべての人々が誰一人、この時に仏に会うためにやって来ない。[22]　そのように絶えず殺傷する行為を好む彼らには、［仏の］教法を聴聞することが、視野に入っていない。[23]

教法を得ずして、この輪廻において人間に生まれたことに、何の甲斐があるというのか。相互に殺害し合って、間違いなく地獄にゆくだろう。[24]　煩悩と驕慢に盲目になって、牟尼の王（仏）を見ることがない彼らの、単に罪悪を成し遂げるだけの、人間界における生とは、なんと哀れなものか。[25]

彼らがこの世界で仏の教法を一度も聞いたことがないならば、どうして善い行いに対して関心を持てるだろうか。[26]　常に彼らはマーラ（魔）の行いに立ち、煩悩と増上慢をいだき、菩提行を馬鹿にして、欲望のままに振る舞うだろう。[27]　そして彼らは自ら堕落し、また他者をも堕落させながら、欲するがままに行動して、沢山の罪悪を積み重ねてしまうだろう。[28]　そして彼らは煩悩に燃えて苦しみ、自と他の益を害し、激しい苦痛の火に焼かれながら、疑いなく地獄に落ちるだろう。[29]　地獄から地獄へと巡りながら、彼らは絶えず苦しみを味わい、後悔の火に焼かれながら、［地獄での］生存の限り、そのように彷徨うだろう。[30]

それ故どうしても、これらすべての者たちの幸せのため役立つ手段を、今すぐに私は施してやろう。[31]　これらの反目しあう勇猛な二人の王が［戦いを］鎮めない限り、いつもこの地上には、どこにも安寧が存在しないであろう。[32]　それ故、まずは努力して、これら二人の王に覚知を得させて、敵意が消えた、友情の愛情で結ばれた者に私はしてやろう。[33]

誰がこれら二人の勇猛で高慢・尊大なパーンチャーラ王に覚知を得させて、両者の間に友情の絆を作ることができるだろうか。[34]　世界の師・法王である仏陀のみが、覚知を得させて、両者の久しい敵意の火を消すことが出来るであろう。[35]

そこで、私はここですぐに行って、牟尼の王（仏）にお願いしてみよう。きっと仏の威徳力により、あれら二人の王を［導いて］朋友たることを得させてくれるであろう。」[36]

こう決意してかのプラセーナジット王は立ち上がり、すぐに寺院に赴くと、かの牟尼の王（仏）に拝礼しました。[37]

其処で、彼は［人々の］前に進み、合掌しながら［仏に］近づくと、このすべての出来事を報告して、次の様に語りました。[38]

「世尊、救い主、一切智よ、あなた様もご存知でありましょう。あの二人のパーンチャーラ王たちが今、敵対しあっていますことを。[39](#4)　この二人が反目しあうこ

とによって、あらゆる人々が争闘させられています。そのため、この大地でいつも昼夜、戦争が起こっています。[40]　そのため、それらすべての人々にとって正法が視野に入りません。常に戦争に執着した彼らが、どうして善行を達成することができましょうか。[41]　それ故、世尊・師はここでその二人の王に覚知を得させ、悟りへの道を教示し、善行を行うようにさせてくださいませんか。」[42]

そのようにかの王によって請願されたかの世尊・牟尼（聖者）は、黙然として、その王のその［求め］に同意しました。[43](#5)

するとかの王は「師が同意してくださった」と考えて、かの牟尼に合掌して、喜んで、自分の住まいへと去りました。[44]

その後、かの世尊は鉢を手にとり、衣を纏い、光り輝きながら、［人々に］恵み［の輝き］を与えながら、僧たちと共に出発しました。[45](#6)　そのように道々、あらゆる場所で、かの牟尼の王（仏）は光り輝きつつ、［人々に］恵み［の輝き］を与えながら、次第にそうやってヴァーラーナシーに赴きました。[46]

其処に達すると、かの世尊は光明によって輝きながら、［人々に］恵み［の輝き］を与えながら、次第に遊行して鹿野苑に至りました。[47]

其処の仏教僧院に、僧伽の者たちを伴ってかの世尊は到達されると、講堂の真ん中の座にお坐りになって、正法をお説きになりました。[48]

その正法の不死の甘露を飲んで、あらゆる人々は歓喜し、三宝に帰依して、熱意をもって［三宝を］尊崇しました。[49]

その時、かの南パーンチャーラの王は喜んで、仏に会うために鹿野苑に赴きました。[50](#7)　その王は其処でかの光輝に充ちた方（仏）を見て、喜悦し、合掌して［人々の］前に進み、拝礼してから、一隅に坐りました。[51]

その頃、「世尊がかの鹿野苑にいらっしゃる」と、北パンチャーラ王は聞きました。[52]　その北パーンチャーラ王は報復の怒りをいだいて、その南パーンチャーラ王に打ち勝つために、やって来ました。[53]

その時かの勇猛な［北パーンチャーラ］王は、四兵種から成る軍隊を率い、「勝利！」という叫びと大興奮を伴って、ただちに近づきました。[54](#8)　その時、かの南パーンチャーラ王はかの仇敵が来たことを聞き知って、すぐ立ち上がり、お辞儀をして、かの牟尼の王に語りました。[55]

「世尊よ、救い主、一切智よ、私のかの仇敵がここにやって来ました。そのためここで私はどうしたらよいのでしょうか。御指示を私にお与え下さい。」[56]

そのようにかの王によって［救済を］懇請されたかの勝者たちの王（仏）は、南パーンチャーラ王をみつめ、安心させながら、次の様に答えました。[57]

「王よ、恐れることはない。心をしっかり保っていなさい。彼があなたの制御下にあって行動するように、方便（手段）を私がなすであろう。」[58]

このように教えて、かの一切智（仏）は、四兵種から成る軍隊をもつ、勇敢な大軍の将を化作して、その地から派遣しました。[59]

その軍の勇猛な将は四兵種から成る軍隊を率いて進み、北パーンチャーラと戦うために近づいて来ました。[60]　その大軍がやって来て、襲いかかるのを見て、北パーンチャーラのあらゆる兵たちが、恐怖して逃げ出しました。[61]

それを見て、北パーンチャーラ王も恐れおののき、一人で車に乗って、世尊に向かってやって来ました。[62]　彼は其処で、遠くから講堂に居られるかの光輝に充ちた方（仏）を見て、車から降りると、その鹿野苑に赴きました。[63]

其処にかの王はやって来ると、合掌して三度右遶し、［仏に］帰依してお辞儀しました。[64]　その後しばらく経って、立ち上がると、かのパーンチャーラ王はかの［仏の］正法という不死の甘露を飲まんとして、その場で一隅に坐りました。[65](#9)

その時世尊は、その坐った王を見つめながら、聖諦をはじめとする最高の教えを説き示しました。[66]　その聖諦を聴聞して、覚知を得たかの王は、輪廻に対処する手段としての教えをさらに聴聞したいと欲しました。[67]

そこでかの王は立ち上がり、合掌し、拝礼して、かの世尊に熱心に次の様にお願いしました。[68]

「世尊、救い主、一切智よ、あなた様に帰依いたします。ここで私に恩恵を施してくださり、適切にお教えくださいますよう、お願いいたします。[69]

世尊よ、この世界で生き物たちは生存の大海のただ中にいて、どのように安楽と苦しみを味わいながら、六道を廻り巡っているのでしょうか。[70]

［彼らは］いかなる業によって神々になり、またいかなる業によって人間になり、またいかなる業によって阿修羅になるのか。それを正しくお教えください。[71]

いかなる業によって畜生になり、またいかなる業によって餓鬼になり、またいかなる業によって地獄の有情になるのか。その全部をお教えください。[72]

其処（輪廻界）において、あらゆる［生類］が、多様な姿をもち、違った心をもち、下等・中等・上等の者として、［それぞれの］安楽と苦しみをもちます。[73]

教師・世界の師父であられるあなた様は、どうかそのすべてをお説きになって、『輪廻において［生類が］道を経巡っているさま』（saṃsāragaticāraṇa）を［私に］理解させてください。」[74]

このようにその王に懇願されると、深い知性をもつかの世尊は、清められた心をもつその王を見つめて、次の様にお説きになりました。[75]

— よろしい、大王よ、『輪廻において［生類が］道を経巡っていること』（saṃsāra-gaticāraṇa）を聞きなさい。あなたの覚知のために、正しく真理（法）を語りましょう。[76][32]

(2) 善と不善の、身口意の（身体・言語・心意の）業が作られた時、その果を生類は味わう。［業の］何れについても他の作者は存在しない。[77]

(3) 憐れみに満ちた、三界の師である、あらゆる勝者たち（諸仏）は［釈尊と］同様に、いかなる業にはいかなる結果があるのかを、お説きになった。[78]

(4) それ故［その教えを］要約して私は語ろう。安寧を求める者たちは聴聞するがよい。そして善趣・悪趣（善悪の報いとしての六道の諸世界）の原因である業を作ること（行為をなすこと）を捨離するがよい。[79]

(5) 強欲・痴愚・恐怖・怒りによって、人を殺し、他の［生き物］たちを殺し、殺傷するなら、その人々は確実に『生き返り』（サンジーヴァ、等活）［という地獄］に行く。[80]

(6) 幾千年もの間、其処で殺され、殺されては、また生き返る故に、それで『生き返り』（サンジーヴァ）といわれる。[81]

(7) 父母や心友や親族や友人たちを裏切り、両舌や妄語（嘘をつくこと）をした者たちは、『黒縄』（カーラスートラ）［地獄］に行く。[82]

(8) 其処では黒縄をもって［体に］墨の線を引かれてから、燃え輝くノコギリで、木材のように断ち割られるので、『黒縄』といわれる。[83]

(9) 森などを焼くことにより、生き物たちを火で焼かれるに至らしめるなら、その人は『炎熱』（タパナ）［地獄］の中で泣き叫びながら、激しい焔火によって焼かれて苦しむ。[84]

(10) ［それは］激しく炎熱をもって焼いて苦しめることを間断なく続けるので、それ故、世間において［それは］『炎熱』と、意味どおりの名で呼ばれる。[85]

(11) 断滅論者（ナースティカ）として、法と非法を取り違えた顛倒［した見解］を説きながら、他の者たちを苦しめた者は、『極炎熱』（プラターパナ）［地獄］において焼かれて苦しむ。[86]

(12) ［それは］激しい火によって、其処にいる有情たちを焼く。その炎熱の甚だしさの故に、その［地獄］は『極炎熱』といわれる。[87]

(13) 山羊・羊・ジャッカル・兎・モグラ・鹿・豚、またその他の生き物たちを殺した人は、『圧殺』（サンガータ、衆合）［地獄］に行く。[88]

---

32. 以下、第77偈〜第180偈はSGK第2偈〜第105偈の借用である。( )の中の数字はSGKの偈番号。SGKのテクスト及び訳は、昨年の『南アジア古典学』第13号で私が示したものと同一であり、修正はない。

(14) 其処で一緒に打ち合わされて（saṃhatāḥ）殺される（ghātyante）故に、或いは完全に（samyag）打ち殺されること（hananaṃ）の故に、意味どおりの名称として、『圧殺』（サンガータ）（saṃghāta）という。[89]

(15) この世で身口意の（身体・言語・心意の）苦痛を生き物たちに与えたなら、また酷く人を欺いた者なら、『叫喚』（ラウラヴァ）［地獄］に行く。[90]

(16) 其処では激しい火によって絶え間なく焼かれ、凄まじい叫喚の声を発するため、それは『叫喚』といわれる。[91]

(17) この世で神やバラモンや師長（グル）たちの、苦しむ人々の、財産を奪うことをなした者、他人の財の掠奪者たちは、『大叫喚』（マハーラウラヴァ）に行く。[92]

(18) 火に焼かれることの凄まじさ（raudratva）の故に、また叫び声（rava）の大きさの故に、それには大なる性質（mahattva）と叫喚（raurava）がある故に、『大叫喚』［という名］である。[93]

(19) 徳性が勝れた者（仏・聖者）にひどい害をなしたり、父や母や師長を殺したなら、1劫の間、『無間』（アビーチ）地獄で煮られる。[94]

(20) 猛烈な火をもつ其処では、生類たちの骨すらも粉砕されてしまう。安楽のための間（ヴィーチ、休止時間）がないので、それ故に『無間』（アヴィーチ）と呼ばれる。[95]

(21) この世で相互に傷害することを好み、闘諍において人々を殺害する者たちは、［その］悪罪によって『刀の爪をもつ者』に生まれ、苦しみの運命を受ける。[96]

(22) 彼らは燃え輝く鋭い鉄の刀を、爪としてもつ。それらを使ってお互いに切り裂き合うので、それ故『刀の爪をもつ者』と呼ばれる。[97]

(23) 鉄で出来た燃えあがる鋭い先端があり十六指の長さの刺をもつシャールマリ樹（鉄刺林）を、他人の妻と通じた男は、泣き叫びながら無理やり登らせられる。[98]

(24) 鉄の牙をもち、巨躯で、燃え輝き、凄まじく恐ろしい女たちが、他人の妻を奪ったその男を抱擁して、食らう。[99]

(25) 仲間への裏切りをなした人々は、泣き叫びながら、犬や鷲や梟や鴉に食われ、剣の葉の樹林（剣葉林）で切られる。[100]

(26) 他人の財を奪った者たちは、焼けた鉄丸を幾度も食べさせられ、また溶けた銅を呑ませられる。[101]

(27) いつも狩猟を愉しんだ者たちは、数千万年にわたって、泣き喚きながら、鉄の牙をもった獰猛な犬たちに、抗するすべもなく、激しく［体を］食われる。[102]

(28) 魚などの水生の生物たちを殺したなら、燃え輝く銅の流れを河水としてもつ、ヴァイタラニー河に人は行き、［そこで］絶えず火によって焼かれる。[103]

(29) わずかな自分の利益のために愚かに迷って、非法の行いをする者は、地獄において泣き叫びながら車輪（チャクラ）によって苦しめられる。[104]

(30) 多様なあり方で生き物たちを虐げ苦しめた者たちは、灼熱した機械仕掛けの山々のハンマーによって久しい間押し潰されて苦しめられる。[105]
(31) 教え（法）という橋を破壊し、不正なる道を説く者であった人々は、剃刀の刃先によって覆われている道へと行き、［そこを］歩む。[106]
(32) 爪によって虱など［の虫］を潰したなら、百年の間、羊たちの［如き］山々によって、大きな身体をもつ彼らは泣き喚きながら何度も、粉々に潰される。[107]
(33) 誓戒に依って［僧として］暮らしながら、正しく［戒を］守らなかった者は必ずや、［両足の］肉も骨は壊滅して落ちつつ、『熱灰』（ククーラ）［という名の地獄］において、焙られるだろう。[108]
(34) 少しでも邪な生計によって生活した者は、誰であっても糞の泥の中に沈み、凶暴な虫どもに食われる。[109]
(35) 米の中にいる生き物（虫）を、見ただけで［それらを］つぶしていた者たちは、熱した鉄の杵をもって何度も搗かれる（かき混ぜられる）。[110]
(36) とても怒りっぽく、残忍であり、欺き、悪を欲し、他人の不幸を喜ぶ者は、ヤマ（閻魔）の［獄卒たる］ラークシャサ（羅刹）たちとして生まれる。[111]
(37) 身口意の（身体・言語・心意の）悪業は、「微弱」から始まる区分に従って、あらゆる苦しみの種子である。だからそれはわずか（微少）であっても捨離しなければならない。[112] ——**『地獄の節』終わる。**
(38) ［人々は］貪欲の故に、貪欲をもつ［生き物たちである］ハンサ鳥や鳩などの胎に、また驢馬たちの胎に、生まれる。痴愚の者たちは、［死後に］虫などの胎に生まれる。[113]
(39) 怒りと恨みによって蛇に［生まれ］、また尊大で倨傲の者たちはライオンに［生まれ］、また高慢によって驢馬や犬などの胎に生まれる。[114]
(40) 慳貪と嫉妬などの悪徳によって、人々は死んで猿猴に生まれる。おしゃべりな者、傍若無人の者、軽佻な心の者たちは鴉として生まれる。[115]
(41) 殺害・束縛（監禁）・慳貪によって、人々は、牛や馬などに生まれる。残忍な行為をした者たちは、蜘蛛や蠍に生まれる。[116]
(42) 肉食をした、怒りっぽい慳貪な人々は、死んでから虎・猫・ジャッカル・熊・鷲・狼などに生まれる。[117]
(43) 布施をするが、冷酷で怒りっぽい人々は、大神力あるナーガ（龍）になる。また布施する者であって驕慢により、あるいは怒りにより、ガルダ（金翅鳥）王となる。[118]
(44) 身口意の（身体・言語・心意の）、自ら作った悪業（自らなした悪い行為）により、畜生に生まれる。それ（悪業）をわずかでも、作ってはならない（なしてはならない）。[119] ——**『畜生の節』終わる。**

(45) 布施をしないで、卑しく、硬い食物や軟かい食物を盗んだ者たちは、カタプータナという、死体を食物とする餓鬼になる。[120]
(46) 子供たちに危害を加えたり、渇愛によって［彼らを］欺したりした者たちは、子宮の排泄物を食べるカタプータナに生まれる。[121]
(47) 下劣な行動により甚だ下賤であり、慳貪で、いつも［物を］欲しがっている人々は、死後に、喉に大きな腫瘤をもつ餓鬼（ガラガンダカ）になる。[122]
(48) ［他人の］布施を妨げ、何一つ布施しない者は、［死後に］大きな腹をもち、針の口をもつ、飢えのために痩せ細った餓鬼となる。[123]
(49) 一族のために財産を守り、消費もせず布施もしない者は、与えられたものだけを受けとる［だけの］、祖霊祭のお供えを食べる餓鬼に生まれる。[124]
(50) 他人の財を奪うことを欲し、また与えてから後悔する者は、死後に糞・痰・吐瀉物を食べる餓鬼となる。[125]
(51) 怒りによって［相手の］急所を突く、不快な言葉を語る者は、その行為によって久しい間、かがり火のような口をもつ餓鬼（焔口餓鬼）となる。[126]
(52) 憐れみなく、冷酷な心をもち、闘争をなす者は、［死後に］蛆虫や虫や蛾を食べる、火と燃える餓鬼（炎光餓鬼）になる。[127]
(53) 村のかしらとして、［自ら］布施を与えるが、［村人たちを］圧迫した（横暴に苦しめた）者は、［後世に］醜い姿をしながら尊重される、クンバーンダ（鳩槃茶鬼）に生まれる。[128]
(54) 与える者であっても、食物のために無慈悲に生き物たちを殺したなら、必ず死後に、彼らはラークシャサとして［生まれ］、軟食・硬食を獲得する。[129]
(55) いつも香と花環を愉しみ、あまり怒らず、布施をする者は、死後に神々の快楽の因となる者として、ガンダルヴァ（乾闥婆）に生まれる。[130]
(56) 怒りっぽく、誹謗中傷をなし、［自分の］利益のために布施をする者は、誰でも、邪悪な心をもち顔が醜異であるピシャーチャ（食肉鬼）に生まれる。[131]
(57) 常に邪悪で、心落ち着かず、他者を悩害するが、いつも布施することを喜ぶ人々は、死んでブータ（化け物）になる。[132]
(58) 布施をするが、残忍で、激しく怒り、アーサヴァ酒やスラー酒を愛するならば、死後に、残忍な心をもちスラー酒を好むヤクシャに生まれる。[133]
(59) 車で父母や師長たちを望まれた通りに運んであげる者たちは、［死後に］安楽を具えて、天車（天宮）で［空を］移動するヤクシャに生まれる。[134]
(60) 渇愛・慳貪の過罪により、死後にそれらの者たちは餓鬼になる。また染汚ある善業により、［死後に］ヤクシャなどになる。それ故、それら［の行為］を避けるべきである。[135] ——『餓鬼の節』終わる。

(61) 不殺生（アヒンサー）により、天界・阿修羅界・人界において長い寿命がある。殺生によって、短い寿命をもつ者として生じる。それ故、殺生を避けるべきである。[136]
(62) レプラ・消耗病（肺結核）・熱病・狂気、その他の疾病に人々が罹るのは、［前世に］殺害や束縛（監禁）や打擲を生き物たちに行ったことによってである。[137]
(63) 他人の財を奪い取り、何一つ［布施を］与えなかった者は、大変な努力をしても蓄財をなしえない。[138]
(64) 譲ったものではない［他人の］財を盗み取り、布施を与えるなら、死後に［人は］金持ちになってから、さらに財無き者となる。[139]
(65) 甚だしい吝嗇ではない人が、［他人から］奪い取らないが、与えもしなかった場合は、必ずや大変な苦労をもって（kṛcchreṇa）［細く長く］持続する財産を得る。[140]
(66) 他人の財を奪うことなく、物惜しみなく布施をなした人は、奪われることがない、望んだとおりの大きな財産を得る。[141]
(67) この世で食物を布施する人は、［後に］長寿・美貌・力をそなえ、栄誉あり、病に罹らず、いつも幸せな者になるだろう。[142]
(68) 衣を布施するならば、［後に］羞恥心をそなえ、見目良く、享楽し、美しく、人々から愛され、衣服を得る者になる。[143]
(69) この世でもし浄い喜びの心をもって住居を布施するなら、［後に］その人にはあらゆる感覚的享楽（欲楽）をそなえた豪邸が生じる。[144]
(70) 履き物や橋などを布施した人々は、［後に］いつも快適であり、種々の乗物を得る。[145]
(71) 水飲み場や井戸や池などの給水場を作らせたなら、［後に］熱苦をのがれて、快適であり、喉の渇きに苦しめられない。[146]
(72) 園林を布施した者は、［後に］花々で敬意を示され、栄誉をもち、あらゆる人々が帰依し頼りにする人となり、つねに繁栄するだろう。[147]
(73) 学問を教えることによって、［後に］高い学識が得られる。反復読誦によって［後に］智慧が得られる。また薬と安全（無畏）を与えることによって、［後に］病がない者に生まれる。[148]
(74) 灯明の布施によって［後に］人はよい視力をもつ。音楽（あるいは楽器）の布施によって［後に］美声をもつ。座臥具の布施によって［後に］安楽となる。[149]
(75) この世で牛乳（あるいは牛）などを、また乳を入れた食物を施すなら、［後に］人は体力あり、容色に恵まれ、［富財を］享受し、長生きになる。[150]
(76) 女子を［婢として］布施することによって、［後に］従者たちを持ち、感覚的な享楽（欲楽）を獲得するだろう。地所の布施によって、［後生に］財や穀物を豊かにそなえた者に生まれる。[151]

(77) 葉・花・果実・水・安全（無畏）・好ましい言葉［など］、なんでも欲するものを、深い敬いをもって、求める人に与えるべきである。[152]
(78) この世で天界の［転生の］ため、あるいは［三悪趣への落下の］恐怖の故に、［贈与の行為を欲望で］汚しながら、布施するならば、あるいは［布施が］名声や幸福への欲求によるものならば、その者は染汚された果を得る。[153]
(79) 自分の利益［を求める心］を捨てて、憐れみに満ちた心で、この世で他者のために布施するならば、その者は染汚されない果を得る。[154]
(80) もし他者のために、適した時に正しいやり方で、何らかの物が布施されたなら、［後に］そのすべてのものが、同じ仕方で［自分に］与えられる。[155]
(81) 時に応じて、望まれたとおりに、他の者たちに害を及ぼすことなく、［施与を欲望で］汚すことなく、法を破ることなく、利益を与えるべきである。[156]
(82) なぜならそのように与えられた布施に対してのみ、果の出現があるから。布施はあらゆる幸福にとっての、他ならぬ唯一の原因であると見なされる。[157]
(83) 他人の妻（姦通）から身を遠ざける者は、［後生に］美しい妻を得る。不適切な場所・時に自分の［妻］も避けるなら、［後生に］男性たることを得る。[158]
(84) 他人の妻に執着した心を抑制しない者が、もし［彼女らとの］性愛の行為を楽しむなら、その男は［後生に］女性たることを得る。[159]
(85) 女であることを嫌悪し、性質が善良で、愛欲に関心が薄く、男であることを願うなら、その女性は［後生に］つねに男性となる。[160]
(86) ［心に］煩いがなく、正しく、梵行（純潔の生活）を実践するなら、［後生に］善い徳性を具えて、輝かしく、栄誉ある者となり、神々からも敬われる。[161]
(87) 飲酒をしないなら、［後に］堅固に記憶を保ち、意識の迷乱がない者となる。真実を語る者であるなら、［後に］名声と幸せが具わった人となる。[162]
(88) 人々が分かれている時に、［彼らを］対立させない（不和にすることをしない）者は、［後世に］分裂のない（結束した）従属者たちを有する、心がいつも安定した者として生まれる。[163]
(89) いつも師長（グル）たちからの教令を歓びの心で実行し、［人々に］益と不益を教えるなら、言葉が信頼される人になる。[164]
(90) 他人を見下すことで［後生に］卑しい者になり、またその逆の［行為］によって［後生に］身分の高い人になる。幸せを与えれば幸せな人になり、苦しみを与えれば苦しむ人になる。[165]
(91) 他人を言葉で愚弄する（手玉にとる）ことを楽しむ者、欺し、偽りを話す者、［己の］容姿に高慢心をもつ者たちは、［後生に］傴僂や小人となる。[166]

(92) 認識（学問的知を得ること）に対して吝嗇であることによって、［後生に］愚鈍になる。親切［な言葉］に対して不親切な態度［で応じる］ならば、［後生に］唖になる。愚昧な者が有益な言葉（忠告）に対して立腹するなら、［後生に］聾になる。[167]

(93) 悪業には苦が、福徳には楽が、［善悪］混じった［業］には混じった［果］がある。業のすべての果は、［因と］相似する結果をもつものと推察される。[168] ——**『人間の節』終わる。**

(94) 罪を犯さないが、つねに欺きと幻惑をもって行動し、闘争を好み、布施をする者であるならば、阿修羅（アスラ）王になるだろう。[169] ——**『阿修羅の節』［終わる］。**

(95) 自ら進んで安楽を願い求めることなく、また所有財によって心悦ぶことがないなら、その者は［後生に］惑星たち（九曜の神々）の首長としての、マハーラージカ天（四天王）になる。[170]

(96) 父母と一族の長老たちを大切にし、喜捨をなし、よく堪忍し、諍いに喜悦することがないなら、三十三天に生まれる。[171]

(97) 闘争を楽しまず、諍いに喜ぶ心をもたず、ひたすら善に専心して努力する者たちは、ヤーマ（夜摩）天に至る。[172]

(98) 多くを聞いて学び、教えを堅持し、すぐれた智慧をもち、解脱を求め、諸々の徳性によって大いに喜ぶ人々は、トゥシタ（兜率）天に至る。[173]

(99) 自ら進んで戒行・布施・［行動を］律することに専念し、大きな努力をする人々は、必ずニルマーナ・ラティ（化楽）天に行く。[174]

(100) 気高い有情であり、布施と克己と自制によって徳性が抜きん出た最高の者たちは、確実にパラ・ニルミタ（他化自在）天に行く。[175]

(101) 戒によって天界を得る。禅定によって殊更に［それを得る］。終には如実智によって、再生しないことを得る。[176]

(102) ［以上により］行為（業）は善果か悪果をもつものであることが明瞭に語られた。善行により楽が得られる。また苦は不善行から生じるものである。[177]

(103) この三つ一組のもの、死・病・老いを、よく思惟すべきである。愛しい者たちとの別れも、もろもろの業による自らの［得た］果である。[178]

(104) このようにして離貪を得るのであり、離貪した者は福徳を得る。このようにして罪悪を遠離する。まとめるなら、この［言葉］を聞きなさい。[179]

(105) 「他者を害することを避けて、正しく他者の益のために行為することが、福徳である。罪悪はその逆である。」このことが牟尼の王（仏陀）によって説かれた。[180] ——**『神々の節』終わる。**

（以上でSGK 第２偈〜第105偈の借用終わる）

大王よ、このように理解して、『六道頌』（Ṣaḍgatikārikā）という開悟の法を受持して、この生存において、つねに白浄の［行為］をなすべきです。[181]

悟り［を得る］ための誓戒を堅持して、専心して行ずる者たちは、あらゆる生類の利益のために、菩薩になります。[182]

大王よ、このように認識して、いつも幸せを願うならば、三宝に帰依して、常に熱心に［三宝を］尊崇しなさい。[183]　そのことの福徳の異熟により、あらゆる煩悩を克服しながら、次第に悟りに達して、仏の位を得るでしょう。[184]　——

このようにその牟尼の王が説かれたのを聞いて、その北パーンチャーラ王は出家することを望みました。[185](#10)

そこでかの王は立ち上がり、合掌して、かの世尊を拝んで、熱意をもって次の様に懇願しました。[186]

「世尊、救い主、一切智よ、私はあなた様に帰依し、悟りの誓戒を受持して、つねに行じたいと欲します。[187]　あなた様は悟りの法をお示しになる、生きとし生けるものの教師ですので、私に恩恵をたまわり、出家することをお与えくださいますよう、お願いいたします。」[188]

その王にこのように懇請されて、洞察力あるかの世尊は、その王がもつ清らかな心を認識し、次の様に命じました。[189]

「よろしい、王よ、大幸運の者よ、もしあなたが白浄の道を望むなら、来なさい。私の教えにおいて誓戒を受持し、行じなさい。」[190]

このようにかの牟尼の王は教令を与え、手で彼の頭を撫でて、法・仏の教えにかの王を摂受しました。[191]

かの師によって「来なさい」と言われたかの王は、覚知を得て、剃髪し、杖と鉢をもち、法衣を纏った者になりました。[192]

その後、かの王は貪欲を離れ、欲望の対象に関心なく、煩悩なく、清らかな心で、感官を制御した者になりました。[193]

作証して、阿羅漢の位に達し、汚れなき者・梵行者として、悟りの境地に達し、悟りを得た声聞になりました。[194]　そして彼（北パーンチャーラ王）は梵智をもつヨーガ行者として、三界に住する神々や阿修羅を含む有情たちから敬礼され尊敬されるグルになりました。[195]

さてその後、南パーンチャーラ王は［仏の許で］心悦ばされ、立ち上がって合掌し、拝礼してかの牟尼の王に懇請しました。[196](#11)

「世尊、救い主、一切智よ、憐れみによって［あなた様の］恩顧に私があずかりますように。三箇月の間、私は［僧伽を］奉仕することを欲します。それ故、恩恵（許可）をたまわりますように。」[197]

このように王が懇請すると、かの世尊・牟尼の王は、かの王を見つめ、黙然としてそれに同意されました。[198]

するとその王は世尊が同意されたことを知って、あらゆる物品をただちに準備しました。[199]　その王と臣下の者たちは、常に敬意を示しながら、もてなすにふさわしい食べ物をもって、世尊と僧伽の者たちを満足させました。[200]

かの光輝に充ちた方（仏）と僧伽の者たちを、種々の衣をもって身にまとわせてあげてから、合掌し、拝礼すると、欣然として［次の］誓願をしました。[201]

「この福徳の異熟により、指導者なきこの黒闇の世間において、太陽の如く正法の光を放つ教師・仏陀に私はなれますように。」[202](#12)

かの世尊は「かの王は欣然とこのように誓願をなした」と思考して、白浄の光をもつ微笑を発しました。[203](#13)

すると微笑から生まれた五色の美しい光線たちが、照らしながら三界に拡がって、行きわたりました。[204](#14)

地獄に居るあらゆる者たちは、その光線に触れて、苦の感受の苦悩から解放され、大いなる安らかさを得ました。[205]　かれら地獄の有情すべては、驚嘆し、歓喜して、「どうしてこのように安らかさが生じたのか」と思いながら、腰を下ろしました。[206]　するとかの世尊は、心が驚嘆に襲われている、その彼らの心に覚知を得させるため、その世界に化身（化仏）を送りました。[207]

その時、それらの地獄の有情は欣然とその善逝［の姿］を見て、近づき、拝礼して、帰依をなし、崇め敬いました。[208]　すると、その［行為］の福徳が付着した彼らすべては、罪悪から解放されて、清らかな白浄の心で、よい世界（善趣）に赴きました（生まれ変わりました）。[209]

その後それらの光線すべては至るところを照らして、アカニシュタ天（有頂天）の住処に至るまで拡がって、［全世界を］輝かせました。[210]　偈頌［を説き示す］音声を伴って、あらゆる場所において、あらゆる歓喜する神々に覚知を得させて、［彼らを］白浄の法に安立せしめながら、［光線は］行きわたりました。[211]

その後それらすべての光線は牟尼の前でひとかたまりになり、［仏を］三度右遶してから、偉大な頂髻に入りました。[212]

それを見て、講堂に集まったかれら全員は甚だしい驚愕に興奮し、「［これから］師（仏）はいかなる法をご教示になられるのだろうか」と思いつつ坐りました。[213]

そのような彼らの心中の思案をアーナンダは思いやって、立ち上がり、近づいて合掌して拝礼し、かの牟尼の王にお願いしました。[214]

「世尊よ、今いかなる原因によって、微笑を発せられたのでしょうか。仏たちは、因も縁もなくして、微笑を発せられることはありません。[215]　それ故、『何のために

あなた様が微笑を発せられたのか』と、これらの講堂の人々は皆、それを聞きたいと願っています。その目的をご教示ください。」[216]

このようにアーナンダが尋ねるのを聞いて、かの世尊・世界の師父は、すべての人々を見つめて、そのアーナンダに語りました。[217]

「まさしくその通りです、アーナンダよ、すべての仏・牟尼の王は常に因も縁もなくして、微笑を発することはないのです。[218]

アーナンダよ、ご覧なさい。この甚だ心に浄らかな信を得ている王は、信仰心をもって私たちを供養し、三箇月の間、欣然として奉仕しました。[219](#15)

この事の福徳の異熟により、多くの徳性をそなえ持ったこの王は次第に［六］波羅蜜すべてを完成させ、［十］力をもち、[220] 一切の煩悩群を克服し、マーラ（魔）たちに勝利し、悟りに達して、一切智・如来・牟尼の王として、[221] 一切の学術の王・教師・法王・導師として、別の生においてヴィジャヤという名の仏になるでしょう。[222]

アーナンダよ、このように、仏国土においてなされた善行は、その異熟として、大きな安楽・幸福・悟りの達成をもたらすと認識して、[223] 三宝に帰依し、信仰心をもって常に［仏・僧に］供養することによって悟りを欲する人々と共に、善行を喜んで行じなさい。」[224]

こう、牟尼の王が教示されたのを聞いて、アーナンダをはじめとする彼らすべての人々は、「そういたします」と答えて、浄信を得て、喜びました。[225](#16)

かの南パーンチャーラ王も聞いて歓喜し、三宝を尊崇しながら、つねに常に善行を行いました。[226]

その時以来、常にその地には災いなく、安寧がありました。至るところで大きな活気と歓びがあり、まるでクリタ・ユガ期におけるが如くでした。[227]

以上、師がお教えになったことを、私が聴聞したとおりに、そのまま私は今ここでお話しました。あなたも同様に、常に善行をなさって下さい。[228]

大王よ、あなたは努力して民衆に覚知を得せしめ、悟りへの道に安立させ、常に守護してください。[229]

かくして、彼らにはいつも必ず至るところで幸せがあるでしょう。［彼ら民衆は］漸次に悟りに到達し、仏の位を得ることでしょう。[230] ——

以上のように阿羅漢（ウパグプタ）が説かれたのを聞いて、かのアショーカ王は「そういたします」と言って、随喜し、同座の者たちと共に、［その教えを］喜んで受け入れました。[231]

牟尼が説かれたところの、二人のパーンチャーラ王についての、この有名なアヴァダーナを聞いて、喜悦の心をもち、浄信をいだく者たちが、信心により［他の人々にそれを］聞かせてあげるならば、彼らすべては菩薩として、すべての善い性質を保持し、

あらゆる繁栄と安楽を豊かにもち、世界に幸福を作り、歓喜して最高の牟尼の住まい（極楽）へと至ることであろう。[232]

以上、『パーンチャーラ王アヴァダーナ』（pāñcālarājāvadāna）終わる。第21章。

2．Avadānaśataka 第８章 Pañcālaḥ とSMRAM 第21章の比較

上の節で校訂テクストと和訳を示した SMRAM 第21章 Pāñcālarājāvadāna の原話である Avadānaśataka 第８話の全訳を次に示す[33]。原話と再話の違いを見比べることによって、再話における独創がどこにあるかを知ることが出来る。

アヴァダーナ・シャタカ第８話『パーンチャーラ』（Pañcālaḥ）和訳

SPEYER ed., i 41.1-46.7

---

33. この第８話の和訳にあたっては、Avś の Speyer 校訂本を利用し、また一応 Speyer が利用した17世紀の Jayamuni 筆写の紙写本である CUL の Add. 1611 写本も確認した。Speyer は Jayamuni 筆写のその CUL の紙写本を Avś の最良の写本とみなし、写本 B としてその読みを丁寧に脚注で報告している。Demoto (2006: 214) によれば、その CUL の紙写本はネパールの Avś の貝葉写本 NGMPP E 1554/24 から筆写されたものであるようだ（つまりその貝葉写本は Speyer がその存在を推測した hypothecal ms である A にあたる）。CUL の Add. 1611 と NGMPP E 1554/24 の両写本の関係の確認については次の論文がある：David V. Fiordalis (2019): "The Avadānaśataka and the Kalpadrumāvadānamālā: What should we be doing now?", *Critical Review for Buddhist Studies*, 25, pp. 47-77. 貝葉 E 1554/24 の読みを綿密に確認するという手法で、もし今後梵文 Avś の研究を進めていったとしても、Avś の梵文テクストの改善においては、Mahāvastu の貝葉の場合のような劇的に大きな収穫が得られる見込みはあまりなさそうである。（Mahāvastu の場合、強度の仏教梵語をもつ貝葉 Sa から作られた Jayamuni の紙写本は、Jayamuni の梵語修正の努力が裏目に出て、原文に忠実な筆写本とはいえないものであった。）Jayamuni が紙写本 Add. 1611 の作成において直接的もしくは間接的に基づいた貝葉 E 1554/24 以外に、それと全く筆写の系統が異なり、出来れば作品の全体に及ぶような、質の良い別の Avś 写本が今後どこかで発見されない限りは、Speyer が百年以上も前に成し遂げた梵文の校訂を全体的に根本的にやり直すような大規模な校訂を達成することは難しいであろう。最近 Demoto (2006) によってスコイエン・コレクションの Avś の断片写本が報告されたが、その出本充代による写本の報告はドイツのトルファン探検隊の断片写本の報告（SHT）と並んで、貴重である。ただ今回私が取り上げる Avadānaśataka 第８話のテクストについては、SHT と Demoto (2006) において断片写本の発見の報告はなされていない。Cf. Demoto, M. (2006): "Fragments of the Avadānaśataka", In: *Buddhist Manuscripts, Volume III of Manuscripts in the Schøyen Collection*, Jens Braarvig (Ed.), 207–244. Oslo: Hermes Publishing.

#1　仏・世尊は、王や大臣や資産家や市民や富商や隊商長や神や龍やヤクシャや阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに敬意をもって遇され、重んじられ、尊ばれ、供養されておりました。このように神や龍やヤクシャや阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに崇められる仏・世尊は、有名な大福徳者であり、衣服・施食・臥具坐具・病気治療薬という［四種の］日常の必要な品を得ており、弟子たちの僧伽と共に、シュラーヴァスティーにあるジェータ林（祇園）・給孤独長者の園林に滞在しておりました。

#2　その頃、北パーンチャーラ王は南パーンチャーラ王と敵対し合っていました[34]。

#3　コーサラの王プラセーナジットは世尊のもとに行きました。行って、世尊の御足を頂礼して、一面に坐しました。一面に坐ったコーサラ王プラセーナジットは世尊に申し上げました。

#4　「大徳よ、世尊は無上の法王であられ、苦難の中にいる有情たちの救済者であられ、相互に憎しみ合う者たちから憎悪をお消しになる方です。かの北パーンチャーラ王は南パーンチャーラ王と敵対し合っています。両者は相互に多くの人々を殺害しています。どうか世尊は憐れみをもたれて、彼らの久しく続く敵愾心をお鎮めになられてください。」

#5　世尊は沈黙によって、コーサラ王プラセーナジットに同意されました。するとコーサラ王プラセーナジットは「世尊が沈黙することにより同意をなされた」と知って、世尊の御足を頂礼すると、座より立って、去りました。

#6　その夜が過ぎ去って、晨朝の時を過ごされた後、世尊は、鉢と衣をお取りになり、カーシーの都城であるヴァーラーナシーへと遊行しました。次第に遊行しながらヴァーラーナシーに達すると、ヴァーラーナシーのリシパタナ・鹿野苑に滞在されました。

#7　その時に、二人［の王たち］は「世尊がわれわれの支配地に到着された」と知りました。

#8　その時、世尊は神通力により四兵種から成る軍隊を化作したので、北パーンチャーラ王は恐怖させられました。恐れた彼は一つの車に乗って、世尊のもとにやって来ました。

#9　彼の敵意を滅除するために、世尊は法を説かれました。

#10　彼はその法を聴聞すると、世尊のもとで出家しました。専心し努力し精進しつつある彼は、すべての煩悩を滅ぼして、阿羅漢の境地を証得しました。

---

34. Speyer は梵文テクストのこの文の後の位置に何らかの説明的な文の欠落があると考えるが、しかし蔵訳は梵文と同じであるから、ここに欠落があると見なす必要は特にない。

#11　南パーンチャーラの王は、世尊および弟子たちの僧伽を三箇月間、百味ある（美味い）食事に招待しました。また百千の衣をもって［彼らの身を］覆いました。そして誓願をなしました。

#12　「私はこの善根によって、発［菩提］心によって、与えるべきものを与えたことによって、指導者なく導き手がいない［この］盲目の闇の世界の中にいる、無救済の有情たちを救済する者、無解脱の者たちを解脱させる者、安心を得ていない者たちを安心させる者、般涅槃に入っていない者たちを般涅槃に入れる者に、なれますように」と。

#13　その時、世尊は南パーンチャーラ王がもつ原因の連続・業の連続を知って、微笑を表されました。

#14　これは法性（常法）なのですが、仏・世尊が微笑を表す時は、［必ず］青・黄・赤・白の光線が口から発せられ、ある光線は下方に行き、ある光線は上方に行きます。下方に行った［光線たち］は、等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻（無間）、アルブダ・ニラルブダ・アタタ・ハハヴァ・フフヴァ・青蓮華・紅蓮華・大紅蓮華の諸地獄に行きますが、［その光線たちは］熱地獄では冷たいものになって落ち、寒地獄では暖かいものになって落ちます。そのことによってそれらの有情たちの格別な苦しみが和らげられます。彼らは考えます、「君たちよ、いったい私たちはこの［地獄の］世界から死没したのだろうか、ああひょっとすると別の世界に生まれたのではないだろうか」と。［その時］世尊は、彼らに浄信を生じさせるために、化身（化仏）を送ってあげます。その化身を見て、彼らは考えます。「君たちよ、私たちはこの［地獄の］世界から死没したのでもなく、別の世界に生まれたのでもない。そうではなく、この未だかつて見たことがない一人の有情がおられるが、この方の威神力のおかげで、私たちがもつ格別な苦しみが静められたのだ」と。— 彼らは化身［の仏］に対して浄信を得た故に、地獄で苦を受けなければならないその業を滅ぼして、天や人間に再生を得て、そこで真理を受けとる器量がある者となります。

上方に行った［光線たち］は、四大王・三十三・ヤーマ・兜率・化楽・他化自在へ、梵衆・梵輔・大梵へ、少光・無量光・極光浄へ、少浄・無量浄・遍浄へ、無雲・福生・広果・無煩・無熱・善現・善見・色究竟の諸天へと行き、「無常、苦、空、無我」と音声を響かせます。そして［光線より次の］二偈が説かれます。

「始めなさい。出離しなさい。仏の教えに専心しなさい。
象が蘆の小屋をなぎ倒すように、死魔の軍隊をなぎ倒しなさい。(8.1)
この［仏の］教法と律において怠ることなく行ずる者は、
再生と輪廻を捨てて、苦を終結させることであろう」と。(8.2)

それらの光線は三千大千世界を経巡ってから、世尊へと次々に背後から追随します。もし世尊が過去の業を記別しようと欲する場合は、［光線は］世尊の背後で消えます。未来の業を記別（予言）しようと欲する場合は、世尊の前で消えます。地獄への誕生を記別しようと欲する場合は、足の裏で消えます。畜生への誕生を記別しようと欲する場合は、踵で消えます。餓鬼への誕生を記別しようと欲する場合は、足の親指で消えます。人間に生まれることを記別しようと欲する場合は、両膝で消えます。軍事力の転輪王（下級の転輪王）としての王位［に就くこと］を記別しようと欲する場合は、左の掌で消えます。転輪王としての王位［に就くこと］を記別しようと欲する場合は、右の掌で消えます。天への誕生を記別しようと欲する場合は、臍で消えます。声聞の悟りを記別しようと欲する場合は、口で消えます。独覚の悟りを記別しようと欲する場合は、白毫で消えます。無上正等覚を記別しようと欲する場合は、頂髻で消えます。

その時、その光線たちは世尊を三度右遶してから、世尊の頂髻で消えました。するとその時、具壽アーナンダは合掌して［仏に］語りました。

「多様で千の色合いがある色とりどりの［光の］帯が、御口から輝き出て、
それによってあらゆる方角が遍く照らされました、
あたかも昇りつつある太陽によるかのように。」(8.3)

［そして］偈を説きました：

「傲慢さをもたず、意気消沈も傲りもない方たち、
世界で最高の原因であられている、［死魔という］敵を滅ぼした勝者である
仏たちは、原因理由なくして、法螺貝や蓮の繊維のように真っ白である
微笑をお示しになることはありません。 (8.4)
英雄よ、知性によってその時機［の到来］を自ら理解して、
望んでいる聴衆のために、沙門よ、勝者たちの王よ、
堅固で浄らかな最高の言葉によって、聖者中の最勝者よ、
［聴衆に］生じた疑いを取り除いて下さい。(8.5)
海や山王のように心が不動である、悟りを得た者たち・救い主たちは、
理由なく微笑をお示しになることはありません。
なにゆえに心堅固な者たちが微笑を示されたのか、
それをかの大勢の人々が聞きたいと願っております」と。(8.6)

世尊は答えました。「その通り、アーナンダよ、その通りです。無因・無縁の微笑を如来・阿羅漢・正等覚が表すことはありません。
#15　見なさい、アーナンダよ、この南パーンチャーラ王は私にこれほどの供養をしたのです。」—「おっしゃる通りです、大徳よ。」

「アーナンダよ、このパーンチャーラ王は、その善根により、発［菩提］心により、また与えるべきものを与えたことによって、三阿僧祇劫かかって達成される［最高の］悟りを獲得して、大悲が染み込んだ六波羅蜜を完成させて、ヴィジャヤという名の正等覚者になることでしょう —— ［仏としての］十力をそなえ、四無所畏（四種の説法の自信）を、三不共念住（三種の特別な『専念の確立』）を、大悲をそなえて。また彼の「与えるべきもの」とは、私に対する心の浄信です。」

#16　このように世尊は説かれました。感激した彼ら比丘たちは世尊のお説きになった［教え］を喜んで受け入れました。

以上が Avadānaśataka 第８話の全訳である。訳にある # 番号は、Avś のテクストを私が切り分けて付けた paragraph number であり、対照の便宜のためにテクストを細かく分割した上で付けた番号である。SMRAM は Avś の再話文献であるから、以下に Avś 第８話と SMRAM 第21章（略号 S21）の内容的対応を示す対照表を挙げたい。Avś の # 番号の後に、その箇所の Speyer 本の巻・頁・行と段落冒頭の語を（例えば i.41.2-6 buddho bhagavān のように）示し、その次に = を挟んでその段落に内容的に関係する S21 の該当箇所を verse number で挙げる（例えば = S21 vv.5-15のように）。また記号の○は Avś 第８話の内容が S21 の詩形改稿において膨張している箇所を示す。◎は異常に膨張している箇所を示す。

#1 i.41.2-6 buddho bhagavān = S21 vv.5-15 ○

#2 i.41.6-7 tena khalu samayeno° = S21 vv.16-19

#3 i.41.8-42.1 atha rājā = S21 vv.20-38 ○

#4 i.42.1-4 bhagavān nāma = S21 vv.39-42

#5 i.42.4-6 adhivāsayati = S21 vv.43-44

#6 i.42.7-9 atha bhagavāṃs = S21 vv.45-49

#7 i.42.9-10 yāvat tayor = S21 vv.50-53

#8 i.42.10-11 yāvad bhagavatā = S21 vv.54-64 ○

#9 i.42.11 tasya bhagavatā = S21 vv.65-184 ◎

#10 i.42.11-13 sa taṃ dharmaṃ = S21 vv.185-195 ○

#11 i.43.1-2 dakṣiṇapāñcāla° = S21 vv.196-201

#12 i.43.2-5 anenāhaṃ = S21 v.202

#13 i.43.6-7 atha bhagavān = S21 v.203

#14 i.43.7-46.1 dharmā khalu = S21 vv.204-218

#15 i.46.1-6 paśyasy ānandānena = S21 vv.219-224

#16 i.46.7 idam avocad = S21 vv.225-227

以上の両者の対照から、S21は、その最初と末尾にある『枠』物語の部分（vv.1-4とvv.228-232）を除いて、全体的にAvś第８話『パーンチャーラ』とSGKを種本にして再話していることが確認される。

上記の表において○（小膨張）と◎（大膨張）の印をつけた五つの膨張箇所について、どう膨張しているのか、説明すると、次のとおり：

Avśの#1にあたる、S21の小膨張箇所 vv.5-15： Avśの#1は、釈尊が或る時舎衛城のジェータ林・給孤独園に滞在されていたことを語るが、S21では釈尊がその園に滞在し、説法を行った時、あらゆる生類が聴衆として集まって来て、説法を聴聞したことを語る。両テクストのこのパートの語り方はごく形式的で、他の章の冒頭部分と類似する。

Avśの#3にあたる、S21の小膨張箇所 vv.20-38： Avśの#3は、コーサラ国王プラセーナジットが釈尊のもとに行って挨拶して話しかけたという、それだけの行為を語るにすぎないのに対し、S21ではコーサラ国王が釈尊のもとに行く前に、どのように熟慮をめぐらせたか、王の思考の内容が、第21～36偈に詳しく語られる。

Avśの#8にあたる、S21の小膨張箇所 vv.54-64： Avśの#8は、釈尊が化作した軍隊を恐れた北パーンチャーラ王が窮境を逃れるため釈尊のもとに来たことを語る、２行の文にすぎない。それに対しS21では、なぜ釈尊がわざわざ軍隊を化作して北パーンチャーラ王を恐れさせたのか、その化作の行為の理由を説明するため、話を少しオリジナル化し、南パーンチャーラ王が釈尊に救いを懇請したという出来事を作った。

Avśの#9にあたる、S21の大膨張箇所 vv.65-184： Avśの#9は、わずか１文であり、世尊が王に説法をしたということだけを伝え、その説法の内容については語らない。他方S21では仏は王に二度も説法をしており、二度目の説法において、その説法の内容として六道輪廻（saṃsāragaticāraṇa）を説き、第77～180偈においてSGKのテクストの帰敬偈を除く104偈の全文をそのまま流用することで、本来Avśで１文であった記事を、S21はここで120偈もの量があるものへと大膨張させた。S21を作った編集者がここでSGKのテクストを馬鳴の作品としてではなく、仏説（仏の説法の内容）として扱っている点に注意する必要がある。

Avśの#10にあたる、S21の小膨張箇所 vv.185-195： Avśの#10は、説法を聞いた王が釈尊のもとで出家し、修行に精進して阿羅漢になったということをごく短く語る。S21は同じことをもっと詳しく語り、出家を願い出た王と、出家を許す釈尊とのやりとりを、会話体で生き生きと具体的に表現する。

第三部

Avadānakalpalatā 第84章 Madhurasvarāvadānam

マドゥラスヴァラのアヴァダーナ

クシェーメーンドラの Bodhisattvāvadānakalpalatā（菩薩アヴァダーナの如意蔓；以下、Kalpalatā）の校訂・翻訳をこれまで続けてきて、合計17の章がすんだ[35]。今回は第84章『マドゥラスヴァラのアヴァダーナ』の校訂・翻訳を行いたい。

近年デープン寺（'Bras spungs）の貝葉写本２本の存在が確認されたことは、Kalpalatā の原典研究にとって極めて重大な意義がある。今度のこの第84章の研究にあたって、海外の同学の研究者たちの勧めと許可を得て、その２本のデープン寺貝葉写本の画像を見せていただくことが出来た。海外の友人たちに深く感謝したい。

それら新発見のデープン寺写本については Liu Zhen (劉震) 博士の報告があるので[36]、詳細はその論文を読んでいただきたいが、彼の報告を一読しただけでも、２写本がもたらす Kalpalatā の原典研究への衝撃の大きさがわかっていただけよう。それらの古写本が、チベット大蔵経丹殊爾にある Kalpalatā の蔵訳の作成、ならびにダライ・ラマ５世版やデルゲ版等の梵・蔵２言語を併記する bilingual 本の蔵字梵文音写（梵文のチベット文字による音写）テクストの作成に使われた当の写本である可能性は極めて高い。また特にそのデープン寺の片方の写本 Br1 は無欠損の完本であるので、これまでネパールでも写本が見つかっていなかった Kalpalatā の前半部の第40章以前の部分の梵文テクストの本格的な校訂への道が、その写本により開けたことになる。私はそれらの２写本を、Liu Zhen 論文に従って略号を Br1 と Br2 として、本章の校訂において初めて用いることにした。

貝葉写本 Br1 と Br2 は書かれた文字がよく似ており、また読みの誤りを両写本が共有している箇所（例えば 84.55a）が見られるゆえに、両写本は同一の系統の筆写伝承か

---

35. これまでこの『南アジア古典学』誌上で私が梵文と蔵訳テクストの校訂ならびに翻訳を発表した Kalpalatā の章は：50 Daśakarmaplutyavadāna, 55 Sarvaṃdadāvadāna, 76 Vidurāvadāna, 77 Kaineyāvadāna, 78 Śakracyavanāvadāna, 79 Mahendrasenāvadāna, 80 Subhadrāvadāna, 81 Hetūttamāvadāna, 82 Nārakapūrvikāvadāna, 83 Rāhulakarmaplutyavadāna, 91 Śibisubhāṣitāvadāna, 92 Maitrakanyakāvadāna, 93 Sumāgadhāvadāna, 94 Yaśomitrāvadāna, 95 Vyāghryavadāna, 96 Hastyavadāna, 97 Kacchapāvadāna の諸章である。

36. Liu Zhen (2019): "A Brief Introduction to Two Manuscripts of Bodhisattvāvadānakalpalatā Found in Tibet", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 72-1, pp. 33-46.

ら生まれたと見てよい。筆写者や筆写年代は異なっても恐らく同じ場所・同じ写経場で作られた写本なのではないだろうか。一方、ネパールの紙写本 B と E は、貝葉写本 A の読みを修正する試みも稀にあるが、A と同じ写本系統に属すことは間違いなく、A を底本にした写本から派生した写本であると見なしうる。ネパールに伝わった A 写本の伝承と、チベットに伝わった Br1 Br2 の写本の伝承は、筆写の系統が違うので、A の読みと Br1 Br2 の読みとは校訂上の重要性が等しい異読を提供する。

私のこれまでの校訂研究では梵文写本として A 系統のネパール写本しか利用できなかったので、私が過去に校訂を発表した諸章の梵文に対しても今後 Br1 Br2 の読みを調べてみて、校訂の正しさを再検討してみたいと思っている。

では以下に Kalpalatā 84章の梵文・蔵訳の校定テキストと梵文の和訳を挙げたい[37]。

84 Madhurasvarāvadāna

略号[38] D: Khe 199a3-204a6　Q: Ge 301b1-304a4　N: Ge 270a5-272b4
G: Ge 381b5-385b3　T: 505a6-509b4

Skt. Mss.: A *327b4-*330b5; B 103b1-104b14; E 91b4-94a6;
Br1 242b7-245a1; Br2 146a5-149b3 (*147a5-*150b3).

aucityena karoti yaḥ sumanasām ānandasāndraṃ manaḥ
krūrāṇām api śīryate paricitaṃ yasyānubhāvāt tamaḥ /
ekaḥ ko 'pi sa jāyate jitajagannāthaprabhāvodbhavaḥ
puṇyaṃ yasya na yāti mānakalanāṃ niḥsaṃkhyasaṃkhyāpadaiḥ // 84.1 //

---

37. ドイツの出本充代博士はこの Kalpalatā の章の原稿をチェックして下さり、貴重な修正意見を下さった。これまで Kalpalatā の諸章の校訂・翻訳において私の過誤を最小限に減らせたのは博士のチェックのおかげである。変わらぬ御親切に感謝を申し上げたい。

38. 使用した略号はほぼ Straube (2006) に従う：D = Derge; Q = Peking; N = Narthang; G = Ganden (or Golden Tanjur); T = ダライ・ラマ５世木版印刷版（梵蔵併記版）；β = GNQ; δ = DT; Ed. = editio princeps of Dās & Vidyābhūṣaṇa; de Jong = J. W. de Jong (1979) など。β と δ を足せば全部の版になる。『中華大蔵経』丹殊爾に挙げられた蔵訳諸版の異読情報は不正確なので、元のそれぞれの版を調べ直した。Cone 版は Derge 版からの派生なので見なかった。また利用した梵文写本のうち A, B, E の写本については Straube (2006) に、Br1, Br2 の写本については Liu Zhen (2019) に詳しい情報がある。

1b paricitaṃ] A B Br2 E, comfirmed by Tib. yongs su 'dris pa'i: pavicitaṃ Br1(post corr. marg.): viracitaṃ Br1(ante corr.) || °bhāvāt tamaḥ] A B Br1 Br2 E: °bhāvottamaḥ Ed. Cf. de Jong.

1c °bhāvodbhavaḥ] A B Br1 E Ed.: °bhāvot_bhavaḥ Br2. **1d** °padaiḥ]] padeḥ Br1.

/ {D199a3,T505a5} au ci tyanti ka ro ti yaḥ su {T505b} mā nana sārdraṃ ma naḥ krū rā ṇā ma pi śīrya te pa (ra D: ri T) ci taṃ ya syā nu bhā bātta maḥ / e kaḥ ko pi sa jā ya te ji ta ja gannā tha (sa D: sra T) bhā bodbha baḥ pu ṇyaṃ ya pya na yā ti mā na ka la nāṃ niḥ saṃ khya pa deḥ /

その方は、よい心をもった者たちの心を、適切な対応（aucitya）により、歓びで柔らかいものにする（教えを受け入れやすくする）。またその方がもつ威力によって、残忍な者たちにおいても積重されたタマス（暗質）が消え去る。またその方の福徳は、無限の数字を用いても、量を測ることは出来ない。—— その［ような勝れた］お方は、調伏された生類の保護主（仏）の威力から出現した、或る一人の者として、［地上に］生まれてくる。

/ gang gis legs pa'i yid can rnams kyis yid ni kun dga' mnyen ldan *rigs par byed / / gang gi mthu yis gdug rnams kyi yang yongs su 'dris pa'i mun pa zhi bar byed /

/ gang gi bsod nams grangs med grangs kyi tshig *gis tshad kyi yul du mi 'gyur ba / / 'gro ba thul ba'i mgon po rab rgyas mthu ldan de nyid gcig pu 'byung ba yin /

1a mnyen] β T: mnyan D || *rigs] ex coni (cf. aucityena): rig δ β.

1b gang gi] δ : gang gis β || yongs su]] yongsu G.

1c gang gi] δ : gang gis β || tshig *gis] ex coni (cf. padaiḥ): tshig gi δ β.

1d thul ba'i] δ : thub pa'i β.

śrīmān purā sudhīrasya śrāvastyāṃ gṛhamedhinaḥ /
jāyāyām īpsitaḥ sūnuḥ sunetrāyām ajāyata // 84.2 //

2c īpsitaḥ] A B Br1 Br2 E, confirmed by Tib. ('dod pa'i): īkṣitaḥ Ed. Cf. de Jong.

/ śrī manpu ra su dhī ra sya śrā bastyāṃ gṛ ha me dha niḥ / jā yā yā missi taḥ sū nuḥ su ne trā yā ma jā yata /

かつてシュラーヴァスティー（舎衛城）において、スディーラという家住バラモンの妻スネートラーに、待ち望んでいた輝かしい息子が生まれた。

/ mnyan yod du sngon khyim na gnas / / dpal ldan shin tu brtan pa yi /
/ chung ma mig bzang ma dag la / / 'dod pa'i bu ni btsas par gyur / 2 /

2b yi] δ : yis β.

jātamātraḥ samudbhūte divyaratnavibhūṣite /
upaviṣṭaḥ svapuṇyāṅke yaḥ paryaṅke vyarājata // 84.3 //

3a samudbhūte] A B E Ed.: samut_bhūte Br1 Br2.

3d paryaṅke] Ed.: paryaṃke Br2: pravyāṃke Br1: paryeṅke A: paryyaṃke E ‖ vyarājata Br1 Br2: vyarejata A B E: vyarocata Ed.

/ jā ta mā traḥ sa {D199b} mudbhū te di bya ratna bi bhū ṣi te / u pa biṣṭaḥ sva pu ṇyāṃ ke bya rā ja ta // 84.3 /

その［息子］は、生まれるや否や、自分の福徳の徴として［自然に］出現した、神々しい宝石に装飾されている座布団の上に坐り、美しく輝いた。

/ skyes pa tsam na rab 'khrungs pa / / lha yi rin chen gyis brgyan pa'i /
/ khri stan rang gi bsod nams *kyi / / mtshan la gang zhig nyer 'khod mdzes /

3c *kyi] ex coni: kyis δ β.

tasya janmani ratnāni puṣpaiḥ saha payodharāḥ /
madhurasnigdhanirghoṣā vavṛṣur madhuvarṣiṇaḥ // 84.4 //

4b payodharāḥ] Br2 E Ed.: payodharā A B Br1.

/ ta sya janma ni ratna ni puṣpaiḥ sa ha sa yo dha rā / ma dhu rasniga nirgho ṣā ba bṛṣṭermma dhu birṣi ṇaḥ /

彼が生まれた時、雲たちが、甘美で (madhura) 心を魅する音を発しながら、花とともに宝石を雨降らし、蜜 (madhu) の雨を降らした。

/ de skyes tshe na chu 'dzin ni / / snyan zhing 'jam pa'i sgra dbyangs can /
/ sbrang rtsi 'bebs pas me tog dang / / bcas pa'i rin chen char pa phab /

4c pas] δ : pa'i β.

pūrṇaḥ kumāraḥ kauberaiḥ sa nidhānaśatair vṛtaḥ /
madhuvṛṣṭiprapatanān madhurasvara ity abhūt // 84.5 //

5c prapatanān] A E Ed.: prapatanāt_ Br1 Br2: prapatanā B.

/ purṇṇaḥ ku mā raḥ kau be raiḥ sa ni dhyā śā tai rbṛ dkṣiḥ / ma dhu bṛṣṭa pra pā ta nāta ma dhu ra sva ra itya bhūta /

その嬰児は、何一つ欠けることが無く、クベーラ神が有するような百の財宝に包まれていた。蜜（madhu）の雨が降ったことにちなみ、マドゥラスヴァラ（甘美な音）という［名前］にされた。

/ rdzogs pa'i gzhon nu lus ngan *gyi / / gter ni brgya yis bskor ba de /
/ sbrang rtsi'i char pa bab pa las / / sbrang rtsi'i dbyangs zhes bya bar gyur /

5a lus ngan] δ : gus can β ‖ *gyi] ex coni: gyis δ β.

5c bab] β : phab δ .

tenādaridratāṃ nīte bhuvane ratnavarṣiṇā /
śvetaḥ kāka iva kvāpi naivādṛśyata yācakaḥ // 84.6 //

6a °daridratāṃ] A B Br1 E Ed.: °dāridratāṃ Br2.

6c śvetaḥ kāka] A B Br1 Br2 E: śvetakāka Ed.

/ te nā da ri dra tāṃ nī te bhu ba ne ratna varṣi ṇā / śve taḥ kā ka iba kvā pi nai bā dṛ śya ta yā ca kaḥ /

宝石を雨降らせる彼によって、大地は無貧困の状態に導かれたので、あたかも［地上に］白いカラスがどこにもいないように、どこにも乞食は見られなかった。

/ rin chen char 'bebs de yis ni / / sa la dbul ba med nyid bsgrubs /
/ gang du'ang bya rog dkar po bzhin / / slong ba po ni mthong ma gyur /

6a yis ni] δ : yis na β (also possible). **6b** ba med] δ GQ: bar med N.

sa kadā cid gṛhāyātaṃ praśānteryāpathasthitam /
ānandaṃ bhikṣum ālokya papraccha pitaraṃ puraḥ // 84.7 //

7a cid gṛha°] A B E Ed.: cit_gṛha° Br1 Br2.

7b praśānteryā°] A Br2: praśāṃteryā° B Br1: praśāṃteryyā° E: praśānterṣā° Ed. Cf. de Jong. **7c** bhikṣum ālokya] A B Br1 E Ed.: bhikṣu{{ṇā}}m ālokya Br2.

/ sa ka dā cidgṛ hā yā taṃ pra śānteryā pa tha sthi tiṃ / ā nandaṃ bhikṣu ma lo ka pa praccha {T506a} pi ta raṃ pu raḥ /

彼はある時、［感官の］鎮まった威儀法（作法に則った威厳ある振舞）において住する比丘アーナンダが［彼の］家に来たのを見て、父に向かって尋ねた。

/ nam zhig dge slong kun dga' bo / / rab zhi 'phags pa'i lam gnas pa /
/ khyim du byon pa des mthong nas / / mdun du pha la rab dris pa /

7c des] β : de δ .

Note **7b** 'phags pa'i lam] この訳語は、īryāpatha を *āryāpathaと読んだのか。

tāta vrataviśeṣo 'sya ko 'yaṃ vaimalyaśālinaḥ /
yasya saṃdarśanenaiva manaḥ sadyaḥ prasīdati // 84.8 //

8b ko 'yaṃ] ≈ koyaṃ A Br1 Br2: kāyaṃ B: kārya E.

/ tā ta bra ta bi śe ṣo sya korbhaṃ bi ma lya śa li naḥ / ya sya sandarśa ne nai ba ma naḥ pa dyaḥ pra sā da ti /

「父様、かの［お姿を］見ただけで、すぐさま［私の］心は澄んだ喜びを得ますが、聖なる清らかさ（vaimalya）に溢れたこの方がおもちの、特別な禁戒とはいかなるものでしょうか。」

/ yab gcig dri med dge ba can / / 'di yi brtul zhugs *khyad ni ci /
/ gang zhig yang dag mthong nyid na / / 'phral la yid ni dang bar byed /

8a gcig] δ : cig β .　　**8b** *khyad] ex coni (cf. viśeṣa): 'di δ β .

putrasyeti vacaḥ śrutvā sudhīras tam abhāṣata /
putra sattvaprakāśo 'yaṃ śāntivrataparigrahaḥ // 84.9 //

9d śāntivratapa°] A B Br2 E Ed.: śāntivrataṃ pa° Br1.

/ pu tra sye ti ba caḥ śru tvā su dhī rasta ma bhā ṣata / {D200a} pu tra sa tva pra kā śo yaṃ śānti bra ta pa ri gra haḥ /

息子のその言葉を聞いて、［父］スディーラは彼に答えた。「息子よ、善性の輝きをもつこの方は、寂滅のための禁戒（出家戒）を堅持されているのです。

/ ces pa bu yi tshig thos nas / / shin tu brtan pas de la smras /
/ bu gcig snying stobs rab gsal 'di / / zhi ba'i brtul zhugs yongs su 'dzin /

9c gcig] δ : cig β .

yaḥ setuḥ saralaḥ samastajagatāṃ saṃsāraghorārṇave
krodhavyādhicikitsakaḥ śamasudhāsāreṇa tṛṣṇāpahaḥ /
doṣotsiktatamovirāmataraṇir buddhaḥ prabuddhadyutis
tasya śrāvaka eṣa śāntamanasām ānandanāmāgraṇīḥ // 84.10 //

10c prabuddha°] A B Br1 Br2 E Ed.: Tib. rab rgyas pa (=*pravṛddha°?). Cf. de Jong.

10cd dyutis tasya] A Br1 Br2 E: dyutiḥ tasya Ed.: dyutiḥ // tasya B.

/ yaḥ se tuḥ pa ra laḥ sa masta ja ga tāṃ saṃ sā ra gho rārṇṇa be kro dha bya dhi ci kitsa kaḥ śa ma su dhā sā re ṇa tṛṣṇa pa haḥ / do ṣotsikta ta mo bi rā ma ta ra ṇirbuddhaḥ pra buddha dyu tista sya śrā ba ka e ṣa śānta ma nā sā mā nanda nā mā gra ṇīḥ /

輪廻という恐ろしい川の激流における、あらゆる生類にとっての真っ直ぐな（正しい）橋である方、『瞋恚』という病を癒す医者として、『寂静』というスダー（不死の甘露）の精髄によって渇愛を除去する方、『罪悪』が満ち溢れた闇を終結させる太陽として、現れ出た輝きをもつ方である、ブッダがおられますが、その方の弟子（声聞）であり、寂止した心をもつ者たちの上首が、このアーナンダというお人なのです。」

Note **10c** prabuddha°] この箇所は *pravṛddha°と読む可能性も考えられ、その場合、pravṛddhadyutis を「強い輝きをもつ方」と訳せるだろうが、私は prabuddhadyutis「現れ出た輝きをもつ方」の読みをとる。pw, s.v. prabuddha に "erwacht, so v.a. entfaltet, zum Vorschein gekommen,

sich eingestellt habend" の意味がある。この語の前に buddhaḥ という語があるので、言葉遊びとして prabuddha という語を選んだのであろう。蔵訳 rab rgyas pa が *pravṛddha の読みに相当するとも思えるが（de Jong の意見）、ただし rab rgyas pa は prabuddha の訳語である可能性もある。Lokesh Chandra, *Tibetan-Sanskrit Dictionary, Supplementary Volume,* s.v. rab rgyas (pp. 1791-1792), s.v. rab rgyas pa (p. 1792) を引くと、Kalpalatā の作品中で rab rgyas (pa) が pravṛddha の訳語である事例が 3.20, 9.75, 13.60, 103.2 の 4 箇所あるが、しかし同じ rab rgyas (pa) が prabuddha の訳語である事例が 39.56, 40.30 の 2 箇所にあり、また prabodha の訳語である事例が 25.38 にある。つまり Kalpalatā の蔵訳において pravṛddha と prabuddha のどちらの語も rab rgyas pa と訳された事例が複数あることがわかる。Br1 Br2 の写本はここでは prabuddha になっているが、Br1 Br2 では bu と bṛ (= vṛ) の字の違いは微妙なので、蔵訳を作る際に Br1 Br2 の写本を見た訳者がそれを prabuddha と読んだのか、pravṛddha と読んだのかは確かではない。蔵字梵文音写では pra buddha と記される。

/ gang zhig 'jigs rung 'khor ba'i mtsho la mtha' dag 'gro ba'i zam stegs drang po dang / / khro ba'i nad kyis gso byed dag dang zhi ba'i bdud rtsi'i snying pos sred 'phrog dang /

/ skyon gyi tshogs kyi mun pa zhi byed nyi ma sangs rgyas 'od zer rab rgyas pa / / de yi nyan thos zhi ba'i yid can rnams kyi mchog gyur 'di ni kun dga' bo /

10a 'jigs rung] β : 'jigs rung om. δ || la] δ : las β .

10b dang] δ : kyang β || zhi ba'i] δ : zhi ba QNG.

abhidhānaṃ bhagavataḥ śrutvaiva madhurasvaraḥ /
babhūvodbhūtaromāñcaḥ prāgjanmakuśalodayāt // 84.11 //

11b śrutvaiva] E Ed.: śrutveva A B Br1 Br2.

11c babhūvodbhūta°] A B E Ed.: babhūvot_bhūta° Br1: babhūvot_bhūtaṃ Br2.

/ a bhi dhā naṃ bha ga ba taḥ śru tvai ba ma dhu ra sva raḥ / ba bhū boddhu ta ro māñca prāg-janmā ku śa lo da yāta /

「世尊」という言葉を聞いた途端、マドゥラスヴァラに前世の善［根］から生じた、体毛が逆立つこと（喜悦の戦慄）が起こった。

/ bcom ldan 'das kyi mngon brjod dag / / thos pa nyid na sbrang rtsi'i dbyangs / / sngar skye dge ba rgyas pa las / / ba spu rab tu langs par gyur /

11b nyid na] NQ: nyid ni δ : nyid G.

ānandam atha sānandaḥ praṇamya praṇayonmukhaḥ /
sa bhikṣusaṅghaiḥ sahitaṃ sarvabhogair apūjayat // 84.12 //

/ ā nanda ma tha sā nandaḥ pra ṇa mya pra ṇa yonmu khaḥ / sa bhikṣu saṃ ghaiḥ sa hi taṃ sarbba bho gai ra pū ja yata /

歓びをもって彼はアーナンダを拝し、交誼を願って、その彼を、比丘僧伽とともに、あらゆる食事によって供養した。

/ de nas kun dga' dang bcas des / / gus pas mngon phyogs phyag 'tshal te /
/ dge slong tshogs bcas kun dga' bo / / longs spyod kun gyis rab tu mchod /

autsukyāt saha tenaiva gatvā jetavanaṃ tataḥ /
dadarśa sa tviṣāṃ rāśiṃ bhagavantaṃ tathāgatam // 84.13 //

13c dadarśa sa tviṣāṃ] A B E Ed.: dadarśa tviṣāṃ Br1 Br2.

/ autsu kyātsa ha te nai ba ga tvā je ta ba nanta taḥ / da darśa tvi ṣāṃ rā śiṃ bha ga bantaṃ ta thā ga ta /

その後、彼は熱心さから、かの者（アーナンダ）と共にジェータヴァナに行き、光輝の塊である世尊・如来を見た。

/ de nas 'dun pas de nyid dang / / lhan cig rgyal byed tshal song nas /
/ 'od zer phung po bcom ldan 'das / / de bzhin gshegs pa mthong gyur te /

13b song] β T: sang D.

phullapadmapalāśākṣaṃ divyalakṣaṇalakṣitam /
lāvaṇyalalitākāraṃ hematālam ivonnatam // 84.14 //

14a °palāśākṣaṃ] A B E Ed.: °palāśāṃkaṃ Br1 Br2.

/ phulla padma pa lā {D200b} śāṃ de byā lakṣa {T506b} ṇa lakṣi taṃ / lā ba ṇya la li tā kā raṃ he ma tā la mi banna taṃ /

開花した蓮の花弁のような目をお持ちの方を、神々しい相好によって特徴づけられている、まるで黄金のターラ樹であるかのように背が高く、美しさで心を魅する容姿の方を。

/ padma 'dab ma rgyas pa'i spyan / / mchog gi mtshan nyid dag gis mtshan /
/ mdzes shing yid 'ong rnam pa can / / gser gyi ta la bzhin du mtho /

limpantam amṛteneva taṃ dṛṣṭvā harṣanirbharaḥ /
mālām ivādade mūrdhni sa tatpādanakhadyutim // 84.15 //

15c ivādade] A Br1 Br2 Ed.: ivādadhe B: ivādṛdhe E.

/ limpanta ma mṛ ta ne ba taṃ dṛṣṭā harṣa nirbha raḥ / mā lā mi bā da de mū (rdhī D: rddhī T) pa tatpī da na kha dyu tiṃ /

まるでアムリタ（不死の甘露）を［人々に］塗布しておられるかのようなその方（仏）を見て、彼は歓喜に満ちて、その方の足指の輝きを、まるで花環を［頭頂に］受けるように、［跪いて］頭頂で受けた。

/ bdud rtsis byugs pa lta bu ste / / mthong nas dga' ba rab rgyas pa /
/ de yi spyi bor 'phreng ba bzhin / / de yi zhabs sen 'od zer blangs /

15c 'phreng] δ : phreng β .

praṇayārthanayā tasya prītyai praṇayivatsalaḥ /
gatvā cakāra bhagavān gṛhe bhogaparigraham // 84.16 //

16b praṇayiva°] A Br1 Br2 Ed.: praṇayava° B E.

/ pra ṇa yārtha na yā ta sya prī tyai pra ṇā yi batsa laḥ / ga tvā ca kā ra bha ga bān_ gṛ he bho ge pra ti gra haṃ /

［仏との］親交を彼は願ったので、親交する者にやさしい方である世尊は、彼を歓ばせるため、家に来て、食事を受けられた。

/ 'bad pas gsol ba btab pa yis / / gus pa mnyes gshin bcom ldan 'das /
/ dge slad de yi khang par byon / / mchod ston rab tu bzhes pa mdzad /

16b gus pa] β : gus la δ .

16c dge slad] GQ: de slad δ (also possible): dge slong N.

abhyarcite bhagavati prayāte jetakānanam /
janatāṃ ratnasaṃpūrṇāṃ cakāra madhurasvaraḥ // 84.17 //

17b jeta°] A B Br1 E Ed.: jaita° Br2.

/ a bhyacci te bha ga ba ti pra yā te je ta kā na naṃ / ja na tāṃ ratna saṃ (pūrṇā D: pūrṇāṃ T) ca kā ra ma dhu ra sva ra /

世尊が供養され、ジェータ林に去ると、マドゥラスヴァラは世の人々を宝石で満たした。

/ bcom ldan 'das ni mngon mchod nas / / rgyal byed tshal du gshegs pa'i tshe /
/ skye bo'i tshogs ni rin chen gyis / / sbrang rtsi'i dbyangs kyis yongs rdzogs byas /

nijair apuṇyair niḥsvānāṃ ratnarāśir gṛhe gṛhe /
tadvitīrṇaḥ kṣaṇenaiva jagāmāṅgārarāśitām // 84.18 //

18a nijair apuṇyair] A B Br1 E Ed.: nijaiḥ puṇyair Br2 || niḥsvānāṃ] E: nisvānāṃ A B Br1 Br2 Ed. **18c** tadvitīrṇaḥ] B E Ed.: tadvitīrṇṇaḥ A Br1: tat_vitīrṇṇaḥ Br2.

/ ni je pu ṇyairna svā nā ratna rā śirgṛ ho gṛ he / tadbi tirṇṇaḥ kṣa ṇe nai ba ja gā māṃ gā ra rā śi tāṃ /

貧しい人々の家々において［彼が布施した］宝石の山は、［彼ら］自身の非福徳のせいで、彼らに与えられた途端に、石炭の山になった。

/ dbul po rnams kyi khyim khyim du / / rang gi bsod nams ma yin pas /
/ rin chen phung po des byin pa / / skad cig nyid kyis sol phung gyur /

18a kyi] δ : kyis β .　　**18c** des] δ : de β .

tadvṛttāntam athākarṇya duḥkhito madhurasvaraḥ /
tān uvāca purā naiva bhavadbhiḥ sukṛtaṃ kṛtam // 84.19 //

19a tadvṛttān°] A B Br2 E Ed.: tat_vṛttān° Br1.

19c tān uvāca] A B Br1 Br2 E: tām uvāca Ed. Cf. de Jong.

/ tadbṛttāṃ ta ma thā karṇṇya (duḥkha D: duḥkhi T) to ma dhu ra sva raḥ / tā nu ba ca pu rā nai ba bha badbhiḥ su kṛ taṃ kṛ taṃ /

その出来事を聞いて、マドゥラスヴァラは苦悩し、彼らに語った。「あなた方は前世に善行をなさなかったのです。

/ de nas byung tshul de thos nas / / sbrang rtsi'i dbyangs ni sdug bsngal zhing /
/ de dag la smras khyod kyis sngon / / legs byas dag ni yongs ma byas /

19c khyod] δ : khyed β .　　**19d** yongs] δ G: yong NQ.

adattvā dayayā dānam akṛtvā saṃghapūjanam /
bhagavantam anabhyarcya na labhyante vibhūtayaḥ // 84.20 //

20b °pūjanam] A B Br1 Br2 E: °bhojanam Ed. Cf. de Jong.

/ a da tvā da ya yā dā na {201a} ma kṛ tvā saṃ gha pū ja naṃ / bha ga banta ma na bhya ccya na la bhyante bi bhu ta yaḥ /

憐れみをもって［他の者に］布施をせず、僧伽への供養をなさず、世尊を恭敬供養しなければ、富は得られません。

/ brtse bas sbyin pa ma byin zhing / / dge 'dun mchod pa ma byas la /
/ bcom ldan mngon par ma mchod pas / / 'byor pa dag ni thob ma yin /

20d pa dag ni thob] β : pa 'di dag thob δ .

sugatapramukhaḥ saṃghas tasmād yuṣmābhir arcyatām /
sarvopabhogasāmagrīm ahaṃ saṃpādayāmi vaḥ // 84.21 //

21b °bhir arcyatām] B Br1 E Ed.: °bhir arccyatāṃ A: °bhir abhyarcyatāṃ Br2.

/ su ga ta pra mu khaḥ saṃ ghasta smādyuṣmā bha ra cya tāṃ / sarbbo pa bho ga sā ma grī ma haṃ saṃ pā {T507a} da yā mi baḥ /

それゆえ、あなた方は善逝を上首とする僧伽に供養しなさい。私があなた方にあらゆる享受物（食糧や衣など）の全部を与えましょう。

/ de slad khyod kyis bde gshegs la / / sogs pa'i dge 'dun mngon par mchod /

/ khyod la longs spyod dag gi tshogs / / thams cad bdag gis phun tshogs bgyi /

21a khyod] δ : khyed β . **21c** khyod la] δ : khyed la β .

iti te preritās tena saṃbhārais tadupākṛtaiḥ /

sasaṃgham aṃhasaḥ śāntyai bhagavantam apūjayan // 84.22 //

22a te preritās] A B Br1 Br2 E: te preṣitās Ed. Cf. de Jong.

22b °upākṛtaiḥ] Br1 Br2: °upāhṛtaiḥ A B E Ed. (also possible).

22d apūjayan] A(post corr.): apūjayat A(ante corr.) B Br1 Br2 E Ed. Cf. de Jong.

/ i ti te pre ri tāste na saṃ bhā rai ta du pā kṛ taiḥ / sa saṃ gha ma hā saḥ śāntyai bha ga banta ma pū ja yata /

このように彼に励まされて、彼らは彼に与えられた資糧をもって、罪を滅除するために、世尊と僧伽に供養した。

/ zhes pa des bskul de dag gis / / de yi nyer bsgrubs tshogs rnams kyis /

/ bcom ldan dge 'dun dang bcas pa / / sdig pa zhi ba'i slad du mchod /

22b de yi] δ : de yis β .

tatas te kṛtakalyāṇās tatkṣaṇakṣīṇakalmaṣāḥ /

dadṛśuḥ svagṛhaṃ dīptaiḥ saṃpūrṇaṃ ratnarāśibhiḥ // 84.23 //

/ ta ta ste kṛ ta ka lyā ṇāṃ stadkṣa ṇakṣī ṇa katsa ṣāḥ / da dṛ śuḥ sva gṛ haṃ dī praiḥ sa pūrṇṇaṃ ratna rā śi bhiḥ /

すると善行をなした彼らはその瞬間に罪が消え、自分の家が輝く宝石の山に満ち溢れているのを見た。

/ de nas de tshe dge ba byas / / sdig pa zad pa de dag gis /

/ rang khyim rab 'bar rin chen gyi / / phung pos kun tu gang ba mthong /

tataḥ pravṛddhavairāgyaḥ praśāntyai madhurasvaraḥ /

pravrajyām ādade dhīmān gatvā bhagavato 'ntikam // 84.24 //

24a pravṛddha°] A B E Ed.: prabuddha° Br1 Br2, confirmed by Tib. (sad pa). Cf. de Jong. **24c** ādade] A Br1 Br2 Ed.: ādadhe B E.

/ ta taḥ pra buddha bai rā gyaḥ pra śāntyai ma dhu ra sva raḥ / pra bra jyā mā da de dhi māna ga tvā bha ga ba tonti kaṃ /

その後、強い離欲の思いをもつ聡明なマドゥラスヴァラは、寂滅のために世尊のもとに行き、出家戒を受けた。

Note **24a** pravṛddha°] ネパール系の写本 pravṛddha の読みを支持する。ここでもし pravṛddha ではなくデープン寺写本の prabuddha の読みを選択するなら、その場合は「マドゥラスヴァラは［世間への］嫌悪に目覚め（prabuddha）」と訳すことができる。蔵訳 sad pa yi はデープン寺写本の読み prabuddha を支持する。

/ de nas chags bral sad pa yi / / blo dang ldan pa sbrang rtsi'i dbyangs /
/ bcom ldan 'das kyi drung song nas / / rab tu zhi slad rab byung blangs /

sa śāstuḥ śāsanāt tyaktvā śrāvastīṃ niyatavrataḥ /
jagāma janaparyantavihāraṃ karvaṭāśrayam // 84.25 //

25c °paryanta] A Br1 Br2: °paryantaṃ B Ed.: °paryyaṃtaṃ E.

/ sa śāstuḥ śā sā nāttyaktvā śra bastīṃ ni ya ta bra taḥ / ja gā ma ja na paryanta bi hā raṃ kārbba ṭa śra tā śra yaṃ /

師の教令により、常に誓戒を守る彼は、シュラーヴァスティーを去って、人々［の住地］のはずれである、山地にある寺に行った。

/ ston pa'i bka' yis dul ba yi / / brtul zhugs can gyis mnyan yod btang /
/ skye bo'i mtha' yi gtsug lag khang / / ri brag dag la brten par song /

25a ba yi] δ : ba yis β .

dattaśikṣāpadas tena tatra kārvaṭiko janaḥ /
ratnatrayaṃ kleśaviṣapraśāntyai śaraṇaṃ yayau // 84.26 //

/ datta śikṣa pa {D201b} (daste D: dasta T) na ta tra kārbba ṭi ko ja naḥ / ratna tra yaṃ kle śa bi ṣa pra śāntyai śa ra ṇaṃ ya yau /

其処で彼に学処（学戒）を与えられて、山の住民たちは、煩悩という毒を滅除するため、三宝に帰依した。

/ der des bslab pa'i gnas byin pa / / ri brag pa yi skye bo rnams /
/ nyon mongs dug ni rab zhi'i slad / / dkon mchog gsum la skyabs su song /

asminn avasare caurāḥ kānanāntanivāsinaḥ /
uktaṃ durgopahārāya naram anveṣṭum udyayuḥ // 84.27 //

27b kānanānta] Br1 Br2 Ed.: kānanānte A: kānanāṃte B E.

27d udyayuḥ] A B Br1 Br2 E: āyayuḥ Ed. Cf. de Jong.

/ asminna ba sa re cau raḥ kā na nāṃ taḥ ni bā si naḥ / uktaṃ durgo pa hā ya na ra (mapdeṣṭu D: mapdaṣṭu T) mu dya yuḥ /

その時、森の奥に住む盗賊たちが、女神ドゥルガーへの献げものとして、命じられた一人の人間を探しに来た。

Note **27c** uktaṃ] ここは *yuktaṃ と読むことも考えられるが、写本どおりに uktaṃ と読む。

/ gnas skabs der ni chom rkun pa / / nags kyi mtha' na gnas pa rnams /
/ dur ga'i ya stags khas blangs pa'i / / mi ni tshol ba dag la zhugs /

te taṃ vihāram āsādya piśunena pradarśitam /
babandhur bhikṣusaṃghātaṃ gaṇḍīśabdasamāgatam // 84.28 //

28a te taṃ] A Br1 Br2 Ed.: te te B E.

28c saṃghātaṃ] A B Br2 E: saṃghāta Br1.

/ te taṃ bi hā ra mā sa dya pi śu ne na pra darśi taṃ / ba bandhu rbhikṣu saṃ ghā taṃ gaṇḍī śabda sa mā ga taṃ /

彼らは密告者に教示されたその寺に到着すると、ガンディーの音［を聞いて］集まり来た比丘たちの群を捕縛した。

/ phra ma can gyis rab bstan pa'i / / gtsug lag khang der de dag 'ongs /
/ gaṇḍī'i sgra la 'dus pa yi / / dge slong dge 'dun tshogs rnams bcings /

28c gaṇḍī'i] δ : sbrang rtsi'i β .

eka evopahārāya bhikṣur asmākam īpsitaḥ /
ity ukte cauracakreṇa jagadur bhikṣavaḥ kramāt // 84.29 //

29c cauracakreṇa] Br1 Br2: coracakreṇa A B E Ed.

/ (e D: a T) ke e bo pa hā {T507b} rā ya bhikṣu rasmā ka mipsi taḥ / i (tyukta D: tyukte T) cau ra cakre ṇa ja ga durbhikṣa baḥ kra māt_ /

「比丘を一人、われわれの御供（生け贄）として欲しい。」このように盗賊団に告げられると、比丘たちは口々に語った。

/ ya stags slad du dge slong ni / / gcig nyid kho na bdag cag 'dod /
/ chom rkun tshogs kyis 'di brjod tshe / / dge slong rnams kyis rim pas smras /

29c brjod] β T: brjed D.

māṃ ādāyopahārārthaṃ mucyantāṃ sarvabhikṣavaḥ /
ukte vṛddhaiḥ krameṇeti provāca madhurasvaraḥ // 84.30 //

30b mucyantāṃ sa°] Br2 Ed.: mucyaṃtāṃ sa° A E: mucyatāṃ sa° B: mucyatāṃ tāṃ sa° Br1.

/ ma mā dā yo ma hā rā rthaṃ mu cya tāṃ sarbba bhikṣa baḥ / ukte bṛddheḥ kra me ṇe ti pro bā ca ma dhu ra sva raḥ /

「私を御供のために受け取って、［他の］すべての比丘を解放せよ。」老いた者たちが口々にそう言うと、マドゥラスヴァラは語った。

/ ya stags don du bdag zung la / / dge slong thams cad gtang bar mdzod /
/ ces pa rgan rim gyis brjod tshe / / sbrang rtsi'i dbyangs kyis rab smras pa /

30b gtang] β : btang δ . **30c** tshe] β : cing δ (also possible).

aham evopahārārhaḥ saṃghaḥ sarvo vimucyatām /
ity ākarṇya varākāraṃ te samādāya taṃ yayuḥ // 84.31 //

/ a ha me bo pa hā rarhaḥ saṃ ghaḥ sarbba (bi D: ba T) mu cya tāṃ / i tya karṇṇya ba rā kā ba rāṃ te sa mā dā ma taṃ yaḥ /

「私こそが御供にふさわしい。すべての僧を解放しなさい。」それを聞くと、彼らはすぐれた外見をした彼を捉えて、去った。

/ nga nyid kho na ya stags don / / dge 'dun thams cad rnam par thong /
/ zhes pa thos nas de dag gis / / rnam pa mchog ldan de bzung song /

31d rnam pa] δ : rnam par β .

baddhaḥ sa vadhasaṃnaddhair nītas tair nirvikāradhīḥ /
durgāyatanam atyugraṃ dadarśa gahanodare // 84.32 //

/ baddhaḥ ma ma {D202a} ba dha sannaddhai nī tastairnirbi kā ra dhīḥ / durgā ya ta na ma tyu graṃ (da D: nga T) darśa ga ha no da re /

殺すつもりの彼らに縛られて、連れられて行きながら、考えに変化がない（後悔のない）彼は、密林の奥で、とても恐ろしいドゥルガーの聖所を見た。

/ gsod par chas pa de dag gis / / bcings khyer rnam 'gyur blo med des /
/ du rga'i gnas ni nags nang du / / shin tu 'jigs su rung ba mthong /

32c du] δ GQ: dur N.

balisajjīkṛtaiḥ sthūlaśakalair māhiṣaiś ca tat /
kalpāntameghaiḥ śāśvatopahārair iva pūjitam // 84.33 //

33cd śāśvato°] A, confirmed by Tib. (rtag tu): sasvato° Br1 Br2: śvasrato° E: śvasratau° B: svasuto° Ed. Cf. de Jong.

/ ba li saktī kṛ teḥ sthu la śa ka lairmā hi ṣaiśca tata / kalpānta me ghaiḥ samba to pa hā rai ri ba pū ji taṃ /

まるで永遠なる者への捧げ物として劫末［に生じる巨大な］雲のような、供物として用意された水牛の［体の］巨大な断片（肉片）によって、供養されているその［聖所］—

Note 33c kalpāntameghaiḥ] 世界終末時の雲については、仏典ではなくプラーナ文献に記述がある。Viṣṇupurāṇa 6章3節、定方晟(2011)：『インド宇宙論大全』、春秋社、120頁を参照。

/ de yang dus mtha'i sprin gyis bzhin / / gtor ma la ni bstar byas pa'i /
/ ma he sre bo rags pa yi / / rtag tu ya stags dag gis gang /

Note 33c sre bo] この sre bo の訳語は de Jong が指摘するように śakalair を *śabalair と誤って訳したものであろう。

vyāptaṃ pādaśilāsaktarururaktacchaṭāśataiḥ /
sragdāmabhir bhaṭotsṛṣṭair bandhujīvamayair iva // 84.34 //

/ byāptaṃ pā da śi lā sakta ru ru raktaccha ṭā śa taiḥ / sugdā ma bhirbha (ṭitpraṣṭa D: ṭatpṛṣṭa T) bandhu jī ba ma yai riba /

まるで兵士たちの捧げたバンドゥジーヴァ（午時花）［の真紅の花］から出来た花環にいちめん覆われているかのような、敷石に付着した鹿たちの数百の血の塊にいちめん覆われている［その聖所］—

Note 34] この詩句について、Raghuvaṃśa XI, 25, vīkṣya vedim atha raktabindubhir bandhujīvapṛthubhiḥ pradūṣitām「かくて、バンドゥジーヴァの花の大きさほどのしずくでけがされし祭壇を見て」（木村秀雄『季節集・雲の使者』189頁の訳）の文を参照。

/ dpa' bos ban du dzi ba yi / / rang bzhin me tog 'phreng spos bzhin /
/ ru ru'i khrag gi zer ma brgya / / zhabs kyi rdo la chags pas khyab /

34b 'phreng] δ : phreng β (alternative).

ghaṇṭāgrollambibhir vīraśirobhiḥ parivāritam /
kṛtadvārārcanaṃ phullakamalair iva mṛtyunā // 84.35 //

35a °grollambibhir] Br1 Br2: °grālambibhir] A B E Ed.: °grālaṃbibhir B E.

/ ghaṇṭā śollambi bhirbbī ra śi ro bhiḥ pa ri bā ri taṃ / kṛ ta dvā rāccha naṃ phulla ka ma lai ri ba mṛ tyu nā /

まるで開花した［赤い］蓮華によって死神が門のところで礼拝供養をなしたかのように、鐘（ガンター）の先端にぶら下げられた勇士たちの生首によって囲まれている［その聖所］—

/ gshin rjes me tog rgyas pa yis / / sgo la mchod pa byas pa bzhin /
/ dril bu'i sngon du 'phyang ba yi / / dpa' bo'i mgo yis yongs su bskor /

35a pa yis] β : pa yi δ .　　**35d** bo'i] δ : bo β .

pratyagranararaktāktaiḥ sopānair aruṇaprabham /
śabarīcaraṇanyāsasaṃsaktālaktakair iva // 84.36 //

/ pra tya gra na ra raktā raktaiḥ so pā nai ra ru ṇa pra bhaṃ / śa ba rī ca ra ṇa nyā sa saṃ saktā {T508a} lakta kai ri ba /

まるでシャバラ族の女の足が踏んだことでマニキュアが付着した［階段］のように、新鮮な人間の血に染まった階段によって赤く輝いている［その聖所］—

/ ri khrod ma yi rkang bkod pas / / sen rtsi rab tu chags pa bzhin /
/ mi khrag gsar pas bsgos pa yi / / skas dag gis ni dmar ba'i 'od /

36d skas] β : bkas δ .

asaṃprāptopahārābhiḥ kirātastrībhir ādarāt /
svaśiśūtkṛttahṛtpadmakīrṇaprāṅgaṇavedikam // 84.37 //

37c °śūtkṛttahṛt°] A B Br1 E Ed.: °śūtkṛttakṛt° Br2.

/ a saṃ prāpto pa hā rā bhiḥ ki rā ta strī bhi rā da rāta / sva śi śutkṛtta hṛtpadma kīrṇṇa praṃ ga ṇa be di kaṃ /

捧げ物が［他に］得られなかったキラータ族の女たちによって、恭しく自分の子から切り取られた心臓という［紅い］蓮に満たされた中庭の祭壇をもつ［その聖所］—

/ ya stags ma thob rngon pa yi / / bud med rnams kyis gus pa yis /
/ rang gi bu bcad snying gi ni / / padmas khyams kyi kha khyer bkang /

taṃ dṛṣṭvā prāṇisaṃghātaṃ vaiśasāyāsaduḥsaham /
udvegasāraṃ saṃsāraṃ pradadhyau madhurasvaraḥ // 84.38 //

38a taṃ dṛṣṭvā] A B Br1 Br2 E: sa dṛṣṭvā Ed. Cf. de Jong.

38b vaiśasā°] Br1 Br2 Ed.: vaiśaśā° A B E.

/ taṃ dṛṣṭvā prā ṇi saṃ ghā taṃ {D202b} bai śa sā ya sa duḥsa haṃ / udbe ga sā raṃ saṃ sā ra pra da dhyau ma dhu ra sva raḥ /

その［聖所］を見てマドゥラスヴァラは、生き物たちの殺し合いがある、暴力と悩苦とが耐え難い、戦慄を本質とする輪廻［の世界］を、沈思した。

/ de mthong srog chags rnams kyi tshogs / / sdug bsngal ngal dub bzod dka' zhing /
/ 'khor ba chags bral snying po can / / sbrang rtsi'i dbyangs kyis rab tu bsams /

tataḥ sākṣātkṛtārhattvaḥ sarvakleśaparikṣayāt /
*traidhātuke vītarāgaḥ so 'bhūt tulyapriyāpriyaḥ // 84.39 //

39a °ārhattvaḥ] E Ed.: °ārhatvaḥ A B Br1 Br2.

39c *traidhātuke] ex coni (cf. Tib. khams gsum pa las): traidhātuko A B Br1 Br2 E Ed. Cf. de Jong.

/ ta taḥ sā kṣatkṛ tārha tvaḥ sarbba kle śa pa ri kṣa yāta / trai dhā tu ko bī ta rā gaḥ sau bhūttu lya pri yā pri yaḥ /

するとあらゆる煩悩が滅して、阿羅漢たる境地（阿羅漢性）を作証した彼は、三界から離欲して、身内も敵も平等に見る者となった。

Note **39c** *traidhātuke] ここで de Jong は traidhātuko を *traidhātuke と修正することを提案する。Kalpalatā の別の箇所 19.122a でも Das 本の traidhātuko の言葉を de Jong (1996) は *traidhātuke と修正する。なお 19.122a を Br1 写本 (74a6) で確認すると、Das 本と同じ様にその箇所は traidhātuko と記してある。蔵字音写を見てもその 19.122a の箇所は trai dhā tu ko になっている。

/ de nas nyon mongs thams cad ni / / yongs zad dgra bcom mngon du byas /
/ khams gsum pa las chags bral de / / dga' dang mi dga' mtshungs par gyur /

so 'cintayad aho śāstuḥ prabhāvo 'yaṃ bhavacchidaḥ /
prāpto 'haṃ yatprasādena niḥsaṃsārasukhāṃ bhuvam // 84.40 //

40c prāpto 'haṃ] A B Br1 Br2 E: prāpto 'yaṃ Ed. Cf. de Jong.

/ so cinta ya da ho śāstuḥ pra bha bo yaṃ bha bacchi daḥ / prāpto haṃ yatpra pa de na niḥ sa sā ra su khāṃ bhu baṃ /

彼は思った。「ああ、これが師（仏）がお持ちの、生存を断つ力だ。かのお方の恩恵により、私は無輪廻の安楽がある境地を得た。

/ des bsams gang gi drin gyis ni / / 'khor ba med pa bde ba'i sa /
/ kye ma bdag gis thob pa 'di / / ston pa srid pa gcod pa'i mthu /

40a des] β : de δ .

mohaś chinno niviḍanigaḍaḥ khaṇḍitā dṛṣṭiśailās
tīrṇā tṛṣṇā viṣamataṭinī proddhṛtā janmavṛkṣāḥ /
prāptaṃ dhāma vyasanaśamanaṃ tat prasādena śāstur
yasmin bāṣpaṃ dadhati na punaḥ śocanālocanāni // 84.41 //

41a °śailās] A B Br1 Br2 E: °śailāḥ Ed.

41b viṣamataṭinī] A B Br1 Br2 E: viṣayataṭinī Ed. Cf. de Jong.

41c śāstur] A Br1 E: śāstuḥ Br2 Ed.: śāstu B.

/ mo haścinno ni ba ḍi ni ga taḥ khaṇḍi tā dṛṣṭa śe lastīkṣṇa tṛṣṇā bi ṣa mata ṭi nī proddhṛ tā janma bṛkṣāḥ / prapta tvā ma bya sa na śa ma naṃ tatpra sā de na śāsturya sminbāṣsaṃ da dha ti na pu naḥ śo ca nā lo ca nā ni /

『痴愚』という堅固な足枷は切られた。『見解』の山岳は砕けた。『渇愛』という危険な川は渡られた。『［再］生』の樹々は引き抜かれた。師の恩恵により、悩苦の寂止であるかの境地が得られた。悲しみに眼が涙を湛えることはもう二度とない。」

/ rmongs pa'i lcags sgrog brtan pa gcod cing lta ba'i ri bo nyams par byed / / mi bzad sred pa'i chu bo sgrol zhing skye ba'i ljon pa rab tu 'byin /

/ gang du mya ngan mig la slar yang mchi ma dag ni mi 'dzin pa / / ston pa'i drin gyis gdung ba zhi bar gyur pa'i gnas de rab tu thob /

41a brtan] δ : bstan β ‖ ri bo] β : ri mo δ .

41d de rab] β : der rab δ .

iti dhyātvā sa sattvābdhis tasthau śaila ivācalaḥ /
nibaddhavadhyamālāṅkaś cauraiḥ krodhodyatāyudhaiḥ // 84.42 //

/ i ti dhyā tvā sa sa tvāddhistasthau śai la i bā ca la / ni baddha ba dha mā lāṃ ka ścau reḥ kro dho dya tā yu dhaiḥ / {D203a,T508b} /

このように沈思しながら、善性の海である彼は、怒って振り上げた刀をもつ盗賊たちによって、殺されるべき者の徴である花環を［首に］巻かれても、まるで岩山のように不動のままでいた。

/ ces bsams snying stobs rgya mtsho de / / ri bzhin g.yo ba med par gnas /

/ khro bas mtshon blangs chom rkun gyis / / gsod rtags me tog 'phreng ba bcings /

42a de] δ : des β .　　**42c** blangs] δ : blang β .

42d 'phreng] δ : phreng β .

tais tasyāpahṛte vastre gātrāt kāñcanavarcasaḥ /
anyad anyad abhūd vāsas taiś ca rāśiḥ puro 'bhavat // 84.43 //

43a tais] A B E Ed.: te Br1 Br2 ‖ tasyāpa° A B E Ed.: tasyopa° Br1 Br2.

43b °varcasaḥ] ≈ °varccasaḥ Br1 Br2.: [vo]ccisaḥ A: rociṣaḥ B E Ed.

/ te ta sya pa hṛ te bastre gā trātkā ñca na bacca saḥ / a nya da nya bhudbā sa taiśca rā śiḥ pu ro bha bata /

彼らが彼の黄金の輝きをもつ体から衣が剥ぎ取った時、次から次へと衣が生じ、それらによって、目の前に［衣の］山が出来た。

/ de lus gser gyi gzi ldan las / / de dag rnams kyis gos dag bshus /

/ gos ni gzhan dang gzhan byung ba / / de dag mdun du phung por gyur /

43b kyis] β : kyi δ ‖ bshus] β : shus δ .　　**43c** gzhan] δ GQ: bzhan N.

atrāntare samudbhūtair bhūtānāṃ pañcabhiḥ śataiḥ /
sā devī niścalaṃ cakre taccauraśatapañcakam // 84.44 //

44a samudbhūtair] A B E Ed.: samut_bhūtair Br1 Br2.

/ a trāṃ ta re sa mudbhū tairbhū tā nāṃ pañca bhiḥ śa taiḥ / pā de bī niśca laṃ cakre taccau raṃ śa ta pañca kaṃ /

その最中に、かの女神がその五百の盗賊たちを、出現した五百のブータ（化物）たちによって動けなくした。

/ skabs der lha mo de yis ni / / rab bskyed 'byung po lnga brgya yis /
/ chom rkun dag ni lnga brgya po / / rab tu g.yo ba med par byas /

cyute tadāyudhacaye puṣpavṛṣṭir nabhastalāt /
papāta ratnarucirā madhurasvaramūrdhani // 84.45 //

45c mūrdhani] B Br1 Br2(post corr.) E Ed.: mūrdhini A Br2(ante corr.).

/ cyu te ta dā yu dha ca ye puṣpa bṛṣṭirna bhastalāta / pa pā ta ratna ru ci ra ma dhu ra sva ra (mūrdha D: mūrddha T) ni /

彼らの夥しい武器は地に落ちて、宝石によって輝く花の雨が、虚空からマドゥラスヴァラの頭上に降った。

/ de dag mtshon gyi tshogs lhung tshe / / sbrang rtsi'i dbyangs kyi spyi bor ni /
/ mkha' las me tog dag gi char / / rin chen rab tu mdzes pa bab /

gāhamānam atha vyoma taṃ vilokyaiva dasyavaḥ /
spṛṣṭās tasyānubhāvena tam eva śaraṇaṃ yayuḥ // 84.46 //

46b vilokyaiva] Br1 Br2 B E: vilokyeva A: vilokya ca Ed. Cf. de Jong.

/ gā ha mā na ma tha byo ma taṃ bi lo kyai ba da sya baḥ / spṛṣṭāsta syā nu bha be na ta me ba śa ra ṇaṃ ya yuḥ /

空中に飛び上がった彼を見て、彼の威神力に戦慄した盗賊たちは、彼に帰依した。

/ de nas mkha' la 'gro ba de / / chom rkun rnams kyis mthong gyur nas /
/ de yi mthu yis reg pa yis / / de nyid la ni skyabs su song /

46c yis] β : yi δ . **46d** skyabs su] δ : skabs su NQ: skyabsu G.

so 'vatīrya tataḥ kṣāntyai caraṇanyastamastakān /
dharme ramadhvaṃ saṃtyajya duṣkṛtānīty uvāca tān // 84.47 //

47a kṣāntyai] Br1: kṣāṃtyai Br2: [śā]ntyai A: sāṃtyai B E: śāntyai Ed.

47d duṣkṛtā°] Ed.: duḥkṛtā° A B Br1 Br2 E.

/ (sva D: so T) ba tīrya ta taḥ kṣāntyai ca ra ṇa nyasta masta kāna / dharmme ra sa dhvaṃ saṃ tya jya duḥ kṛ tā nī tyā bā ca tān_ /

彼はその［空］から降りてくると、恕し（堪忍）［を請う］ため［彼の］み足に頭をつけた彼らに対して、「悪行を捨てて、法を楽しみなさい」と語った。

/ de nas bab ste bzod pa'i slad / / rkang par mgo bkod de dag la /
/ nyes byas thong la chos kyis ni / / dga' bar mdzod cig de yis smras /

47a bab ste] δ : babs te β (also possible).

47b par] δ : pas β . **47d** bar] δ : bas β || cig] δ : ces β .

atas te jātavairāgyāḥ pravrajyāṃ vṛjinojjhitāḥ /
ādāyārhatpadaṃ prāpuḥ saṃsārāsravaśāntaye // 84.48 //

48a atas te] Br1 Br2: atra te A B E Ed.

48d °āsrava°] corr.: °āśrava° A B Br1 Br2 E Ed.

/ a taste jā ta bai rā gyāḥ pra bra jyāṃ bṛ ji nojjhi tāḥ / ā dā yārhatpa daṃ prā yuḥ saṃ pā rā śra ba śānta ye /

その後、離貪を生じた彼らは、罪を捨てて、輪廻の漏を止滅するため、［師から］出家［戒］を授かって、阿羅漢の位に達した。

/ de nas de dag chags bral skyes / / sdig pa btang nas 'khor ba yi /
/ 'ching ba zhi slad rab byung ni / / blangs nas dgra bcom gnas thob gyur /

tatas taiḥ sahito 'rhadbhis taiś ca karvaṭavāsibhiḥ /
yayau jetavanaṃ draṣṭuṃ śāstāraṃ madhurasvaraḥ // 84.49 //

49ab °dbhis taiś] A B Br1 E Ed.: °dbhi taiś Br2.

/ ta tastaiḥ sa hi to 'rharbbhistaiśca karbba ṭa bā si bhiḥ / {D203b} ya yau je ta ba naṃ draṣṭuṃ śāsta ra ma dhu ra sva raḥ /

その後、マドゥラスヴァラはそれらの阿羅漢たち、かの山地の住民たちと一緒に、師（仏）に会うために、ジェータヴァナに行った。

/ de nas dgra bcom de dag dang / / ri brag na gnas de dag bcas /
/ sbrang rtsi'i dbyangs ni rgyal byed kyi / / tshal du ston pa blta ru song /

49d blta] δ : lta β .

tatra divyajanānītair bhogais tridaśasādhitaiḥ /
sa sudhārasasaṃskārair bhagavantam apūjayat // 84.50 //

/ ta tra di bya ja nā nī tairbho gesti da śa sva dhi taiḥ / sa su dhā ra sa saṃ skā rairbha ga banta ma pū ja (yata D: yat_ T) /

其処で、天界で［調理が］完成され、天人たちによって運ばれてきた、スダー（不死の甘露）による味付けをもつ食事をもって、彼は世尊を供養した。
/ lha yi skye bos 'ongs pa yi / / longs spyod skabs gsum pas bsgrubs pa /
/ bdud rtsi'i ro ldan 'du byed kyis / / der ni de yis bcom ldan mchod /

śuddhaprasādajananīṃ bhagavān dharmadeśanām /
hitāya vidadhe teṣāṃ mokṣamārgāgradūtikām // 84.51 //

/ śuddha pra sā da {T509a} ja na nīṃ bha ga bāndharmma de śa nā / hi tā ya bi da dhe te ṣāṃ mo kṣa mārgā gra du ti kāṃ /

世尊は彼らに、利益のために、清らかな浄信を生じさせる解脱の道への最高のガイドである法の説示を行った。
/ bcom ldan 'das kyis de dag la / / thar pa'i lam mchog gsal byed cing /
/ dag pa'i dang ba skyed byed pa'i / / chos ni phan slad bstan par mdzad /

51c skyed byed pa'i] β : bskyed pa yi δ .　　**51d** par] δ : pa β .

sudhīro 'py amṛtaprāptau jñātvā putrasya pātratām /
hemābjaṃ sukṛtotpannaṃ prāpya jetavanaṃ yayau // 84.52 //

52a amṛtaprāptau] Br1 Br2: amṛtaprāptyai A B E Ed.

/ su dhī ro pya mṛ ta prāptau jñā tvā pu tra sya pā tra tāṃ / he mābjaṃ su kṛ totpannaṃ prā pya je ta ba naṃ ya yau /

スディーラ（マドゥラスヴァラの父）も、アムリタ（不死の甘露）の獲得における、息子がもつ器量（能力の大きさ）を知ってから、善行から生じた黄金の蓮を得て、ジェータヴァナに趣いた。
/ bu ni bdud rtsi'i snod nyid thob / / shes nas shin tu brtan pas kyang /
/ legs byas las 'khrungs gser gyi pad / / bzung nas rgyal byed tshal du song /

52a snod] δ : gnod β .　　**52b** brtan] δ : bstan β .

52c gser] δ GN: gzer Q.

sa tenābhyarcya sugataṃ caraṇālīnaśekharaḥ /
dṛśā tasya prasādinyā samunmṛṣṭa ivābhavat // 84.53 //

53b °śekharaḥ] Br2 E Ed.: °śeyakharaḥ Br1: °śeṣaraḥ A B.

53c prasādinyā] A Br1 Br2 Ed.: prasādādinyā E B.

53d samunmṛṣṭa] Br1 Br2: samumṛṣṭaḥ A: samṛṣṭa B E: sa saṃmṛṣṭa Ed.

/ sa te nā bhya cya su ga taṃ ca ra ṇā lī na śe kha raḥ / dṛ śā ta sya pra sā di nya sa munmṛṣṭa i bā bha bata /

かの［父］は頭頂をみ足につけ、それ（黄金の蓮）をもって善逝に供養した時、まるでその方の仁慈ある視線によって拭き清められたかのようであった。

/ de yis bde gshegs mngon mchod cing / / zhabs la cod pan gyis gtugs te /
/ de yi spyan ni rab dang bas / / rab tu phyis pa bzhin du gyur /

53c bas] δ : ba β .

tatas tam ūce bhagavān āsannakuśalodayam /
pādanyāsoditasvarṇakamalas tvaṃ bhaviṣyasi // 84.54 //

54c pādanyāso°] A Br2 Ed.: pānyāso° Br1.

/ ta tasta mu ce bha ga bāna sanna ku śa lo da yaṃ / pā da nyā so da ti svarṇṇa ka ma lastraṃ bha bi ṣya ti /

すると近いうちに幸せの出現をもつであろう彼に、世尊は語った。「足を降ろすと［地に］生じた黄金の蓮をもつ者に、あなたはなるでしょう。

Note **54b**] kuśala を幸せと訳した。仏に黄金の蓮を与えたという善根の結果としての幸せ。

/ de nas nye bar dge ba dang / / de la bcom ldan gyis gsungs pa /
/ rkang pa bkod pas gser gyi ni / / padmo 'khrungs par khyod 'gyur ro /

padmottara iti khyātaḥ samyaksaṃbuddhatāṃ gataḥ /
sattvasaṃtāraṇaṃ kṛtvā parinirvāṇam eṣyasi // 84.55 //

55a khyātaḥ] A B Br2(post corr.) E Ed.: khyātāḥ Br2(ante corr.) Br1.

/ padmotta ra i ti khyā tāḥ samyaksaṃ buddha tāṃ ga taḥ / sa tva santā ra ṇa {D204a} kṛ tvā pa ri nirbba ṇa me ṣya si /

［あなたは未来世に］パドモーッタラという名の正等覚（仏）になり、有情の救済をなしてから、涅槃に入るでしょう。」

/ padmo'i mchog ces grags pa yi / / yang dag rdzogs sangs rgyas 'gyur te /
/ sems can yang dag bsgral byas nas / / yongs su mya ngan 'da' bar 'gyur /

sarvajñenety abhihite sudhīraḥ satyadarśinā /
jagatkalyāṇakalanāmanoratham athādade // 84.56 //

56a abhihite] A(post corr.) Br1 Br2: abhihitaḥ A(ante corr.) E Ed.: abhihiteḥ B.

56b °darśinā] A Br2 E Ed.: °darśanā Br1: darśina B.

56c kalanā] A B Br1 E Ed.: kala[t]ā Br2.

/ sarbba jñe ne tya bhi hi te su dhī raḥ pa tya darśa nā / ja gadka lyā ṇa la nā ma no ra tha ma tha da de /

真実を見る一切智（仏）によってこのように語られた時、スディーラは生類を幸せにする行為への願い（誓願）を得た。

/ kun mkhyen bden pa gzigs pa yis / / de skad brjod tshe shin tu brtan /
/ 'gro ba'i dge legs brtags pa yi / / yid la re ba bzung bar gyur /

56b brtan] δ : bstan β .　　**56c** brtags] δ : brtag β (also possible).

bhaktyā yair bhavabhedino bhagavataḥ puṇyapraṇāmakṣaṇe
śāstuḥ svastikṛtaṃ kṛtaṃ sukṛtibhiḥ pādopadhānaṃ śiraḥ /
aṅke te jananījanasya na punas tṛptiprayuktāḥ stana-
stanyottānitadantaśūnyavadanāḥ kurvanti mūḍhasmitam // 84.57 //

/ bhaktya yairbha ba te di no bha ga ba taḥ pu ṇya pra ṇā makṣa ṇe śāstuḥ sva sti kṛ taṃ kṛ taṃ su kṛ ti bhiḥ pā do pa dhā naṃ śi {T509b} raḥ / aṃ ke te ja na nī ja na sya na pu na stṛpti pra yuktāstanasta nyotta ni ta danta śū nya (pa D: ba T) da nāḥ kurbbanti mū ḍhasmi taṃ /

［締め括りの詩：］　熱烈な信仰（バクティ）をもって、福徳のある礼拝をなす時に、およそ善人たちは、輪廻的生存を破断する者である世尊・師の、御足の上に頭をつけることをなし、［師の］安寧（スヴァスティ）を祈る。母である女たちのふところで［抱きかかえられ］、満腹をそなえもち、乳房の乳に向かって口を開いている、歯の無い口をもつ彼らは、二度と愚者のような微笑をすることはない。

Note **57cd**] 詩節後半の文をどう解釈すべきであろうか。その文は、善行をなす者たち（sukṛtin）である彼らはもう二度と赤ん坊として愚かな微笑を浮かべることがないという主旨である。著者はこの文をもって、彼らが二度と輪廻せず、愚かな赤ん坊として誕生することはない、といいたいのであろうか。それとも、彼らが再び誕生する時には、彼らは菩薩として正覚を達成するために生まれてくるので、釈尊の地上における誕生の場合のように、赤ん坊でありながら正念正知を保って、賢者として生まれてくるため、二度と愚かな微笑を浮かべる無知な赤ん坊になることは無い、といいたいのであろうか。

/ gus pas bsod nams phyag 'tshal dus su srid pa 'bigs byed bcom ldan ston pa yi /
/ zhabs ni legs byas ldan pa gang gis mgo la bde legs byas par bzung byas pa /
/ de dag phyi nas skye bo ma yi phang du tshim sbyor nu ma'i 'o ma la / / gan rkyal du nyal so yi stong ba'i bzhin ni blun po'i 'dzum du byed mi 'gyur /

57b gang gis] β : gang gi δ ‖ bzung byas pa] δ : gzung byas la β .

57d so yi] δ G: so yis NQ.

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisattvāvadānakalpalatāyāṃ madhurasvarā-
vadānaṃ caturaśītitamaḥ pallavaḥ //

/ i ti kṣe mendra bi ra ci tā yāṃ bo dhi sa tvā ba da na kalpa la tā yāṃ ma dhu ra svarā ba dā naṃ ca tu ra (śī D: śā T) ti ta maḥ palla vaḥ //

以上、クシェーメーンドラ作『菩薩のアヴァダーナの祈願成就の蔓草』における「マドゥラスヴァラのアヴァダーナ」という第84の小枝（章）。

/ zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi 'khri shing las sbrang rtsi'i dbyangs kyi rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste brgyad bcu rtsa bzhi pa'o /

★

私はこれまで発表してきた各章の校訂の Apparatus criticus において、梵・蔵２言語を併記する bilingual 本（デルゲ版とダライ・ラマ５世木版印刷版）の蔵字梵文音写テクストを[39]、全文のローマ字転写によって示してきたが、今回の論文ではそれを示すべきかどうか、迷った。デープン寺の２写本が、Zha lu lotsāva Chos skyong bzang po が bilingual 本の蔵字梵文音写テクストを準備する時に直接用いた梵文写本であるなら、研究者はその写本を見れば、字の写し誤りが多い蔵字梵文音写テクストのほうを見なくてもすむことになる。今回の論文では念のため、これまで通りに蔵字梵文音写テクストの全文のローマ字転写も載せることにした。しかし第84章の校訂を終えて、私の校訂の結果をふり返ると、デープン寺の Br1, Br2 の２写本があれば、蔵字梵文音写を見なければいけない箇所は無かった。Br1, Br2 の写本の発見によって、校訂における蔵字梵文音写テクストの有用性は下がったといえる。ただ、Kalpalatā の全体の中で Br1 写本しか写本が存在しない部分においては、蔵字梵文音写テクストの読みは校訂においてなお有用であり続ける。

次に挙げる表は、デルゲ版とダライ・ラマ５世版で調べた蔵字梵文音写の読みと、A, Br1, Br2 の３貝葉写本の読みを比較したものである。その３貝葉写本の読みに違いがあって、貝葉写本のそれぞれの異読を「蔵字梵文音写に近い読み」と「遠い読み」とに分けられる場合に注目して、それらの事例を表にまとめてみた。「蔵字梵文音写の読み」を表の左の列に置き、３写本の「蔵字梵文音写に近い読み」を表の中央の列に、「遠い読み」を右の列に置いた。

なぜこのような表を作ったかというと、蔵字梵文音写の読みがネパールの A 写本よりもチベットのデープン寺写本 Br1, Br2 に近い（たぶん Br1, Br2 に基づいて作られている）、ということを実際に確認したかったからである。この表をみて、蔵字梵文音写は

39. チョーネ版も梵蔵併記版であるが、デルゲ版から派生した版なので、私は参照しなかった。

やはり系統的に、ネパールの A ではなく Br1, Br2 の読みに近い、と結論づけることができる。表の中の、私が太字にした行が、その結論を支持する。

では蔵字梵文音写は Br1 と Br2 のどちらかの写本だけに基づいて作られたものなのか（可能性１）、それとも、音写は片方の写本だけでなく両方の写本を用いて適当にどちらかの読みを採用して作られたのか（可能性２）、その点もこの表から確かめることが出来るだろうか。表をみると、「蔵字梵文音写が Br1 に近い事例」と「Br2 に近い事例」とがそれぞれ表中に存在しているのがわかるので、可能性２の「両方の写本を適当に使って作った」のほうが恐らく事実に近いのであろう。蔵字梵文音写は転写の誤りが多く、またこの第84章だけでは事例の数が少ないので、他章も広く見ないとまだはっきり断言することができないが、今のところは、「蔵字梵文音写の読みがいつも Br1 と Br2 のどちらか片方の貝葉写本だけを使っているとは考えられない」といってよいと思われる。蔵字梵文音写は 6a, 21b, 37c, 41c, 56b などの箇所では Br2 でなく Br1 に近い（恐らく Br1 に依った）と言えるが、しかし 18a, 53d, 54c などの箇所は Br2 に近い（恐らく Br2 に依った）と言える。

蔵字梵文音写と３貝葉写本の読みの比較

	蔵字梵文音写	蔵字音写に近い写本の読み	遠い写本の読み
3d	**bya rā ja ta**	**vyarājata Br1 Br2**	**vyarejata A**
4b	sa yo dha rā	payodharā A Br1	payodharāḥ Br2
5c	pra pā ta nāta	prapatanāt_ Br1 Br2	prapatanān A
6a	da ri dra tāṃ	°daridratāṃ A Br1	°dāridratāṃ Br2
7b	pra śānteryā	praśānteryā° A Br2	praśāṃteryā° Br1
9d	śānti bra ta pa	śāntivratapa° A Br2	śāntivrataṃ pa° Br1
13c	**da darśa tvi ṣāṃ**	**dadarśa tviṣāṃ Br1 Br2**	**dadarśa sa tviṣāṃ A**
17b	je ta	jeta° A Br1	jaita° Br2
18a	ni je pu ṇyair	nijaiḥ puṇyair Br2	nijair apuṇyair A Br1
19a	tadbṛttāṃ	tadvṛttān° A Br2	tat_vṛttān° Br1
21b	bha ra cya tāṃ	°bhir arcyatām A Br1	°bhir abhyarcyatāṃ Br2
22b	**u pā kṛ taiḥ**	**°upākṛtaiḥ Br1 Br2**	**°upāhṛtaiḥ A**
24a	**pra buddha**	**prabuddha° Br1 Br2**	**pravṛddha° A**
27b	**kā na nāṃ taḥ**	**kānanānta Br1 Br2**	**kānanānte A**
28c	saṃ ghā taṃ	saṃghātaṃ A Br2	saṃghāta Br1
29c	**cau ra cakre ṇa**	**cauracakreṇa Br1 Br2**	**coracakreṇa A**

30b	mu cya tāṃ sa	mucyantāṃ sa° Br2, mucyaṃtāṃ sa° A	mucyatāṃ tāṃ sa° Br1
33cd	samba to	sasvato° Br1 Br2	śāśvato° A
35a	śollambi bhir	°grāllambibhir Br1 Br2	°grālambibhir A
37c	śutkṛtta hṛt	°śūtkṛttahṛt° A Br1	°śūtkṛttakṛt° Br2
38b	bai śa sā	vaiśasā° Br1 Br2	vaiśaśā° A
41c	śāstur	śāstur A Br1	śāstuḥ Br2
43a	**te**	**te Br1 Br2**	**tais A**
45c	mūrdha ni	mūrdhani Br1 Br2(post corr.)	mūrdhini A Br2(ante corr.)
46b	bi lo kyai ba	vilokyaiva Br1 Br2	vilokyeva A
47a	kṣāntyai	kṣāntyai Br1, kṣāṃtyai Br2	[śā]ntyai A
48a	**a taste**	**atas te Br1 Br2**	**atra te A**
52a	**prāptau**	**°prāptau Br1 Br2**	**°prāptyai A**
53d	sa munmṛṣṭa	samunmṛṣṭa Br2, samunmṛṣṭaḥ Br1	samumṛṣṭaḥ A
54c	pā da nyā so	pādanyāso° A Br2	pānyāso° Br1
56a	a bhi hi te	abhihite A(post corr.) Br1 Br2	abhihitaḥ A(ante corr.)
56b	darśa nā	°darśanā Br1	°darśinā A Br2

第84章の非重要な異読の報告

1．チベット訳の諸版の正字法上の異読

以下、] の記号より前にある語形が、校訂テクストの語形であり、その記号の後ろにある語が、或る版の正字法上の異読を示す。

3b rin chen] rin cen T. **4d** rin chen] rin cen T. **6a** rin chen] rin cen T. **9d** yongs su] yongsu G. **17c** rin chen] rin cen T. **18c** rin chen] rin cen T. **26d** skyabs su] skyabsu G. **35d** yongs su] yongsu G. **45d** rin chen] rin cen T. **54d** 'gyur ro] 'gyuro G. **55d** yongs su] yongsu G.

2．チベット訳の諸版の特殊な異読（Sonderlesungen）

以下、] の記号より前にある語形が、校訂テクストの語形（正しい語形）であり、その記号の後ろにある語が、或る一つの版の特殊な異読を示す。例えば、23c rin chen] rin cen T という記述は 23c rin chen] DGNQ: rin cen T と表現するのと全く同じである。

11a brjod] brdzod Q. **11d** spu] spu'i G. **12c** dga' bo] dga' ba N. **18d** sol] sos G. **21c** longs] 'ongs G. **23c** rin chen] rin cen T. **24a** sad] bsad G. **26d** mchog] cog T. **28a** gyis] la G. **32d** 'jigs su] 'jigsu G. **34d** khyab] byas G. **35c** ba yi] ba yis G. **46a** ba de] ba yi G. **48b** ba yi] ba yis G. **50c** byed kyis] byed kyi T. **57c** phyi] phyin G.

3．梵文写本における特殊な異読（Sonderlesungen）

以下、] の記号より前にある語形が、私の校訂テクストにある語形（正しい語形）であり、その記号の後ろにある語形が特殊な異読を示す。これは写本の中に沢山ある無意味な書き誤り等の異読をすべて本文の異読注として挙げると、真に重要な異読がそれらの無視してよい異読の中に埋もれてしまい、見えづらくなってしまうので、そうならないようにする配慮として、本文の異読注とは別に記するものである。本文の異読注には重要な異読のみを挙げた。

6b ratnavarṣiṇā] ratnavarṣiṇaḥ B. **7c** ānandaṃ] ānaṃda B. **9b** abhāṣata] aṣata A. **10b** śamasu°] samasu° B. **20c** bhagavantam] bhagavatam B. **21b** tasmād] tasmā B. **22b** saṃbhārais] saṃbhārai Br1. **22c** śāntyai] śātvai B. **27c** uktaṃ] ukta E. **29d** bhikṣavaḥ kramāt] bhikṣavallabhāt B. **31b** saṃghaḥ] sadyaḥ B. **31d** taṃ yayuḥ] te yayuḥ E. **32ab** °naddhair nītas tair] °naddhai nītas tai B. **34b** °āśataiḥ] °āsataiḥ B. **34d** mayair iva] mayor iva B. **35b** parivāritam] parivārite B. **35d** mṛtyunā] mṛtyunaḥ B. **36c** śabarī°] śabarai° B. **42c** nibaddhavadhya°] nibaddhabāṣpa° E. **44a** atrāntare] antrāntare A. **44b** bhūtānāṃ] bhujānāṃ E. **48b** pravrajyāṃ] pravrajyā B. **52c** hemābjaṃ] hemā aṃ B. **53c** dṛśā] dṛṣṭvā B. **57a** bhavabhedino] bhavamedino B. **57c** tṛptiprayuktāḥ] tṛptiḥ prayuktā E.

APPENDIX

Avadānakalpalatā 梵文と蔵訳の語の対応関係の確認

将来の索引作りのために、最後に付録として、梵蔵を一字一句対照させておきたい。以下の表記に関する注意：梵文と蔵訳の語の対応関係を示す際に、代名詞と動詞と一部の副詞は、語尾変化が付いた活用形で示す。しかし名詞と形容詞については、語尾変化形を出さずに、基本的に語幹の形で示し、語幹の後につけた1～8の数字で梵語の八つの格を示す。例：aśva1 = aśvaḥ, aśva2 = aśva (voc.), aśva3 = aśvam, aśva4 = aśvena, aśva5 = aśvāya, aśva6 = aśvāt, aśva7 = aśvasya, aśva8 = aśve. 両数と複数の場合も、格の表現には単数と同じ数字を用いる：aśva1 = aśvaḥ or aśvau or aśvāḥ.

第84章 Madhurasvara

/ gang gis (= yaḥ) legs pa'i yid can rnams kyis (= sumanas7) yid ni (= manas3) kun dga' mnyen ldan (= ānandasāndra3) *rigs par byed (= aucitya4) / / gang gi (= yasya) mthu yis (= anubhāva6) gdug rnams kyi (=

krūra7) yang (= api) yongs su 'dris pa'i (= paricita1) mun pa (= tamas1) zhi bar byed (= śīryate) / / gang gi (= yasya) bsod nams (= puṇya1) grangs med (= niḥsaṃkhya-) grangs kyi (= saṃkhyā-) tshig *gis (= pada4) tshad kyi (= māna-) yul du mi 'gyur ba (= kalanāṃ na yāti) / / 'gro ba (= jagat) thul ba'i (= jitajagat-) mgon po (= nātha-) rab rgyas mthu ldan (= prabhāvodbhava1) de (= sa) nyid gcig pu (= ekaḥ) 'byung ba yin (= jāyate) / 1 /

/ mnyan yod du (= śrāvastī8) sngon (= purā) khyim na gnas (= gṛhamedhin7) / / dpal ldan (= śrīmat1) shin tu brtan pa yi (= sudhīra7) / / chung ma (= jāyā8) mig bzang ma dag la (= sunetrā8) / / 'dod pa'i (= īpsita1) bu ni (= sūnu1) btsas par gyur (= ajāyata) / 2 /

/ skyes pa tsam na (= jātamātra1) rab 'khrungs pa (= samudbhūta8) / / lha yi rin chen gyis (= divyaratna-) brgyan pa'i (= vibhūṣita8) / / khri stan (= paryaṅka8) rang gi bsod nams *kyi (= svapuṇya-) / / mtshan la (= aṅka8) gang zhig (= yaḥ) nyer 'khod (= upaviṣta1) mdzes (= vyarājata) / 3 /

/ de skyes tshe na (= tasya janmani) chu 'dzin ni (= payodhara1) / / snyan zhing (= madhura-) 'jam pa'i (= snigdha-) sgra dbyangs can (= nirghoṣa1 / / sbrang rtsi (= madhu-) 'bebs pas (= varṣin1) me tog (= puṣpa4) dang / / bcas pa'i (= saha) rin chen (= ratna3) char pa phab (= vavṛṣuḥ) / 4 /

/ rdzogs pa'i (= pūrṇa1) gzhon nu (= kumāra1) lus ngan *gyi (= kaubera4) / / gter ni brgya yis (= nidhānaśata4) bskor ba (= vṛta1) de (= saḥ) / / sbrang rtsi'i char pa (= madhuvṛṣṭi-) bab pa las (= prapatana6) / / sbrang rtsi'i dbyangs (= madhurasvara1) zhes bya bar gyur (= ity abhūt) / 5 /

/ rin chen char 'bebs (= ratnavarṣin4) de yis ni (= tena) / / sa la (= bhuvana8) dbul ba med nyid (= adaridratā3) bsgrubs (= nīta8) / / gang du'ang (= kvāpi) bya rog dkar po (= śvetakāka1) bzhin (= iva) / / slong ba po ni (= yācaka1) mthong ma gyur (= naivādṛśyata) / 6 /

/ nam zhig (= kadā cid) dge slong (= bhikṣu3) kun dga' bo (= ānanda3) / / rab zhi (= praśānta-) 'phags pa'i lam (= īryāpatha- or āryāpatha-?) gnas pa (= sthita3) / / khyim du (= gṛha-) byon pa (= āyāta3) des (= saḥ) mthong nas (= ālokya) / / mdun du (= puras) pha la (= pitṛ3) rab dris pa (= papraccha) / 7 /

/ yab gcig (= tāta2) dri med dge ba (= vaimalya-) can (= śālin7) / / 'di yi (= asya) brtul zhugs (= vrata-) *khyad (= viśeṣa1) ni (= ayam) ci (= kaḥ) / / gang zhig (= yasya) yang dag mthong nyid na (= saṃdarśana4 eva) / / 'phral la (= sadyas) yid ni (= manas1) dang bar byed (= prasīdati) / 8 /

/ ces pa (= iti) bu yi (= putra7) tshig (= vacas3) thos nas (= śrutvā) / / shin tu brtan pas (= sudhīra1) de la (= tam) smras (= abhāṣata) / / bu gcig (= putra2) snying stobs (= sattva-) rab gsal (= prakāśa1) 'di (= ayam) / / zhi ba'i (= śānti-) brtul zhugs (= vrata-) yongs su 'dzin (= parigraha1) / 9 /

/ gang zhig (= yaḥ) 'jigs rung (= ghora-) 'khor ba'i (= saṃsāra-) mtsho la (= arṇava8) mtha' dag (= samasta-) 'gro ba'i (= jagat7) zam stegs (= setu1) drang po (= sarala1) dang (= ?) / / khro ba'i (= krodha-) nad kyis (= vyādhi-) gso byed dag (= cikitsaka1) dang (= ?) zhi ba'i (= śama-) bdud rtsi'i (= sudhā-) snying pos (= sāra4) sred (= tṛṣṇā-) 'phrog (= apaha1) dang (= ?) / / skyon gyi (= doṣa-) tshogs kyi (= utsikta?) mun pa (= tamas-) zhi byed (= virāma-) nyi ma (= taraṇi1) sangs rgyas (= buddha1) 'od zer rab rgyas pa (=

pravṛddha-dyuti1)/ / de yi (= tasya) nyan thos (śrāvaka1) zhi ba'i (= śānta-) yid can rnams kyi (= manas7) mchog gyur (= agraṇī1) 'di ni (= eṣaḥ) kun dga' bo (= ānanda-) / 10 /

/ bcom ldan 'das kyi (= bhagavat7) mngon brjod dag (= abhidhāna3) / / thos pa nyid na (= śrutvaiva) sbrang rtsi'i dbyangs (= madhurasvara1) / / sngar skye (= prāgjanma-) dge ba (= kuśala-) rgyas pa las (= udaya6) / / ba spu rab tu langs par (= udbhūtaromāñca1) gyur (= babhūva) / 11 /

/ de nas (= atha) kun dga' dang bcas (= sānanda1) des (= saḥ) / / gus pas (= praṇaya-) mngon phyogs (= unmukha1) phyag 'tshal te (= praṇamya) / / dge slong tshogs (= bhikṣusaṅgha4) bcas (= sahitam) kun dga' bo (= ānanda3) / / longs spyod kun gyis (= sarvabhoga4) rab tu mchod (= apūjayat) / 12 /

/ de nas (= tatas) 'dun pas (= autsukya6) de nyid (= tenaiva) dang / / lhan cig (= saha) rgyal byed tshal (= jetavana3) song nas (= gatvā) / / 'od zer (= tviṣ7) phung po (= rāśi3) bcom ldan 'das (= bhagavat3) / / de bzhin gshegs pa (= tathāgata3) mthong gyur te (= dadarśa) / 13 /

/ padma (= padma-) 'dab ma (= palāśa-) rgyas pa'i (= phulla-) spyan (= akṣa3) / / mchog gi (= divya-) mtshan nyid dag gis (= lakṣaṇa-) mtshan (= lakṣita3) / / mdzes shing (= lāvaṇya-) yid 'ong (= lalita-) rnam pa can (= ākāra3) / / gser gyi (= hema-) ta la (= tāla) bzhin du (= iva) mtho (= unnata3) / 14 /

/ bdud rtsis (= amṛta4) byugs pa (anoint = limpat3) lta bu ste (= iva) / / mthong nas (= dṛṣṭvā) dga' ba (= harṣa-) rab rgyas pa (= nirbhara1) / / de yi (= tam) spyi bor (= mūrdhan8) 'phreng ba (= mālā3) bzhin (= iva) / / de yi (= tat-) zhabs sen (= pādanakha-) 'od zer (= dyuti3) blangs (= ādade) / 15 /

/ 'bad pas (= praṇaya-?) gsol ba btab pa yis (= arthanā4) / / gus pa (= praṇayin-) mnyes gshin (= vatsala1) bcom ldan 'das (= bhagavat1) / / dge slad (= prīti5) de yi (= tasya) khang par (= gṛha8) byon (= gatvā) / / mchod ston (= bhoga-) rab tu bzhes pa (= parigraha3) mdzad (= cakāra) / 16 /

/ bcom ldan 'das ni (= bhagavat8) mngon mchod nas (= abhyarcita8) / / rgyal byed tshal du (= jetakānana3) gshegs pa'i tshe (= prayāta8) / / skye bo'i tshogs ni (= janatā3) rin chen gyis (= ratna-) / / sbrang rtsi'i dbyangs kyis (= madhurasvara1) yongs rdzogs byas (= saṃpūrṇāṃ cakāra) / 17 /

/ dbul po rnams kyi (= niḥsva7) khyim khyim du (= gṛhe gṛhe) / / rang gi (= nija4) bsod nams ma yin pas (= apuṇya4) / / rin chen phung po (= ratnarāśi1) des byin pa (= tadvitīrṇa1) / / skad cig nyid kyis (= kṣaṇenaiva) sol (= aṅgāra-) phung gyur (= rāśitāṃ jagāma) / 18 /

/ de nas (= atha) byung tshul de (= tadvṛttānta3) thos nas (= ākarṇya) / / sbrang rtsi'i dbyangs ni (= madhurasvara1) sdug bsngal zhing (= duḥkhita1) / / de dag la (= tān) smras (= uvāca) khyod kyis (= bhavat4) sngon (= purā) / / legs byas dag ni (= sukṛta1) yongs ma byas (= naiva kṛta1) / 19 /

/ brtse bas (= dayā4) sbyin pa (= dāna3) ma byin zhing (= adattvā) / / dge 'dun (= saṃgha-) mchod pa (= pūjana3) ma byas la (= akṛtvā) / / bcom ldan (= bhagavat3) mngon par ma mchod pas (= anabhyarcya) / / 'byor pa dag ni (= vibhūti1) thob ma yin (= na labhyante) / 20 /

/ de slad (= tasmāt) khyod kyis (= yuṣmābhiḥ) bde gshegs la (= sugata-) / / sogs pa'i (= pramukha1) dge

'dun (= saṃgha1) mngon par mchod (= arcyatām) / / khyod la (= vaḥ) longs spyod dag gi (= upabhoga-) tshogs (= sāmagrī3) / / thams cad (= sarva-) bdag gis (= aham) phun tshogs bgyi (= saṃpādayāmi) / 21 /

/ zhes pa (= iti) des (= tena) bskul (= prerita1) de dag gis (= te) / / de yi (= tad-) nyer bsgrubs (= upākṛta or upāhṛta4) tshogs rnams kyis (= saṃbhāra4) / / bcom ldan (= bhagavat3) dge 'dun dang bcas pa (= sasaṃgha3) / / sdig pa (= aṃhas7) zhi ba'i slad du (= śānti5) mchod (= apūjayan) / 22 /

/ de nas (= tatas) de tshe (= tatkṣaṇa-) dge ba byas (= kṛtakalyāṇa1) / / sdig pa zad pa (= kṣīṇakalmaṣa1) de dag gis (= te) / / rang khyim (= svagṛha3) rab 'bar (= dīpta4) rin chen gyi (= ratna-) / / phung pos (= rāśi4) kun tu gang ba (= saṃpūrṇa3) mthong (= dadṛśuḥ) / 23 /

/ de nas (= tatas) chags bral (= vairāgya1) sad pa yi (= *prabuddha-) / / blo dang ldan pa (= dhīmat1) sbrang rtsi'i dbyangs (= madhurasvara1) / / bcom ldan 'das kyi (= bhagavat7) drung (= antika3) song nas (= gatvā) / / rab tu zhi slad (= praśānti5) rab byung (= pravrajyā3) blangs (= ādade) / 24 /

/ ston pa'i (= śāstṛ7) bka' yis (= śāsana6) dul ba yi (= niyata-) / / brtul zhugs can gyis (= vrata1) mnyan yod (= śrāvastī3) btang (= tyaktvā) / / skye bo'i mtha' yi (= janaparyanta-) gtsug lag khang (= vihāra3) / / ri brag dag la (= karvaṭa-) brten par (= āśraya3) song (= jagāma) / 25 /

/ der (= tatra) des (= tena) bslab pa'i gnas (= sikṣāpada1) byin pa (= datta-) / / ri brag pa yi (= kārvaṭika1) skye bo rnams (= jana1) / / nyon mongs (= kleśa-) dug ni (= viṣa-) rab zhi'i slad (= praśānti5) / / dkon mchog gsum la (= ratnatraya3) skyabs su song (= śaraṇaṃ yayau) / 26 /

/ gnas skabs (= avasara8) der ni (= asmin) chom rkun pa (= caura1) / / nags kyi mtha' na (= kānanānta-) gnas pa rnams (= nivāsin1) / / dur ga'i (= durgā-) ya stags (= upahāra5) khas blangs pa'i (= ukta3) / / mi ni (= nara3) tshol ba dag la zhugs (= anveṣṭum udyayuḥ) / 27 /

/ phra ma can gyis (= piśuna4) rab bstan pa'i (= pradarśita3) / / gtsug lag khang (= vihāra3) der (= tam) de dag (= te) 'ongs (= āsādya) / / gaṇḍī'i sgra la (= gaṇḍīśabda-) 'dus pa yi (= samāgata3) / / dge slong (= bhikṣu) dge 'dun tshogs rnams (= saṃghāta3) bcings (= babandhuḥ) / 28 /

/ ya stags slad du (= upahāra5) dge slong ni (= bhikṣu1) / / gcig nyid kho na (= eka eva) bdag cag (= asmākam) 'dod (= īpsita1) / / chom rkun tshogs kyis (= cauracakra4) 'di brjod tshe (= ity ukte) / / dge slong rnams kyis (= bhikṣu1) rim pas (= kramāt) smras (= jagaduḥ) / 29 /

/ ya stags don du (= upahārārtham) bdag (= mām) zung la (= ādāya) / / dge slong thams cad (= sarvabhikṣu1) gtang bar mdzod (= mucyantāṃ) / / ces pa (= iti) rgan (= vṛddha4) rim gyis (= krameṇa) brjod tshe (= ukta8) / / sbrang rtsi'i dbyangs kyis (= madhurasvara1) rab smras pa (= provāca) / 30 /

/ nga nyid kho na (= aham eva) ya stags don (= upahārārha1) / / dge 'dun (= saṃgha1) thams cad (= sarva1) rnam par thong (= vimucyatām) / / zhes pa (= iti) thos nas (= ākarṇya) de dag gis (= te) / / rnam pa mchog ldan (= varākāra3) de (= tam) bzung (= samādāya) song (= yayuḥ) / 31 /

/ gsod par (= vadha-) chas pa (= saṃnaddha4) de dag gis (= taiḥ) / / bcings (= baddha1) khyer (= nīta1)

rnam 'gyur blo med (= nirvikāradhī1) des (= saḥ) / / du rga'i gnas ni (= durgāyatana3) nags nang du (= gahanodara8) / / shin tu 'jigs su rung ba (= atyugra3) mthong (= dadarśa) / 32 /

/ de (= tat) yang (= ca) dus mtha'i (= kalpānta-) sprin gyis (= megha4) bzhin (= iva) / / gtor ma la ni (= bali-) bstar byas pa'i (= sajjīkṛta4) / / ma he (= māhiṣa4) sre bo (= *śabala4) rags pa yi (= sthūla-) / / rtag tu (= śāśvata-) ya stags dag gis (= upahāra4) gang (= pūjita3) / 33 /

/ dpa' bos (= bhaṭa-) ban du dzi ba yi (= bandhujīva-) / / rang bzhin (= maya4) me tog 'phreng (= sragdāman4) spos (= utsṛṣṭa4) bzhin (= iva) / / ru ru'i khrag gi (= rururakta-) zer ma brgya (= chaṭāśata4) / / zhabs kyi rdo la (= pādaśilā-) chags pas (= sakta-) khyab (= vyāpta3) / 34 /

/ gshin rjes (= mṛtyu4) me tog rgyas pa yis (= phullakamala4) / / sgo la mchod pa byas pa (= kṛtadvārārcana3) bzhin (= iva) / / dril bu'i (= ghaṇṭā-) sngon du (= agra-) 'phyang ba yi (= ullambin4 or ālambin4) / / dpa' bo'i (= vīra-) mgo yis (= śiras4) yongs su bskor (= parivārita3) / 35 /

/ ri khrod ma yi (= śabarī-) rkang (= caraṇa-) bkod pas (= nyāsa-) / / sen rtsi (= alaktaka4) rab tu chags pa (= saṃsakta-) bzhin (= iva) / / mi khrag (= nararakta-) gsar pas (= pratyagra-) bsgos pa yi (= akta4) / / skas dag gis ni (= sopāna4) dmar ba'i 'od (= aruṇaprabha3) / 36 /

/ ya stags (= upahāra4) ma thob (= asaṃprāpta-) rngon pa yi (= kirāta-) / / bud med rnams kyis (= strī4) gus pa yis (= ādarāt) / / rang gi bu (= svaśiśu-) bcad (= utkṛtta-) snying gi ni (= hṛd-) / / padmas (= padma-) khyams kyi (= prāṅgaṇa-) kha khyer (= vedikā3) bkang (= kīrṇa-) / 37 /

/ de mthong (= taṃ dṛṣṭvā) srog chags rnams kyi (= prāṇin-) tshogs (= saṃghāta3) / / sdug bsngal (= vaiśasa-) ngal dub (= āyāsa-) bzod dka' zhing (= duḥsaha3) / / 'khor ba (= saṃsāra) chags bral (= udvega-) snying po can (= sāra3) / / sbrang rtsi'i dbyangs kyis (= madhurasvara1) rab tu bsams (= pradadhyau) / 38 /

/ de nas (= tatas) nyon mongs thams cad ni (= sarvakleśa-) / / yongs zad (= parikṣaya6) dgra bcom (= arhattva1) mngon du byas (= sākṣātkṛta-) / / khams gsum pa las (= *traidhātutas) chags bral (= vītarāga1) de (= saḥ) / / dga' dang mi dga' (= priyāpriya1) mtshungs par (= tulya-) gyur (= abhūt) / 39 /

/ des bsams (= so 'cintayat) gang gi drin gyis ni (= yatprasāda4) / / 'khor ba med pa (= niḥsaṃsāra-) bde ba'i (= sukha3) sa (= bhū3) / / kye ma (= aho) bdag gis thob pa (= prāpto 'haṃ) 'di (= ayam) / / ston pa (= śāstṛ7) srid pa gcod pa'i (= bhavacchid7) mthu (= prabhāva1) / 40 /

/ rmongs pa'i (= moha1) lcags sgrog brtan pa (= niviḍa-nigaḍa1) gcod cing (= chinna1) lta ba'i (= dṛṣṭi-) ri bo (= śaila1) nyams par byed (= khaṇḍita1) / / mi bzad (= viṣama-) sred pa'i (= tṛṣṇā1) chu bo (= taṭinī1) sgrol zhing (= tīrṇa1) skye ba'i ljon pa (= janma-vṛkṣa1) rab tu 'byin (= proddhṛta1) / / gang du (= yasmin) mya ngan (= śocanā-) mig la (= locana1) slar yang (= punar) mchi ma dag ni (= bāṣpa3) mi 'dzin pa (= na dadhati) / / ston pa'i (= śāstṛ7) drin gyis (= prasāda4) gdung ba (= vyasana-) zhi bar gyur pa'i (= śamana1) gnas (= dāman1) de (= tad1) rab tu thob (= prāpta1) / 41 /

/ ces bsams (= iti dhyātvā) snying stobs (= sattva-) rgya mtsho (= abdhi1) de (= saḥ) / / ri bzhin (= śaila iva) g.yo ba med par (= acala1) gnas (= tasthau) / / khro bas (= krodha-) mtshon blangs (= udyatāyudha4)

chom rkun gyis (= caura4) / / gsod rtags me tog 'phreng ba (= vadhyamālāṅka1) bcings (= nibaddha-) / 42 /

/ de (= tasya) lus (= gātra6) gser gyi (= kāñcana-) gzi ldan las (= varcas6) / / de dag rnams kyis (= taiḥ) gos dag (= vastra8) bshus (= apahṛta8) / / gos ni (= vāsas1) gzhan dang gzhan (= anyad anyad1) byung ba (= abhūt) / / de dag (= taiḥ) mdun du (= puras) phung por (= rāśi1) gyur (= abhavat) / 43 /

/ skabs der (= atrāntare) lha mo (= devī1) de yis ni (= sā) / / rab bskyed (= samudbhūta4) 'byung po (= bhūta7) lnga (= pañca4) brgya yis (= śata4) / / chom rkun dag ni (= taccaura-) lnga brgya po (= śatapañcaka3) / / rab tu g.yo ba med par byas (= niścalaṃ cakre) / 44 /

/ de dag (= tad-) mtshon gyi tshogs (= āyudhacaya8) lhung tshe (= cyuta8) / / sbrang rtsi'i dbyangs kyi (= madhurasvara-) spyi bor ni (= mūrdhan8) / / mkha' las (= nabhastala6) me tog dag gi char (= puṣpavṛṣṭi1) / / rin chen (= ratna-) rab tu mdzes pa (= ruciral) bab (= papāta) / 45 /

/ de nas (= atha) mkha' la (= vyoman3) 'gro ba (= gāhamāna3) de (= tam) / / chom rkun rnams kyis (= dasyu1) mthong gyur nas (= vilokya) / / de yi (= tasya) mthu yis (= anubhāva4) reg pa yis (= spṛṣṭa1) / / de nyid la ni (= tam eva) skyabs su song (= śaraṇaṃ yayuḥ) / 46 /

/ de nas (= tatas) bab ste (= avatīrya) bzod pa'i slad (= kṣānti5) / / rkang par (= caraṇa-) mgo (= mastaka3) bkod (= nyasta-) de dag la (= tān) / / nyes byas (= duṣkṛta3) thong la (= saṃtyajya) chos kyis ni (= dharma8) / / dga' bar mdzod cig (= ramadhvam) de yis (= saḥ) smras (= uvāca) / 47 /

/ de nas (= atas) de dag (= te) chags bral skyes (= jātavairāgya11) / / sdig pa (= vṛjina-) btang nas (= ujjhita1) 'khor ba yi (= saṃsāra-) / / 'ching ba (= āsrava-) zhi slad (= śānti5) rab byung ni (= pravrajyā3) / / blangs nas (= ādāya) dgra bcom gnas (= arhatpada3) thob gyur (= prāpuḥ) / 48 /

/ de nas (= tatas) dgra bcom (= arhat4) de dag (= taiḥ) dang (= ca) / / ri brag na (= karvaṭa-) gnas (= vāsin4) de dag (= taiḥ) bcas (= sahita1) / / sbrang rtsi'i dbyangs ni (= madhurasvara1) rgyal byed kyi / / tshal du (= jetavana3) ston pa (= śāstṛ3) blta ru (= draṣṭuṃ) song (= yayau) / 49 /

/ lha yi skye bos (= divyajana-) 'ongs pa yi (= ānīta4) / / longs spyod (= bhoga4) skabs gsum pas (= tridaśa-) bsgrubs pa (= sādhita4) / / bdud rtsi'i (= sudhā-) ro ldan 'du byed kyis (= rasasaṃskāra4) / / der ni (= tatra) de yis (= saḥ) bcom ldan (= bhagavat3) mchod (= apūjayat) / 50 /

/ bcom ldan 'das kyis (= bhagavat1) de dag la (= teṣām) / / thar pa'i (= mokṣa-) lam (= mārga-) mchog (= agra-) gsal byed cing (= dūtika3) / / dag pa'i dang ba (= śuddhaprasāda-) skyed byed pa'i (= jananī3) / / chos ni (= dharma-) phan slad (= hita5) bstan par mdzad (= deśanāṃ vidadhe) / 51 /

/ bu ni (= putra7) bdud rtsi'i (= amṛta-) snod nyid (= pātratā3) thob (= prāpti8) / / shes nas (= jñātvā) shin tu brtan pas (= sudhīral) kyang (= api) / / legs byas las (= sukṛta-) 'khrungs (born = utpanna3) gser gyi pad (= hemābja3) / / bzung nas (= prāpya) rgyal byed tshal du (= jetavana3) song (= yayau) / 52 /

/ de yis (= saḥ) bde gshegs (= sugata3) mngon mchod cing (= abhyarcya) / / zhabs la (= caraṇa-) cod pan gyis (= śekharal) gtugs te (= ālīna-) / / de yi (= tasya) spyan ni (= dṛś4) rab dang bas (= prasādin4) / / rab tu

phyis pa (= samunmṛṣṭa1) bzhin du gyur (= ivābhavat) / 53 /

/ de nas (= tatas) nye bar (= āsanna-) dge ba (= kuśala-) dang (= ?) / / de la (= tam) bcom ldan gyis (= bhagavat1) gsungs pa (= ūce) / / rkang pa bkod pas (= pādanyāsa-) gser gyi ni (= svarṇa-) / / padmo (= kamala1) 'khrungs par (= udita-) khyod (= tvam) 'gyur ro (= bhaviṣyasi) / 54 /

/ padmo'i mchog (= padmottara1) ces (= iti) grags pa yi (= khyāta1) / / yang dag rdzogs sangs rgyas 'gyur te (= samyaksaṃbuddhatāṃ gata1) / / sems can (= sattva-) yang dag bsgral (= saṃtāraṇa3) byas nas (= kṛtvā) / / yongs su mya ngan 'da' bar 'gyur (= parinirvāṇam eṣyasi) / 55 /

/ kun mkhyen (= sarvajña4) bden pa gzigs pa yis (= satyadarśin4) / / de skad (= iti) brjod tshe (= abhihita8) shin tu brtan (= sudhīra1) / / 'gro ba'i (= jagat-) dge legs (= kalyāṇa-) brtags pa yi (= kalanā-) / / yid la re ba (= manoratha3) bzung bar gyur (= ādade) / 56 /

/ gus pas (= bhakti4) bsod nams (= puṇya-) phyag 'tshal (= praṇāma-) dus su (= kṣaṇa8) srid pa (= bhava-) 'bigs byed (= bhedin7) bcom ldan (= bhagavat7) ston pa yi (= śāstṛ7) / / zhabs ni (= pāda-) legs byas ldan pa (= sukṛtin4) gang gis (= yaiḥ) mgo la (= śiras1) bde legs byas par (= svasti-kṛta1) bzung (= upadhāna1) byas pa (= kṛta1) / / de dag (= te) phyi nas (= punar) skye bo ma yi (= jananījana7) phang du (= aṅka8) tshim (= tṛpti-) sbyor (= prayukta1) nu ma'i (= stana-) 'o ma la (= stanya-) / / gan rkyal du nyal (= uttānita-) so yi stong ba'i (= dantaśūnya-) bzhin ni (= vadana1) blun po'i (= mūḍha-) 'dzum du (= smita3) byed mi 'gyur (= na kurvanti) / 57 /

追記　大正大学名誉教授 北條賢三博士が2019年5月28日に亡くなられた。先生は誠にひとりの菩薩であった。ご教化を他世界に遷された先生の蓮華の御足を心をこめて拝礼いたします。

※本研究は科研費（24520054）の助成を受けたものである。

<キーワード> Bodhisattvāvadānakalpalatā, Madhurasvarāvadāna, Subhāṣitamahāratnāvadānamālā, Avadānanaśataka, Avadānamālā, Tathāgatajanmāvadānamālā, Saṃbhadrāvadānamālā, Lalitavistara, Jayamuni

（九州大学大学院教授, Ph.D.）